

春日井市における世代間交流による 地域活性化・学生共育事業

平成28年度 成果報告書



中部大学

はじめに

中部大学は、建学の精神「不言実行、あてになる人間」を信条として、時代のニーズに対応しつつ地域社会に貢献できる人材の育成を進めてきました。その実績を踏まえつつ、平成 25 年度よりは、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（COC 事業）に採択された「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」において、様々な事業を展開してきました。

本学の COC 事業の目的は、大学が地域の知の拠点として、地域と連携した知の創造及びその継承を通じて、地域に貢献できる「あてになる」人材を育てることと、大学の持つ人材や技術、知の資産を使って地域再生、地域活性化に貢献する各種事業を展開して地域の活性化を図ることです。この目的を達成するために、学内で地域関連の正課教育（「地域共生実践」（2 単位）の開講と既存の地域関連科目の活用を行うとともに、本学と地域（春日井市、高蔵寺ニュータウン等）が連携して、報酬型インターンシップ、高齢者・学生交流（Learning Homestay）、シニア大学(中部大学アクティブアゲインカレッジ)、キャンパスタウン化、生活・住環境を考えるまちづくり、コミュニティ情報ネットワークの 6 事業を展開してきました。

本成果報告書は、事業採択から 4 年目となる平成 28 年度において、本学で実施した COC 事業の活動と成果をまとめたものであります。本報告書の内容を学内外に広く発信して、本学の COC 事業に関するご理解を深めていただくとともに、次年度以降の活動に活かしていきたいと考えています。

平成 28 年度の COC 事業では、人と地域、地域と地域とをつなぐ創造・協働・自立の精神を身に付けた学生、すなわち地域創成メディエーター育成の本格的実施を重点目標に掲げて、上述したような各種活動を行ってきました。その結果、所要の要件を満たした 146 名の学生を地域創成メディエーターに認定することができました。

来年度は、文部科学省に採択された COC 事業の最終年度にあたることから、事業の総仕上げとして、当初の目標を達成すべく然るべき成果を挙げ本事業の集大成を図るとともに、30 年度以降において大学独自の地（知）の拠点事業（地域連携共育事業）の継続に繋げていく重要な期間であると考えています。学内外の多くの方々には引き続きご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 29 年 3 月

中部大学 学監/地域・国際連携教育研究センター長
松尾直規

-目次-

はじめに	1
1. 概要	
(1) 目的・目標・概要図	5
(2) 実施体制・メンバー表	11
2. 活動報告	
(1) 全体の活動成果	17
(2) ワーキンググループ報告	
① 正課教育WG	37
② 報酬型インターンシップWG	39
③ コミュニティ情報ネットワーク事業WG	41
④ 生活・住環境を考えるまちづくりWG	44
⑤ 高齢者・学生交流・LHS WG	48
⑥ シニア大学WG	51
⑦ 高蔵寺NTキャンパスタウン化WG	53
(3) 地域志向教育研究経費の成果報告	55
3. 評価	
(1) 内部評価委員会 評価結果	89
(2) 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業委員会による評価結果	101
4. 新聞記事	105

1. 概 要

(1) 目的・目標・概要図

1. 概要

(1) -1 目的

中部大学（以下本学）「地（知）の拠点整備事業」：『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業（以下本事業）』は平成29年3月に5年計画の第4年度を終了する。事業目的は5年間を通して設定されているため、ここでは5年間の事業目的の概要をあらためて記しておく。

本事業は初年度の報告書にも述べられているように本学が「地域課題の解決」および「地域に役立つ人材養成」を目的とする地域再生・発展のための地（知）の拠点となるための大学改革事業である。またその改革の成果を地域社会に還元し、地域社会に貢献していくことを目的としている。

本学はその基本理念として、『不言実行、あてになる人間』を信条とし、豊かな教養、自立心と公益心、国際的な視野、専門的能力と実行力を備えた、信頼される人間を育成するとともに、優れた研究成果をあげ、保有する知的・物的資源を広く提供することにより、社会の発展に貢献する。」こととしており、その社会貢献上の使命として、「さまざまな社会活動に参画し、大学が保有する知的・物的資源を活用することによって、地域を中心とする社会の福利向上と発展に貢献する」ことを学内外に明確にしており、地域貢献・地域連携は本来、本学の使命でもある。

すなわち本学は建学の精神「あてになる人間」育成プログラムの重要な柱として本事業を遂行しており、社会・産業界の中で地域にも目を向けて「行動できる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「頑張れる人間」「信頼できる人間」としての学生育成を図り目指している。本学はこの事業を通してさらに一層地方大学の社会的使命を探究し、持続可能な未来社会の創造とその教育のあり方をさらに力強く追求する。

I. 全体としての目的

本事業全体の目的をさらに具体的に述べれば、地域にも目を向けて地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指し、現代社会の主役である高齢者にとって安心・安全で豊かな社会づくり、まちづくりを春日井市に展開する。その成果を春日井地域に還元し、都市づくりを進める。さらに、その成果と知識を広く日本社会全体に拡大することで日本の発展に貢献していく。こうした実践活動を学生自身が担っていくことで、学生自身が実践的知識を深め、支援技術を学び、前述の地域であてになる人材に育っていく。

II. 教育上の目的

地域社会の再構築のために必要な実践的人材の育成を目指す。

① 「地域連携教育改革・教育システムの構築」

現在まで進めてきた教育改革をさらに発展させ、地域社会に役立つ人間となるための行動計画を持てるよう、全学共通教育の科目として新たに『地域共生実践』を設置し、学部・学科にも地域志向関連科目を設置する。こうして基礎教育と専門教育を交互に

発展的に教育し、地域社会再構築のために必要な実践的人材を育成するための教育改革を目的とする。さらに最終的に中部大学が認定する“あてになる人間＝『地域創成メディエーター』”の育成を目的とする。

②「報酬型インターンシップ（就業体験）」

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に学生を教育する**報酬型インターンシップ型の就労システム**を構築する。

さらに③「コミュニティ情報ネットワーク」事業、④「生活・住環境を考えるまちづくり」事業でも学生を研究活動に参加させることで、地域の課題を解決していく能力の育成にも資することが目的ともなっている。⑤「高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay (L H S)」、⑥「シニア大学 (Chubu University Active Again College : C A A C)」、⑦「高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化」といった地域貢献活動においても学生を社会貢献の実践に参加させ、高齢者と交流させることで、高齢化社会の地域課題を理解し、積極的に課題解決策を考える能力を涵養することも目的としている。

Ⅲ. 研究上の目的

地域活性化の課題研究として以下の研究の推進を目的とする。

③「コミュニティ情報ネットワーク事業」

地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域が I T 化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究を進める。

④「生活・住環境を考えるまちづくり」

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域の住民が安心して快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する開発研究を行う。

その他社会貢献活動関連研究

「高齢者-学生交流・L H S」事業や「シニア大学」の開設などの社会貢献に関連しながら、地域の課題をさまざまな観点から調査研究し、地域活性化と高齢者の支援の手段を見いだしていくことを目的とした研究活動も並行して行う。

Ⅳ. 社会貢献上の目的

改革の成果を春日井を中心とした地域に還元し、地域の再生・活性化を支援するため、以下の地域社会貢献を目的とする。

①「地域連携教育改革・教育システムの構築」

地域に役立つ人材を教育機関として養成し地域に送り出すことで社会に貢献する。地域の課題を現実的に理解し、解決のために行動を起こすことができる“あてになる人材”を養成する。そして地域のコミュニティ活動の中心人物であり、リーダーとなることのできる知識と問題解決能力を持ち、良好な対人関係を維持できる人材を地域に送り出す。これは教育機関として重要な社会貢献活動である。さらに本事業では、春日井市の課題克服のための解決策を中部大学が軸となって展開し、現代社会の最重要課題である高齢化社会の以下の課題解決に挑戦する。

- ⑤「高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home stay(LHS)」
高齢世帯や独居高齢者の見守りや生活支援を目的に若者による高齢者との交流や同居活動を進める。
- ⑥「シニア大学 (Chubu University Active Again College : CAAC)」
高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的に実践教育を行う。
- ⑦「高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化」
高齢化で衰退した高蔵寺ニュータウンを活性化する目的で中部大学のキャンパス機能を高蔵寺ニュータウン内に拡大し、地域と大学が融合した若者も生活する場にしていく。
その他、③「コミュニティ情報ネットワーク」事業、④「生活・住環境を考えるまちづくり」事業でも研究活動を通して地域社会を安全・安心で便利なものとしていくことで地域社会に貢献していく。

(1) -2 目標

前項の目的を達成するため、今年度の目標を以下のように設定した。

I. 全体

- ① COC推進委員会委員とワーキンググループの拡充
学監をセンター長とする地域連携教育研究推進部と各事業活動リーダー・副リーダーおよび各学部代表委員からなるCOC推進委員会の機能を拡大し、活動内容に応じてワーキンググループを随時拡充し（実施体制・メンバー表参照）、本事業全体の推進にあたる。
- ②「地（知）の拠点整備事業」の学内と春日井市住民への広報活動
 - 1)「地（知）の拠点整備事業」の学内周知・広報活動のために27年度の活動報告会を6月に学内で実施する。
 - 2)春日井市を中心とする地域住民への広報活動のために昨年度に引き続き地域連携市民フォーラムを10月に学外の春日井市内で実施する。
- ③春日井市との定期的協議の場の設定
昨年度に引き続き、春日井市との定期協議の場を設定し、自治体との連携を図る。
- ④NPO団体との定期的協議の場の設定
昨年度に引き続き、NPOとの連携協議の場を設定し、交流を図る。
- ⑤地域志向教育研究経費による教育研究の推進
昨年度に引き続き、地域志向教育研究経費を設定し、教育研究の推進を図る。
- ⑥地域創成メディエーターの育成
昨年度までの立ち上げ期間から、今年度は本格実施年度として具体的アクションプランを実施し、地域創成メディエーターの増加を図る。

⑦内部評価委員会の開催

学長を委員長とする学部長・研究科長会のメンバーに春日井市をオブザーバーに加えて内部評価委員会を開催し、事業活動の報告とそれに基づいて評価を受ける。

⑧外部評価委員会の開催

大学・研究機関、行政、商工会議所の有識者からなる外部評価委員会を開催し、本事業の第三者評価を得ることで、事業の修正・改善に役立てる。

II. 教育

教育活動としては地域連携教育の推進と報酬型インターンシップの確立を目指す。

①地域連携教育改革を実施し、教育システムを構築する。

- 1) 地域共生実践を春学期3講義・秋学期5講義、並列開講の運営。担当教員・協力者の勧誘と増員。
- 2) 地域創成メディエーターへの導き、A L / T B Lの勉強会の実施。
- 3) 地域創成メディエーター学生発表会（+エクスプレッション）を開催し、地域創成メディエーターを認定する。

②報酬型インターンシップ制度を確立する。

- 1) 春日井商工会議所との連携強化。
- 2) 学生の居住地に近い地域での企業開拓。
- 3) 学生への説明会を開催。

III. 研究

研究活動としてコミュニティ情報ネットワークの構築と高蔵寺ニュータウンを中心としたまちづくり活動を展開する。

③地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がIT化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発を進める。

- 1) 医療情報システムのプログラム仕様の検討と改良・検証。
- 2) シニア大学の講義映像配信システムの開発。
- 3) N P O活動情報受発信システムの機能強化。

④春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域住民が安心快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する地域開発を行う。

- 1) 高蔵寺ニュータウンの課題と問題解決法について住民との意見交換会を実施する。
- 2) まちづくり講演会を開催し、全学部の学生に「まちづくり」の意義と参加方法について学ぶ機会をつくる。
- 3) まちづくり勉強会（学内）、タウンウォッチング（学外）を実施する。
- 4) 正課並びに自主活動を強化する。

IV. 社会貢献

高齢者・学生の交流活動を実施し、社会貢献活動として高齢者-学生交流・Learning Home stay（LHS）事業、シニア大学、高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化の各活動を軌道に乗せる。

- ⑤ 高齢世帯および独居高齢者の見守りや生活支援を目的に、若者による高齢者との交流や同居を実践する。
 - 1) 世代間交流会・LHSへのシニアの参加呼びかけ（広報活動）。
 - 2) KCGサークル（地域発の健康教室）の運営サポート。
 - 3) 地域連携教育セミナー、LHS体験報告会・ホストファミリー懇談会の実施。
 - 4) LHS・LHVの実施。
- ⑥ 高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的としたシニア大学を運営する。
 - 1) 1・2期生の後期授業（春学期）を行い、1期生の修了式を行う。
 - 2) 3期生の入学式を行い、2・3期生の授業（秋学期）を行う。
 - 3) カリキュラムの充実を図る。
 - 4) 地域在住のシニアに対して体験入学の開催など、シニア大学を身近に感じさせる企画を実施する。
- ⑦ 高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化を推進する。
 - 1) 春日井市・URとの連携により地域連携住居を充実させる。
 - 2) コミュニティプラザ Kozoji の運用および地域住民による活用を促進する。

(1) -3 本プロジェクトの概観図

春日井市の知の拠点 = **中部大学**
 学部: 7学部(29学科)、大学院: 6研究科
 学生数: 約10000人、教員数: 約500人

あてになる人間の育成
**中部大学認定
 地域創成メディアエーター**

本プログラムで育成した、中部大学認定『地域創成メディアエーター』が、人と人との絆をつくる介在をし、活力あるコミュニティを形成する。

- 中部大学のCOCとしての目標**
- “地域” と言う名のシャワー(刺激)で学生を育てる。
 - 地域だけでは解決できない課題を、大学の持つシーズを活かして、地域と協働で取り組む。
 - “まちづくり” の不可欠な資源が次代を担う若者である。この意識を高め、地域と共に育てる。
 - 地域において優しい心配りができる、真のリーダー養成を目指す。
 - 地域からあてにされる大学を目指す。
 - 地域連携において、春日井モデルを明確にし、このモデルを全国に伝える。

春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

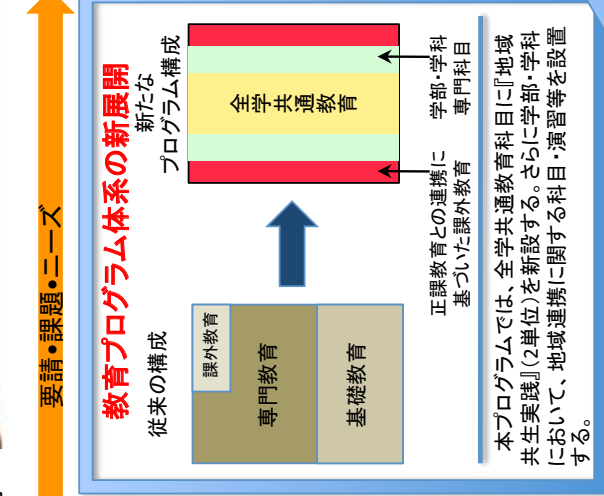
地域の方々と学生、地域と大学がキャンパスの壁を越えて融合し、持続可能な新しい未来社会とその教育を春日井の地に実現する。
中部大学は平成26年に開学50周年を迎える。中部大学ならやれる！ 中部大学が成功させる！

地域との関わり体験を通して他者を理解し、自身の価値観をみつめる



春日井市にある高蔵寺ニュータウンを課題解決のモデル地域と位置づけ、包括的な人材育成と地域活性化事業を中部大学と自治体が協力して実施する。事業開始2年を目前に、本モデルを春日井市全域に発展させる予定である。事業終了時には、春日井市が活性化された、人材が育つ。

<教育改革>
 中部大学では、平成20年度以降大幅な教育改革を進めてきた。本事業では、更なる教育改革として、**全学共通教育**を導入し、及び学部の正課の地域関連科目を導入した『**新しい教育課程**』を実施する。さらに、**全学総合教育科**を発展的改組し、『**全学総合COC教育科**』を新たにスタートさせる計画である。

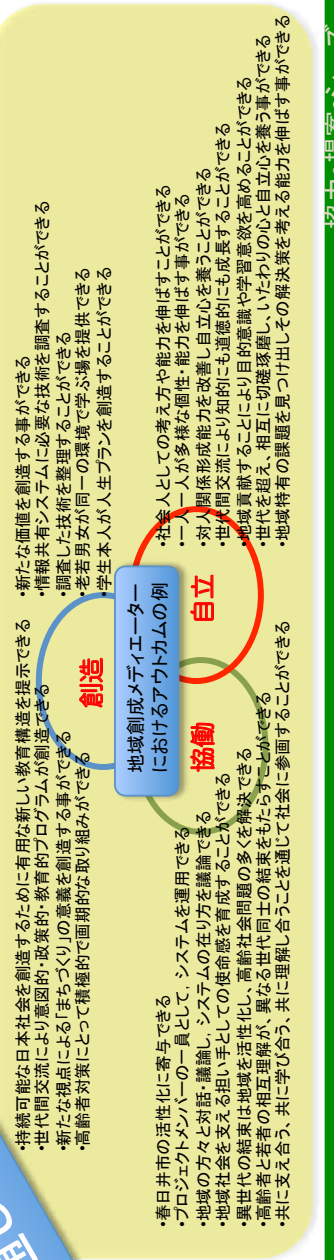


本プログラムでは、全学共通教育科目に『地域共生実践』(2単位)を新設する。さらに学部・学科において、地域連携に関する科目・演習等を設置する。

本プログラム推定参加学生数:
 25年度: 約50名、26年度: 約80名
 27年度: 約400名
 28年度: 約600名
 29年度: 約800名
 (以降、順次増加する。)



学内の実施体制
 学長主導の基、COC担当理事(兼)副学長を置き、本取組みを統括し、推進する。



協力・提案・シーズ

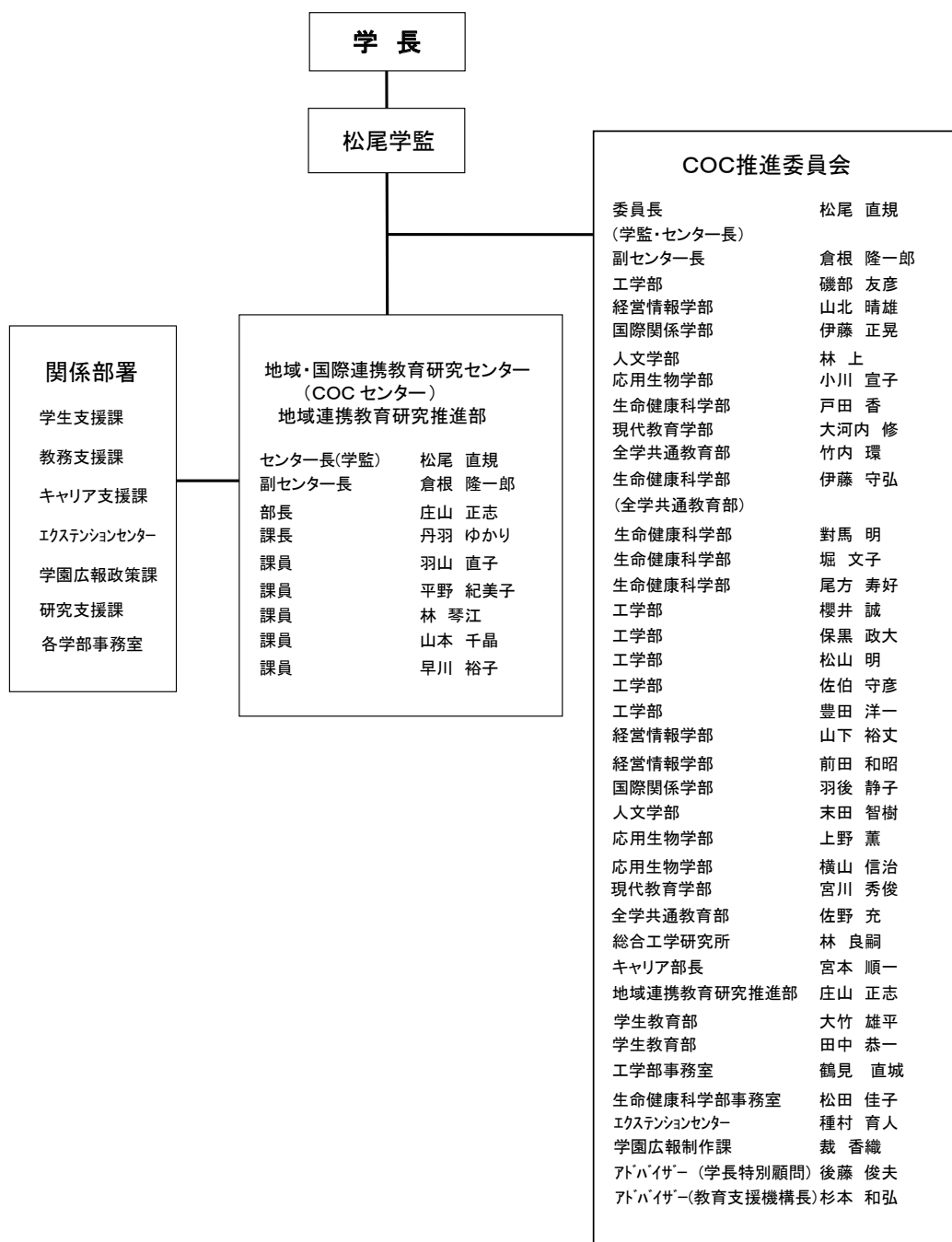
(2) 実施体制・メンバー表

(2) 実施体制・メンバー表

本事業を全学的に推進・実施するために以下のように学長を総括責任者とし、「地（知）の拠点整備事業（COC）」担当学監が本事業を取り纏め、推進担当責任者となる全学体制を構築。実際の事業はCOC担当学監を委員長とする全学部からの委員を含むCOC推進委員会を設置し推進にあたっている。またCOC推進委員会内に活動毎に9のワーキンググループを設け各活動を展開し、事務部門は地域連携教育研究推進部（部長以下9名の専従職員）で事業全体の事務的管理にあたっている。（以下、中部大学COC事業体制図 および「地（知）の拠点整備事業（COC）」WGメンバー表 参照）

中部大学 COC事業 体制図

(平成 29 年 3 月現在)



地（知）の拠点整備事業（COC）WGメンバー （平成29年3月現在）

1. 地域志向教育研究経費WG

委員長	松尾 直規	（学監／地域・国際連携教育研究センター長）
副委員長	倉根隆一郎	（応用生物学部 応用生物化学科 特任教授）
委員	磯部 友彦	（工学部 都市建設工学科 教授）
同	伊藤 守弘	（生命健康科学部 生命医科学科 准教授）
同	櫻井 誠	（工学部 応用化学科 教授）
同	對馬 明	（生命健康科学部 理学療法学科 教授）
同	戸田 香	（生命健康科学部 理学療法学科 准教授）
同	保黒 政大	（工学部 電子情報工学科 准教授）

2. 正課教育WG（活動番号①）

委員長	伊藤 守弘	（生命健康科学部 生命医科学科 准教授）
副委員長	上野 薫	（応用生物学部 環境生物科学科 講師）
委員	倉根隆一郎	（応用生物学部 応用生物化学科 特任教授）
同	羽後 静子	（国際関係学部 国際学科 教授）
同	戸田 香	（生命健康科学部 理学療法学科 准教授）
同	山羽 基	（工学部 建築学科 教授）
同	今枝 健一	（工学部 応用化学科 教授）
同	竹内 環	（全学共通教育部 全学総合教育科 助教）
同	吉村 和也	（応用生物学部 食品栄養科学科 准教授）
同	大日方五郎	（工学部 ロボット理工学科 教授）
同	伊藤 佳世	（経営情報学部 経営総合学科 准教授）
同	尾鼻 崇	（人文学部 コミュニケーション学科 講師）
同	堀部 貴紀	（応用生物学部 助教）
同	水野 智之	（人文学部 歴史地理学科 准教授）
同	小川 宣子	（応用生物学部 食品栄養科学科 教授）
同	牧野 典子	（生命健康科学部 保健看護学科 教授）
同	西垣 景太	（生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 講師）
同	千田 隆弘	（現代教育学部 幼児教育学科 講師）
同	田中 恭一	（学生教育部次長・教務支援課長）
	（松尾 直規（学監））	

3. 報酬型インターンシップWG（活動番号②）

委員長	櫻井 誠	(工学部 応用化学科 教授)
副委員長	佐伯 守彦	(工学部 機械工学科 准教授)
委員	栗濱 忠司	(学生部長／工学部 電子情報工学科 教授)
同	山口 直樹	(経営情報学部 経営総合学科 教授)
同	對馬 明	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)
同	武田 明	(生命健康科学部 臨床工学科 准教授)
同	宮本 順一	(キャリア部長)
同	大竹 雄平	(学生支援課長)
オブザーバー	松尾 直規	(学監)

4. コミュニティ情報ネットワーク事業WG（活動番号③）

委員長	保黒 政大	(工学部 電子情報工学科 准教授)
副委員長	前田 和昭	(経営情報学部 経営総合学科 教授)
委員	倉根 隆一郎	(応用生物学部 応用生物化学科 特任教授)
同	富永 敬三	(医療技術実習センター 講師)
同	中路 純子	(生命健康科学部 作業療法学科 教授)
同	河内 信幸	(国際関係学部 国際学科 教授)
同	宮下 浩二	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)

5. 生活・住環境を考えるまちづくりWG（活動番号④）

委員長	磯部 友彦	(工学部 都市建設工学科 教授)
副委員長	松山 明	(工学部 建築学科 准教授)
委員	豊田 洋一	(工学部 建築学科 教授)
同	内藤 和彦	(工学部 建築学科 教授)
同	山羽 基	(工学部 建築学科 教授)
同	杉井 俊夫	(工学部 都市建設工学科 教授)
同	武田 誠	(工学部 都市建設工学科 教授)
同	伊藤 睦	(工学部 都市建設工学科 准教授)
同	余川 弘至	(工学部 都市建設工学科 助教)
同	岡本 肇	(中部高等学術研究所 講師)
同	行本 正雄	(工学部 機械工学科 教授)
同	甲田 道子	(応用生物学部 食品栄養科学科 准教授)
同	南 基泰	(応用生物学部 環境生物科学科 教授)
同	上野 薫	(応用生物学部 環境生物科学科 講師)
同	浦井 久子	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 助手)
同	尾鼻 崇	(人文学部 コミュニケーション学科 講師)
同	林 良嗣	(総合工学研究所 教授)
同	大河内 修	(現代教育学部 幼児教育学科 教授)
同	宮田 茂	(応用生物学部 食品栄養科学科 准教授)

6. 高齢者・学生交流・LHS WG(活動番号⑤)

委員長	戸田 香	(生命健康科学部 理学療法学科 准教授)
副委員長	堀 文子	(生命健康科学部 作業療法学科 准教授)
委員	栗濱 忠司	(学生部長/工学部 電子情報工学科 教授)
同	内藤 和彦	(工学部 建築学科 教授)
同	河内 信幸	(国際関係学部 国際学科 教授)
同	長島 万弓	(応用生物学部 食品栄養科学科 教授)
同	櫻井 誠	(工学部 応用化学科 教授)
同	佐藤 友美	(人文学部 心理学科 講師)
同	杉本 英晴	(人文学部 心理学科 講師)
同	宮本 靖義	(医療技術実習センター 准教授)
同	矢澤 浩成	(医療技術実習センター 講師)
同	城 憲秀	(生命健康科学部 保健看護学科 教授)
同	野田 明子	(臨床検査技術教育・実習センター 教授)
同	三摩 真己	(人文学部 コミュニケーション学科 教授)
同	尾方 寿好	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授)
同	福田 峰子	(生命健康科学部 保健看護学科 准教授)
同	河村 守雄	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)
同	谷利 美希	(生命健康科学部 作業療法学科 助手)
同	松村 亜矢子	(全学共通教育部 全学総合教育科 講師)
同	大竹 雄平	(学生支援課長)
同	原田 智之	(入学センター広報課)

7. シニア大学WG(活動番号⑥)

委員長	對馬 明	(生命健康科学部 理学療法学科 教授)
副委員長	尾方 寿好	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授)
委員	甲田 道子	(応用生物学部 食品栄養科学科 准教授)
同	櫻井 誠	(工学部 応用化学科 教授)
同	羽後 静子	(国際関係学部 国際学科 教授)
同	藤丸 郁代	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授)
同	山北 晴雄	(経営情報学部 経営総合学科 教授)
同	林 上	(人文学部 歴史地理学科 教授)
同	末田 智樹	(人文学部 歴史地理学科 准教授)
同	町田千代子	(応用生物学部 応用生物化学科 教授)
同	根岸 晴夫	(応用生物学部 食品栄養科学科 教授)
同	堀田 典生	(生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 准教授)
同	宮本 靖義	(医療技術実習センター 准教授)
同	宮田 茂	(応用生物学部 食品栄養科学科 准教授)
同	伊藤 正晃	(国際関係学部 国際学科 講師)
同	加藤 透	(学生教育部次長・キャリア支援課長)
同	種村 育人	(エクステンションセンター次長)
同	稲ヶ部正幸	(附属三浦記念図書館事務部長)
同	大竹 雄平	(学生支援課長)

同 田中 恭一 (学生教育部次長・教務支援課長)
同 松田 佳子 (生命健康科学部事務室事務長)

8. 高蔵寺NTキャンパスタウン化WG (活動番号⑦)

委員長 櫻井 誠 (工学部 応用化学科 教授)
副委員長 羽後 静子 (国際関係学部 国際学科 教授)
委員 栗濱 忠司 (学生部長／工学部 電子情報工学科 教授)
同 戸田 香 (生命健康科学部 理学療法学科 准教授)
同 内藤 和彦 (工学部 建築学科 教授)
同 福井 弘道 (中部高等学術研究所 教授)
同 横手 直美 (生命健康科学部 保健看護学科 准教授)
同 大竹 雄平 (学生支援課長)
同 蓑島 智子 (附属三浦記念図書館事務部図書課長)
同 原田 智之 (入学センター広報課)
(松尾 直規 (学監))

9. 広報WG

委員長 保黒 政大 (工学部 電子情報工学科 准教授)
委員 倉根隆一郎 (応用生物学部 応用生物化学科 特任教授)
同 伊藤 守弘 (生命健康科学部 生命医科学科 准教授)
同 櫻井 誠 (工学部 応用化学科 教授)
同 裁 香織 (学園広報制作課長)
(松尾 直規 (学監))

2. 活動報告

(1) 全体の活動成果

2. 活動報告

(1) 全体の活動成果

事業活動はCOC推進委員会ならびに活動毎のワーキンググループにより行なわれてきたが、それらに共通する課題や統括する活動は学監・センター長を中心にCOC推進委員会等COC全体で取り組んできた。それらの成果は以下のようである。

1) 「地（知）の拠点整備事業」の学内と春日井市住民への広報・周知活動の実施

今年度は事業4年目となるので、活動内容をパンフレット、チラシ等によりさらに広く学生、教職員、市民に周知し、活動参加者を増加させることに努めた。

2) 27年度COC活動報告会実施（別紙①参照）

6月29日（水）学内で開催し、正課教育活動を含む7つの活動プログラムのワーキンググループのリーダーが27年度の活動報告をした。一般市民、学生、教職員58名が参加した。

3) COCホームページの拡充

各ワーキンググループの活動内容を中心に適宜更新し拡充した。

4) 中部大学フェアのブース出展

9月15日（木）開催の中部大学フェアにCOC事業の紹介ブースを出展した。CAAC受講生も説明に参加した。

5) 地域連携市民フォーラム開催（別紙②参照）

10月22日（土）春日井市東部市民センターホールにおいて、地域連携市民フォーラムを開催した。伊藤春日井市長のご挨拶を頂き、その後外部講師に東北大学大学院 医工学研究科 永富良一教授による「健康錬筋術のすすめ」と題した講演に加え、本学生命健康科学部理学療法学科 戸田香准教授による「アンケート調査から見る世代間交流の可能性と現状」と題した講演を行った。一般市民131名、教職員・学生41名が来場した。

6) 平成28年度市民アンケート実施（別紙③参照）

地域連携市民フォーラムに参加した一般市民131名にCOCアンケートを依頼し、103名から回答を得た。COC事業については約25%の人が春日井市の広報誌で知り、さらに約65%の人が地域連携市民フォーラムやその他の広報チラシで知ったと回答した。市民へのチラシ配布活動の重要性が配付方法の改善と共に重要であると認識された。

7) 地域志向教育研究の公募研究の実施

22件の研究課題を採択し、研究活動を支援（総額460万円）した。詳細は、「2.（3）」

地域志向教育研究経費の成果報告」に記載した。

8) COC推進委員会の拡充

各ワーキンググループリーダーと各学部代表委員などからなるCOC推進委員会（総数38名）を隔月毎に開催し、各活動の報告と重要事項の審議にあたった。

地域志向教育研究に採択された代表者も各ワーキンググループの委員として参画することとし、その結果新たに13名の委員が任命され、COC事業に係わる教職員数は延べ123名となった。

9) 地域創成メディエーターの本格的実施と育成

昨年までの立ち上げ期間から28年度はCOC事業における地域創成メディエーターの本格的実施年度となった。

(1) COC事業における地域創成メディエーターの人物像

本学の建学の精神「不言実行、あてになる人間」育成プログラムの重要な柱として、COC事業では「地域創成メディエーター」の育成を行っている。社会・産業界では、都市だけでなく「地域にも目を向けられる人材」を求めている。即ち「自ら行動できる人間」「考えられる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「がんばれる人間」「信頼できる人間」「地域にも目を向けられる人間」としての学生育成を図っている。学生が地域社会に触れると「なぜ」「どうして」とこれまでの同学年の学生仲間関係とは違う驚き等を感じ、対処法や改善策を考え、自然と「考える力」が熟成される。

(2) 地域創成メディエーター大幅育成のための具体的アクション

以上の認識の下に、センター長、副センター長、推進委員、地域志向研究担当教員、事務局が一丸となって、他部門とも密接な協力の下に以下に示すような具体的なアクションプランを作り、着実に実施し、地域創成メディエーターの育成を図った。

- ① 正課外教育事業の体験を1つ以上とした。（文科省に提出した達成目標等の文章の中に「正課外教育事業を1つ以上体験」の記載あり）
- ② オリエンテーション時に学生（新入生から現3年生）に対して、「地域創成メディエーター 資格取得のすすめ」を（別紙④参照）を作成し、各学年のオリエンテーション教員に依頼して配布し、学生への周知を図った。
- ③ 推進委員は担当する正課科目の講義にて地域創成メディエーターの取得を学生に促した。
- ④ 教務支援課に依頼し、資格取得に必須となる正課科目10単位（およびわずかに足りない8単位目安）を取得している学生を学科ごとにリストアップした。
- ⑤ 各推進委員に学科毎（場合により学部）の上記リストを渡し、各学科の3年生指導教員とタイアップしてリストの学生に地域創成メディエーターを取得するように積極的に促した。
- ⑥ 副センター長が事務局と連携し、⑤のフォローアップを行った。
- ⑦ 地域志向教育研究課題は研究的側面に加えて教育的側面の両側面を有しており、文

部科学省も「地(知)の拠点整備事業」のユニークな取り組みとして捉えていることより、地域志向教育研究募集要項に地域創成メディエーター育成について記載し、応募様式に地域創成メディエーター育成の有無を記載する欄を設け、採択に重要な指標とした。

- ⑧ 副センター長が事務局と連携し、地域志向教育研究課題に採択された教員に④の学生リストを渡し、フォローアップを行った。
- ⑨ 推進委員および地域志向担当教員から、187名もの地域創成メディエーター候補の学生を選出いただき、「動く」の課外活動のフォローアップを行った。
- ⑩ 「動く」の活動について、年度展開に応じて柔軟に追加事例を推進委員会に諮り承認した。
- ⑪ 大学側の受講人数制限(例 持続学のすすめ:2014年度以前入学生必須科目とキャリア教育科目(自己開拓、社会人基礎知識))により、本人の意思とは関係なく「学ぶ(正課教育)」を履修できない希望学生には、特別課題レポートを提出させて、地域創成メディエーター格条件の「学ぶ」をクリアとする特別措置を認めた。

(3) 地域創成メディエーター取得学生の大幅増

以上のアクションプランを全体として一丸となり着実に実施したことにより、12月7日に地域創成メディエーター候補の学生131名の発表会を開催し、当日公の理由により発表が困難であった学生15名は12月20日(第2回)に発表会を行った。この結果、立ち上げ期間の26年度4名及び27年度5名から、本格実施となった28年度は「地域創成メディエーター」の資格を146名の学生に授与できる運びとなった。平成29年度以降は更に地域創成メディエーターの育成数を増やしていく予定である。

10) 地域創成メディエーター学生発表会「+エクспレッション」開催(別紙⑤参照)

12月7日(水)・20日(火)の2回に分けて、それぞれ本学不言実行館アクティブホールとスチューデントコモンズにおいて、中部大学地域創成メディエーター学生発表会「+エクспレッション」を開催した。

地域創成メディエーター資格認定の最終課題「+エクспレッション」は講義での規定単位取得に加え、キャンパスを地域に広げた課題体験に参加・実践した学生たちが、まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して現場で解決策を考えて取り組んだ過程と成果を発表。口頭発表5名、ポスター発表141名の学生が地域創成メディエーター候補生となった。参加者は、一般市民17名、教職員11名、学生5人が来場した。

参加者にアンケートを依頼し、33名から回答を得た。60歳以上の一般参加者約42%、29歳以下の学生等約15%と幅広い層の参加があった。全体の感想について約88%が「とても良かった・良かった」と回答した。(別紙⑥参照)

11) 文部科学省による平成28年度評価の実施

平成25年度又は平成26年度に選定されたCOC事業を対象に平成28年度評価が実施された。本学は平成25年度「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生

2 活動報告

共有事業」について、7月に報告書等の書類を提出し9月に面接評価を受けた。

1 2) 学部長会メンバー、春日井市からなる内部評価委員会の開催

1月25日(水)に学部長・研究科長会構成員からなる内部評価委員会が開催され、平成28年度事業活動の内部評価が行われた。COC事業の活動の今後の要は「地域にもあてになる人間」として地域創成メディエーターを養成していくことであると確認された。

1 3) 大学・研究機関、行政、商工会議所の有識者からなる外部評価委員会の開催

3月2日(木)、外部評価委員による外部評価委員会が開催された。

1 4) NPO連携協議会の開催

NPO側委員(2名)とCOC副センター長及び各活動リーダー委員(5名)からなるNPO連携協議会を6回開催した。COC推進委員会の報告を中部大学側委員が行い、それに引き続きNPO側委員から地域の活動や市民、NPO諸団体の活動報告が行われ、情報の共有化を図った。

1 5) 採択他大学との交流と活動

(1) COC事業採択校との情報交換会(岐阜大学はじめ中部圏11大学)

1月10日岐阜大学で中部圏10大学のCOC採択校が参集して情報交換会が開催された。本学は正課・キャンパスタウン化・CAACについて報告を行った。

(2) 中部地区COC事業採択校「学生交流会」に参加

3月1日(水)岐阜駅前「じゅうろくプラザ大会議室」にて、岐阜大学を幹事として中部地区の12大学が集結し、各大学の代表学生が地域での活動やその成果を発表した。本学からは、生命健康科学部の井戸太貴はじめ3人の学生が「春日井市消防団中部大学機能別分団の発足」と題して発表を行った。

別紙① 活動報告会 チラシ



地(知)の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(COC事業) (平成25年度採択)

春日井市における世代間交流による 地域活性化・学生共育事業

まちづくりを通して、共に学び(共学)・共に育つ(共育)!!

◆◆平成27年度 COC活動報告会◆◆

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」(平成25年度採択)の本学の活動と成果について報告会を開催しますので、是非ともご参加ください。

日時：平成28年 6月 29日 (水) 15:30~17:30

場所：中部大学 リサーチセンター 2階大会議室

プログラム

[司会: 倉根 隆一郎 教授

(地域・国際連携教育研究センター副センター長)]

◇15:30~15:35 あいさつ 松尾 直規 学監 (地域・国際連携教育研究センター長)

◇15:35~16:35 活動報告(①~④)

15:35~15:50

①正課教育

伊藤 守弘 准教授
(生命健康科学部)

15:50~16:05

②報酬型インターン
シップ

櫻井 誠 教授
(工学部)

16:05~16:20

③コミュニティ情報ネット
ワーク事業

保黒 政大 准教授
(工学部)

16:20~16:35

④生活・住環境を考える
まちづくり

磯部 友彦 教授
(工学部)

(休憩 10分)

◇16:45~17:30 活動報告(⑤~⑦)

16:45~17:00

⑤高齢者・学生交流・
LHS

戸田 香 准教授
(生命健康科学部)

17:00~17:15

⑥シニア大学

對馬 明 教授
(生命健康科学部)

17:15~17:30

⑦高蔵寺NTキャンパス
タウン化

櫻井 誠 教授
(工学部)

(質疑応答)

■お問い合わせ先

中部大学 地域・国際連携教育研究センター 地域連携教育研究推進部

Tel:0568-51-1763

Fax:0568-51-4659

E-mail:coc@office.chubu.ac.jp

別紙② 地域連携市民フォーラム チラシ

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
 春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

文部科学省 **地(知)の拠点**
まちづくりを通して共に学び 共学 共に育つ 共育

第4回 Chubu University

中部大学 地域連携

Kasugai City

市民フォーラム 2016

参加無料

主催 中部大学

後援 春日井市

開催日時

平成28年 **10月22日(土)** 14:00~16:00(13:30 開場・受付)

健康錬筋術のすすめ

東北大学大学院 医工学研究科 教授

永富 良一 氏

アンケート調査から見る 世代間交流の可能性と現状

中部大学 生命健康科学部 理学療法学科 准教授

戸田 香

開催場所

春日井市
東部市民センター
ホール

春日井市中央台2-2-1
TEL.0568-92-8511

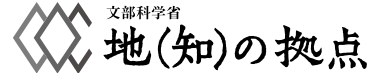
【交通のご案内】

- JR中央本線「高蔵寺」駅下車
(名古屋駅より快速で約26分)
- 名鉄バス、高蔵寺駅北口のりばより
「高森台」(約8分)下車、徒歩約4分
 - ▶4番のりば…かみや団地口、福祉の里、高森台北
 - ▶4番のりば…桃花台センター(春日台経由)
 - ▶5番のりば…石尾台南



中部大学

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業



春日井市と連携し、大学の「人材」「技術」「知」を活用して、地域の活性化に取り組んでいます。

平成25年度、中部大学の「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」が、文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択され、全学的に推進しています。この事業は、自治体、地域NPO、住民が大学のキャンパスの壁を越えて融合し、持続可能な新しい未来社会とその教育を春日井の地に実現することを目的としています。そのために、この事業の内容・趣旨を地域の皆様にお知らせし、事業への協力と積極的、自主的関与を依頼する機会として市民フォーラムを開催する運びとなりました。

※大学COC(Center of Community)事業は、文部科学省が推進する「地(知)の拠点整備事業」で、国が地域の課題解決に取り組む大学を支援するものです。

第4回 中部大学 地域連携市民フォーラム／開催プログラム

13:30～ 開場・受付開始

14:00～14:20 開会挨拶
来賓挨拶

中部大学 学監／地域・国際連携教育研究センター長
春日井市長

松尾 直規
伊藤 太氏

14:20～15:10 講演 ①

健康錬筋術のすすめ

日本是世界一の長寿国であるにも関わらず、健康寿命は必ずしも世界一ではありません。これは晩年に自立した生活ができなくなる人の数が多いからです。本講演では健康寿命の延伸のための知恵をお話します。体を動かすときに利用するのは筋肉ですが、使わない筋肉は萎縮します。逆に繰り返し使っていれば利用状況に応じた状態を維持することができます。日常生活で何かうまくできないことがあれば、それを1ヶ月くらい練習すれば、再びできるようになる可能性があります。スポーツの筋力トレーニングも同じ理屈です。関節の痛みや肉離れは回復に時間がかかるので避けるべきですが、遅れて起こる筋肉痛は我慢する価値があります。動ける筋肉を保つためのコツをお話します。



東北大学大学院 医工学研究科 教授
永富 良一氏

【講師プロフィール】

東北大学大学院医工学研究科教授・副研究科長
昭和59年東北大学医学部卒・医学博士
運動・スポーツ医学の専門家、
子どもから高齢者まで、虚弱者からスポーツ選手まで、故障しない元気な体づくりの研究を推進している。
東北大学医学部医学科卒業。東北大学教養部保健体育学助手、同医学系研究科助手、同医学系研究科障害科学専攻教授を経て、現在に至る。
博士(医学)
トレーニングによる骨格筋の適応、骨格筋損傷・修復のメカニズム、高所・低酸素トレーニングのメカニズムの解明、運動・ストレス時の免疫系の変化、ウェアラブルセンサーによる動作・行動解析、スポーツ障害の予防、健康増進のための運動などを主要な研究テーマとしている。

15:10～16:00 講演 ②

アンケート調査から見る世代間交流の可能性と現状

高蔵寺ニュータウン(NT)では少子高齢化と人口減少が顕在化しています。平成24・25年に高蔵寺NTで高齢者を対象とした生活関連のアンケート調査を実施し、約2300人からご回答を頂きました。調査結果から世代間交流の可能性を検討するとともに、「世代間交流による地域活性化・学生共育事業」を展開している中部大学COCの世代間交流活動についてご紹介します。



中部大学 生命健康科学部 理学療法学科 准教授
戸田 香

【講師プロフィール】

昭和63年：名古屋大学医療技術短期大学部理学療法学科卒業
平成20年：名古屋大学大学院医学系研究科 博士(医学・論博)
平成21年：中部大学生命健康科学部理学療法学科准教授(現在に至る)
中部大学COC推進委員
研究テーマは「内部障害の理学療法」「地域理学療法学」
日本理学療法士協会、日本リハビリテーション医学会、
日本体力医学会、日本糖尿病学会 会員

◆主催／中部大学◆後援／春日井市◆

キャンパスを春日井のまちに広げ、講義で得た専門知識を使って、学生が地域のひとと人をつ結びつけるメディエーター(媒介者)となり、地域の様々な課題に主体性をもって取り組んでいきます。この中部大学式 人材育成体験プログラムを通じて、建学の精神「不言実行・あてになる人間」を身につけた学生には、本学独自の資格「地域創成メディエーター」を認定。2015年度に「地域共生実践～春日井市問題発見のすすめ～」を講義として新設しました。

さらに、学生の成長を飛躍させる取り組みとして…

中部大学生がさまざまな形で関わる「地域との関わり体験プログラム」を導入しています。

① 報酬型インターンシップ

“報酬型”「給与を得る」+“インターンシップ”「就業&育成」
=人材育成を目的とした就業体験

② 高齢者・学生交流 Learning Homestay

高齢者宅に学生がホームステイすることで、
ニュータウンの高齢化問題を解決する新しい試み

③ シニア大学 中部大学アクティブアゲインカレッジ (CAAC: Chubu University Active Again College)

高齢者のセカンドライフづくりに貢献

④ キャンパスタウン化

大学とニュータウンが一体化し、広がる学びの場

⑤ 生活・住環境を考えるまちづくり

地域の人々が安心して快適な生活を送るための研究を促進

⑥ コミュニティ情報ネットワーク

地域の人々の役に立つ情報ネットワークの構築を目指す

※「地域との関わり体験プログラム」など、詳しくはホームページ(下記アドレス)をご覧ください。

お問合せ

中部大学 地域連携教育研究推進部

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地 TEL.0568-51-1763(直通) FAX.0568-51-4659

E-mail / coc@office.chubu.ac.jp HP / http://www3.chubu.ac.jp/coc/

開催当日のお問合せは…090-1289-9755 まで。(この電話は開催当日以外は繋がりません。)



【第3回 中部大学地域連携市民フォーラム】の様子



開会挨拶：松尾 直規
(中部大学 学監
地域・国際連携教育研究センター長)



来賓挨拶：伊藤 太 様 (春日井市長)



講演①：保黒 政大
(中部大学 工学部 電子情報工学科
准教授)



講演②：木戸 康博 様
(日本栄養改善学会 理事長／京都府立大学
大学院 生命環境科学研究科 教授)



司会進行：倉根 隆一郎
(中部大学 地域・国際連携教育研究センター
副センター長)



会場の様子

別紙③

第4回 地域連携市民フォーラム アンケート集計結果

開催日 : 平成28年10月22日(土) 14:00~16:00
 場所 : 春日井市 東部市民センター ホール
 講演内容 : 東北大学大学院 医工学研究科 教授 永富 良一 氏
 「健康錬筋術のすすめ」
 中部大学 生命健康科学部 理学療法学科 准教授 戸田 香
 「アンケート調査から見る世代間交流の可能性と現状」
 参加者数 : 一般131名、教職員15名 学生26名 計172名
 回答数 : 141名(回答率81.9%)

【1】ご参加のあなたについてお聞きします。

①あなたの年齢は

1. 39歳以下(23名) 2. 40代(2名) 3. 50代(6名) 4. 60代(42名) 5. 70代(47名)
 6. 80歳以上(21名)

②あなたの性別は

1. 男性(85名) 2. 女性(56名)

③あなたのお住まいは

1. 高蔵寺ニュータウン(95名) 2. 高蔵寺町, 坂下町, 出川町, 庄名町, 白山町, 不二が丘,
 松本町, 大泉寺町, 上野町, 神屋町, 廻間町(14名) 3. 上記1と2以外の春日井市(9名)
 4. 名古屋市(3名) 5. 春日井市と名古屋市以外の愛知県内(11名) 6. 愛知県外(8名)
 無回答(1名)

④あなたの同居者の構成についてお伺いします。

1. 一人暮らし(29名) 2. 夫婦二人(65名) 3. 自分と子供達(6名) 4. 自分達夫婦と子供達
 (21名) 5. 自分と子供達以外の親族(1名) 6. 夫婦と子供達以外の親族(3名)
 7. その他の同居形態(15名) 無回答(1名)

⑤あなたは

1. 一般市民(103名) 2. シニア大学(CAAC)受講生(11名) 3. 中部大学教職員(2名)
 4. 中部大学生(23名) 無回答(2名)

【2】中部大学「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」についてお伺いします。

⑥この事業を何で最初にお知りになりましたか。

1. 新聞やテレビ(1名) 2. 春日井市の広報誌(26名)
 3. 地域ミニコミ誌やNPO広報誌(10名) 4. この市民フォーラムのチラシ(52名)
 5. 他のCOC講演会の宣伝やチラシ(5名) 6. COCの活動や講演会に実際に参加して(10名)
 7. 中部大学のホームページ(25名) 8. クチコミや近所の方のお話(15名) 無回答(1名)

⑦この事業を知って地域と地域住民にとって何が最も有益あるいは興味深いと感じましたか。

1. 学生正課教育の改革(3名) 2. 報酬型インターンシップ(5名)
 3. シニア大学(CAAC)(14名) 4. 高齢者・学生交流・ホームステイ(LHS)(24名)
 5. キャンパスタウン化(14名) 6. コミュニティ情報ネットワーク(22名)

2 活動報告

7. 生活と住環境を考えるまちづくり (40名)
8. 地域高齢者の生活・健康・介護の支援 (53名) 9. 地域の次世代育成支援 (16名)
無回答 (15名)

⑧この事業について地域活性化や高齢者支援に今後必要と思われる事業があればご教示下さい。

- ・転ばぬ体力づくり教室は必要
- ・高蔵寺ニュータウンでの活動
- ・学生の課外授業としてニュータウン住民の講師によるものがあるかどうか。
- ・高齢者が気軽に集える、開放的な場が提供されること。
- ・「地域包括ケアシステム」へのアプローチ、ジョイント整備事業
- ・ロコモ体操（サークル）の回数が少ないので、説明付のイラストをかいていただいて、家でも練習ができれば良いと思っている。
- ・地域もしくは地域を越えてのおしゃべり（お茶とお菓子程度）の場（現在、アピタの北館で行っていますが）がもっと沢山あると良い。曜日が決まらずに、ふらっと立ち寄ることが出来、1～2時間おしゃべりが出来る時間（10：00～15：00位）。担当される方は大変なので、その件は話し合いで決めなければなりません。
- ・映画館を小さいのでいいからほしい。又、気軽に子供と高齢者が集まる場所があれば、小中学生が放課後過ごし、高齢者がそれを見守ったりできる。又、宿題や勉強の手伝いをする事もできる。
- ・参加型の支援メニューがあればよいと思う。（体験参加型→そば道場、木工あそび道具製作 etc.）
- ・「世代をつなぐ」のは、大切なこと
- ・中部大のCOC事業の更なる進展を希望する。なお、高齢者問題を重点に捉えていただいていることはありがたい。だが、高齢者の自覚を促進する面から「上手に年を取るような・・・」習慣が重要
- ・町内会の地域づくり。
- ・健康を支え、健康を増進させる活動を地域を小さく区切って行う。高齢者はなかなか出かけるのが難しい。辛抱強く長く活動を続ける。
- ・ニュータウン老人クラブを広めてほしい
- ・又、来て下さい
- ・学生が地域に積極的に出かけ交流したり、活動に参加する場面を設け、その距離を縮小する。高蔵寺ニュータウンの住民が大学に気軽に行けるような交通手段の設置＝バス便の設置。おじいちゃん、おばあちゃんと孫世代という関係を利用した事業、集う場、たまり場づくり（何でも活かせ、交流できる場）
- ・実際に身体を動かし、これはどこの運動で、どの位続けるのかを実際やってみたい
- ・世代間交流会の充実
- ・地域別のコミュニティとネットワークの充実
- ・高齢者の健康と介護
- ・体力測定と対処策アドバイス
- ・春日井市内は車社会で移動公共交通手段が不便だと聞く。若い人々の事業開発で（自動走行車などメディアで取り上げられている）高齢者等移動不便者の解消になればよい
- ・大変わかりやすくお話いただき、ありがとうございました。健康あつての余生。高齢になっても働ける場、役目があると良いと考える。
- ・個人個人で交流したほうが良い。団体より、細かな所まで交流できる。
- ・健康も第一だが、買い物、病院などへの交通手段も頭の痛いところ
- ・CCRC についての話題が強く印象に残っているので、この地方創生が未来につながるものであれば参加したい。

- ・石尾台地区社協が実施している「すこやか助け合い」事業。市社協の「ちょっとお助けサービス」をモデルに、介護保険を使えない簡単な 30 分以内の軽作業。
- ・石尾台夏祭り
- ・石尾台総合防災訓練・・・消防団
- ・人材、技術、知を活用して実際の様な成果や実績があったのか、具体的に教えて頂きたい

⑨この事業についてご意見があれば以下にご自由にご記入をお願いします。

- ・筋力の衰えを感じているので、ぜひ必要に思う
- ・補助期間（5年）後も継続してほしい
- ・もっと太く地道に継続的に推進されることを期待する（文科省の補助金がなくなっても）
- ・学生達とコミュニケーションがとれる機会があると良い。月1回とか・・・
- ・高齢者同士が支援すると市の財政にとっても良いと思う。とにかく高齢になると家にこもりがちになるので、楽しい外出が日常的に出来ると良い。
- ・全国各地で行われている「地域芋煮会」の様な楽しいイベントを若者、中年者、高齢者共同で出来れば良いと思う。
- ・地域の個別の問題に対して、専門的な知識がある大学の先生方の知識などは大変参考になると思う。是非これからの活動に期待する。
- ・次代を担う小中学生も参加していただけるような方進をご考慮いただけたらと思う。小中学校、保護者へのアプローチも必要ですが・・・
- ・世代間の格差をなくすることは、時代の相違や家庭環境による現代の社会姿がみえて来る。
- ・地域と大学の交流にはゆるやかな結び付きが良い。お互いに責任感や義務感でなく自主的な感じで交流出来たら望ましい。
- ・とても良かった。岩成台西団地老人会（あかね会）では週2回グランドゴルフをやっている。みんな励まし合ってこれからも頑張ります。86歳、今日は12名参加している。
- ・とても良かった。これからも運動します。
- ・広く知られていないのが現状であり理解が得られなければ続けて行けるのかと考えさせられる。広く報らせる活動が必要と思う。
- ・ニュータウン→プライバシー→孤独死（止むを得ない）
- ・活性化の役に立つ
- ・若い人の労働場所を市内に増やし（商工会加入事業所増加して）勤務先住居を近くして出産から死亡までの一生が春日井でエンド、次世代もとなるような社会になるよう大学側も研究してほしい。
- ・少子高齢化に備えて日本全体を選択と集中によりコンパクト社会につくり直す必要があります。電力会社、ガス会社の保護政策により郊外へと町が拡散してしまい、町の中心はさびれてしまっています。郊外へは自己負担により町の道路、エネルギー政策を見直すことが必要です。日本はアメリカ型社会になっていますが、ヨーロッパに行くと広々とした野山が広がっており、その中に町があります。もう成長による自然破壊は沢山です。新幹線、道路による成長よりも作り直しによるコンパクトな循環型社会をつくるべきと思います。
- ・中部大学、春日井市のHPで過去のフォーラムを含め発表内容が閲覧できると良い。
- ・認知症対策
- ・この会での司会者など、もっと学生を参加させてあげることも地域の人々との接する機会ではないでしょうか。
- ・KCGで学生達と交流していますが、このような教室がもっと増えてゆくことを希望する。
- ・自分と若い人達との交流を考えると身の回りの事柄もよいが、お互いの価値観をつき合わせるような試みに関心が持てる。例えば、春日井市の生活環境とか郷土の歴史観についてなど。
- ・一般の人が地域で使える運動器具があればうれしい

2 活動報告

- ・今日の様な講演会は楽しく有意義でしたので、又、機会があれば来たいと思う。
 - ・有意義なお話を興味深く伺った
 - ・配布資料にないスライドが多かったので、その資料も配布してほしかった
-
- ・地域活性化策は若手（学生など）の流入、中部大系列の春日ヶ丘を「滝、東海」レベルに中高一貫に育てられないか。
 - ・KCG サークルの皆様の活躍を応援します。何かお手伝い出来る事があったらお手伝いしたい。
 - ・「すこやか助け合い」サービスの協力者として、高齢者の暮らし、困り事に寄り添いながら役に立つ（自己肯定感）喜びを味わってほしい。
 - ・夏祭りにもできれば企画の段階から関わってほしい
 - ・永富先生の講演すばらしかった
 - ・運動機能症候群は最高なトレーニングでは是非この様な事業は継続してもらいたい
 - ・一方的で早口で理解が・・・
 - ・今後も続けてほしい
 - ・広報活動を進めてほしい
 - ・中部大の卒業生が春日市内で就職してニュータウンに住んでほしい。

【3】本日の市民フォーラムについてお伺いします。

⑩本日の会場までの移動手段は

1. 自家用車あるいは自家用車で送迎 (61名)
2. 公共バス (14名)
3. タクシー (0名)
4. 自転車あるいは徒歩 (60名) 無回答 (6名)

⑪本日の講演1はいかがでしたか。「春日井市における医療情報共有システムの開発」の講演について

1. 大変興味深く関心が持てた (97名)
 2. まあまあ興味や関心が持てた (25名)
 3. あまり興味や関心が持てなかった (0名)
 4. 興味も関心も持てなかった (0名)
- 無回答 (19名)

⑫本日の講演2はいかがでしたか。「健康な食事～栄養バランス～」の講演について

1. 大変興味深く関心が持てた (73名)
 2. まあまあ興味や関心が持てた (29名)
 3. あまり興味や関心が持てなかった (1名)
 4. 興味も関心も持てなかった (0名)
- 無回答 (38名)

⑬この市民フォーラムの会場や運営はいかがでしたか。

- 会場 1. 良い(111名) 2. やや良い(10名) 3. 普通(13名) 4. やや悪い(0名) 5. 悪い(0名) 無回答(7名)
- 運営 1. 良い(94名) 2. やや良い(13名) 3. 普通(7名) 4. やや悪い(1名) 5. 悪い(0名) 無回答(26名)

⑭今後の講演会や討論会として希望されるテーマや講師の希望がありましたら以下にご記入下さい。

- ・是非、また続けてほしい
- ・今、社会が人とのつながりが無く、孤独な人が多く他から見ると問題が無いように思われるが、本当は大問題を抱えているということがわかった。
- ・もっとPRを上手にできたらいいと思う
- ・全国のNT 再生の分析
- ・高蔵寺 NEW TOWN→高蔵寺 OLD TOWN
- ・健康に良いウォーキングについて知りたい (インターバル速歩)
- ・現在、生活している方のお話が聞けると良い

- ・食の安全について
- ・本当に良いフォーラムだった
- ・これからもこのような講演会をお願いします
- ・健康錬金術は頑張ります。KCGに参加しているが、とても良いサークルです。

- ・地域のボランティア活動と大学の役割
- ・町内会活動の中に大学として係わっていけないか
- ・武田邦彦先生の問題
- ・会で相談して決めます
- ・メンタルヘルスについて
- ・生涯教育について
- ・サマーセミナーについて
- ・健康関連の話題
- ・健康をテーマとした内容
- ・UR 集合住宅の現状と将来展望（全国のニュータウンとの比較、入居率他）
- ・人間ドック結果の読み方
- ・広報は町内会の回覧板で回覧されると良い、他の地区の草取り応援まで回覧されている。本日の開催を中部大学からの案内で知った。
- ・講演2の11/16 体験報告会は大学内だけでやろうと思われた。案内の表示時間が2秒程度。
- ・運動をやるのに大変参考になった
- ・世代間交流の話も良かった
- ・学生の生の声が聞きたい。例えば、ホームステイをしている学生の話など。
- ・健康について
- ・シニア等が子供達が困らない為に身辺整理 他
- ・「まちづくり」という事に関して墓地についての考え方。どこかの市のことでしたが、市民が共同で入れる墓があると知り、春日井においても出来てほしいと思っていますが・・・（若い人、子供、老人が行けるような公園みたいな場所でも交流が出来ると良い）
- ・年相応の食事等の仕様を教えて欲しい
- ・春日井市の西部地区から会場が遠いので、春日井市役所ぐらいの場所で行っていただくと良い。地域性を広げたらCOCの参加者も増加していくのでは。
- ・高森台の建てからの若い世代と老人世代の交流の場を作られるように大学も参加して欲しい。
- ・健康維持増進（西垣景太先生）のためのトレーニングを知りたい
- ・病気を持っている人でも運動プログラムを教えて欲しい
- ・日野原重明氏（聖路加病院） 一人生の楽しみ方
- ・富永先生の研究は素晴らしい
- ・老人ホームのA型、B型の入居者の体力の違いは驚き。やはり、人間、楽をしたらいけないのですね。筋肉は壊れて強くなる。筋肉痛になっても心配しなくても良いのだな。
- ・学生達にも機会があれば講演して欲しい（体験談等）
- ・一般教養関係で特に希望はない
- ・年1回の話があると良い

以上

(2016年10月22日実施)

地域創成メディエーター 資格取得のすすめ

社会は「地域にも目を向けられる人材」を求めています

中部大学は「あてになる人間」育成プログラムの一つとして文部科学省の地(知)の拠点整備事業(COC事業)に採択されています。「地域創成メディエーター」資格^{*}は社会・産業界の中で地域にも目を向けて「行動できる人間」「自ら道を切り拓ける人間」「頑張れる人間」「信頼できる人間」として、中部大学が自信を持って認定し推薦できる学生の証です。

^{*}中部大学が学長名で認定

地域創成メディエーター資格取得の条件

学 (正課教育)	<p>Aの科目から1単位以上、BとCの科目から各2単位以上、合計10単位以上取得する</p> <p>A: キャリア教育科目 … 「自己開拓」「社会人基礎知識」</p> <p>B: 特別課題教育科目 … 2015年度以降の入学生 必修: 「地域共生実践」 選択: 「持続学のすすめ」「地域の防災と安全」「地球を観る」「人類と資源」「グローバル環境論」</p> <p>2014年度以前の入学生(生命健康科学部除く[*]) 必修: 「持続学のすすめ」 選択: 「地域の防災と安全」「地球を観る」「人類と資源」「グローバル環境論」</p> <p>C: 地域関連科目 … メディエーター資格取得の動機や地域の理解に役立つ科目を選択 (例) aさん: 「健康運動コーチング論」「救急医学」「スポーツ医学」 bさん: 「地球環境学」「環境動物学」「生態学概論」 cさん: 「地域とコミュニケーション」「生活環境と人間」「社会調査法」 詳しくは 地域連携教育研究推進部までお問い合わせください</p> <p>[*]2014年度以前入学の生命健康科学部生 「医科学入門」「生涯発達看護論」「生と死の文化人類学」「社会福祉学」「心の科学」 「生活環境と人間」から4単位以上取得でA+Bに該当する</p>
動 (正課外)	<p>COC事業の6つの地域関連プロジェクト活動に1つ以上参加する</p> <p>※活動の例は裏面を参照してください</p>

資格取得の条件が変わりました

「動く」に必要なプロジェクトへの参加数が1つ以上になりました。

問い合わせ先

中部大学 地域連携教育研究推進部 16号館3階

Phone: 0568-51-1763 E-Mail: coc@office.chubu.ac.jp

http://www3.chubu.ac.jp/coc/



学生が参加するプロジェクト活動の例

高齢者との交流

- ・シニア大学受講生のサークル活動支援
- ・シニア大学の講義を補助
健康増進実習 など
- ・世代間交流会への参加
座談会、防災活動、栄養教室、体力測定会 など
- ・LHS(Learning Home Stay) にて、ホストファミリーとの共同生活を体験
- ・LHV(Learning Home Visit) にて、ホストファミリー宅を訪問
- ・LHS, LHV 報告会での議論に参加

イベントの運営を通して地域貢献

- ・高校の体育系部活動でのケガ予防講習会 運営補助
- ・子育て相談会の運営補助
- ・街のイベント情報広報誌「まちこみゆニュース」の編集・発行
- ・世代間交流会の運営補助
座談会、防災活動、栄養教室、体力測定会 など

春日井のまちを知る・まちづくりを考える

- ・報酬型インターンシップ
- ・高蔵寺ニュータウン地域連携住居への入居と地域交流イベントへの参加
- ・春日井の NPO 活動情報発信 Web サイトの作成
- ・街のイベント情報広報誌「まちこみゆニュース」の編集・発行
- ・世代間交流会への参加
座談会、防災活動 など
- ・障害者スポーツのすすめ
- ・森の健康診断

技術を身につけながら地域貢献

- ・報酬型インターンシップ
- ・春日井の NPO 活動情報発信 Web サイトの作成
- ・春日井の医療情報共有システムの開発・構築
- ・高校の体育系部活動でのケガ予防講習会 運営補助
- ・子育て相談会の運営補助
- ・街のイベント情報広報誌「まちこみゆニュース」の編集・発行
- ・シニア大学受講生のサークル活動支援
- ・シニア大学の講義やサークル活動を補助
健康増進実習、パソコンサークル活動 など
- ・地域の健康教室の活動支援

その他、様々な活動が計画されています。詳しくは地域連携教育研究推進部までお問い合わせください。

メディエーター資格 取得者の声

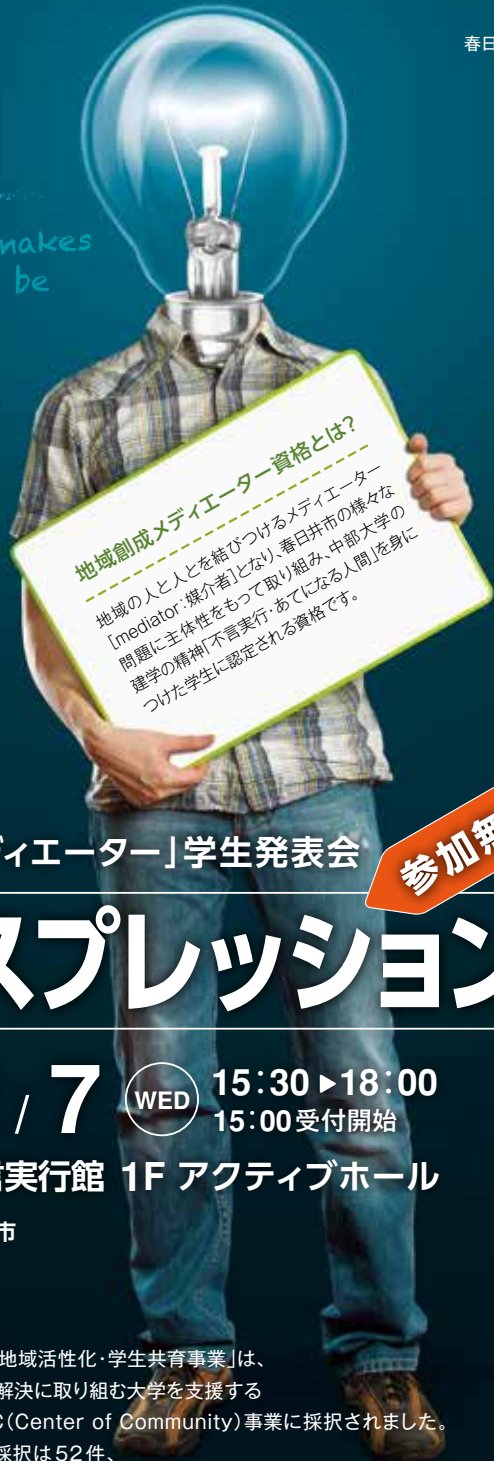
- ・発表の練習を繰り返すことで、人と話すことに自信が持てた。
- ・発表資料を作成するにあたって、自分を振り返ることができた。
- ・発表のために、論理的に考える力が鍛えられた。
- ・「学ぶ」ことによって、取り組んだ活動をより深く理解することができた。
- ・地域の方々と接することで、コミュニケーション能力を身につけられた。
- ・就職活動では、履歴書にメディエーターの資格を取得したことを記載したため面接でメディエーターについて質問された。発表資料を再び説明することで、自分のペースで面接を進めることができた。
- ・何となく就職を考えていたが、メディエーター取得後は自分の地元に戻り、地域の人々の役にたつ就職先を考えるようになり自分の将来が明確化できた。

別紙⑤ 地域創成メディエーター学生発表会 チラシ

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共有事業



Just
move on!
What you are now makes
what you will be
in the future.



地域創成メディエーター資格とは?
地域の人と人をつなぐつづけるメディエーター
[mediator:媒介者]となり、春日井市の様々な
問題に主体性をもって取り組む、中部大学の
建学の精神「不言実行」あてになる人間を身に
つけた学生に認定される資格です。

中部大学
第3回「地域創成メディエーター」学生発表会

参加無料

PLUS エクスペディション

日時 2016 12 / 7 WED 15:30 ▶ 18:00
15:00 受付開始

会場 中部大学 不言実行館 1F アクティブホール

主催 / 中部大学 後援 / 春日井市

地域創成メディエーターを育成する
「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共有事業」は、
平成25年、文部科学省が地域の課題解決に取り組む大学を支援する
「地(知)の拠点整備事業」=大学COC(Center of Community)事業に採択されました。
全国の大学等から319件が申請し、採択は52件、
そのなかで私立大学は15校のみという、優れた評価を得た事業です。

春日井のまちが ボクらのキャンパス。



「地域創成メディエーター資格」認定の最終課題「プラスエクスペディション」は
講義での規定単位取得に加え、
キャンパスを地域に広げた課外体験に参加・実践した学生たちが、
まちの再生や地域活性化などの特有の課題に地域と協働して
現場で解決策を考えて取り組んだ過程と成果の発表の場。
実社会のなかで起こった自身の変化や、自己成長を通じて得た、
いまの「自分」をプレゼンテーションします。
彼らの経験や努力の軌跡を知り、「自分」を生き生きと語るファイナルステージが
見る人を触発し、感動させてくれるでしょう。

お問い合わせ

中部大学 地域連携教育研究推進部
TEL.0568-51-1763 FAX.0568-51-4659

e-mail / coc@office.chubu.ac.jp
HP / http://www3.chubu.ac.jp/coc/

中部大学 COC |



中部大学

〒487-8501
愛知県春日井市松本町1200番地



「地域創成メディエーター」資格は、資格そのものが大切なのではなく、その道のりこそが学生自らにとって大事なことであり、「意義」と「価値」がある「行動」です。

文部科学省 平成25年度「地(知)の拠点整備事業」選定取組
春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業

第3回「地域創成メディエーター」学生発表会 PLUS エクスペディション

プログラム

- 15:30 開会挨拶：松尾 直規（中部大学学監／地域・国際連携教育研究センター長）
- 15:35 学生によるプレゼン発表 [60分]
- 16:35 学生によるポスター発表 [70分]
- 17:45 地域創成メディエーター認定証 授与式
- 17:55 閉会挨拶：倉根 隆一郎（中部大学地域・国際連携教育研究センター副センター長）
- 18:00 閉会

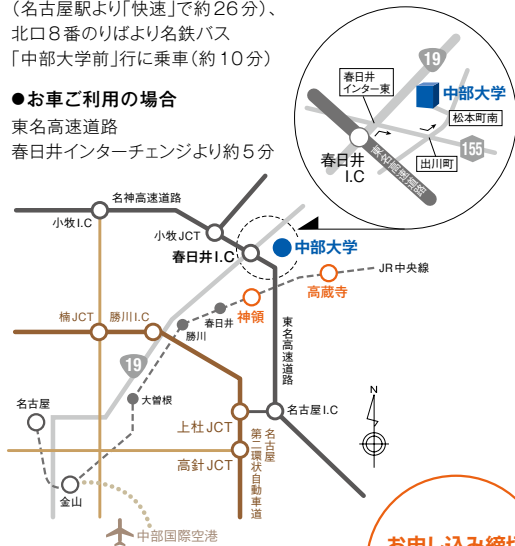
*プログラム内容は予告なく変更される場合がありますのでご了承ください



自己プレゼンテーション	ポスターセッション
地域創成メディエーター資格に挑む学生が、これまでの知識修得と体験を振り返り、達成感や今後の課題、目標なども交え、自己成長について自らプレゼンテーションを行います。	自己プレゼンテーション同様、ポスターを用いて自己成長について視覚的にPR。参加者の皆さまには学生と直接コミュニケーションをとっていただき、ご意見やアドバイスをお願いします。

中部大学へのアクセス

- JR 神領駅からスクールバス
JR中央本線「神領(じんりょう)」駅下車
(名古屋駅より「普通」で約26分)、
北口「中部大学スクールバスのりば」から約7分
- JR 高蔵寺駅から名鉄バス
JR中央本線・愛知環状鉄道「高蔵寺(こうぞうじ)」駅下車
(名古屋駅より「快速」で約26分)、
北口8番のりばより名鉄バス
「中部大学前」行に乗車(約10分)
- お車ご利用の場合
東名高速道路
春日井インターチェンジより約5分



お申し込み締切
12/1(THU)

参加ご希望の方は、下記ご記入のうえFAXにてご送信ください。お申し込みはメール、お電話でも受けつけております。

ふりがな			
氏名			
勤務先 団体名			
所属			役職
連絡先	TEL		
	e-mail		



中部大学

[参加お申し込み・お問い合わせ先] 中部大学 地域連携教育研究推進部

FAX. 0568-51-4659 / TEL. 0568-51-1763 e-mail. coc@office.chubu.ac.jp

2 活動報告

【地域創成メディエーター学生発表会(12/7)】の様子



開会挨拶 松尾 直規
(中部大学学監 地域・国際連携教育研究センター長)



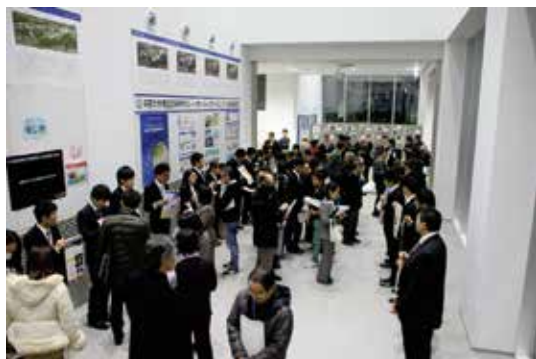
学生による自己プレゼンテーション



プロジェクト活動時の服装で



聴衆と学生との質疑応答



学生によるポスター発表



評価員による評価



地域創成メディエーター認定証授与式



口頭発表・ポスター発表学生合同記念撮影

別紙⑥

第3回 中部大学 地域創成メディエーター学生発表会 Plus エクスプレッション アンケート

本日は、ご多忙の中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。
今後の参考のため、お手数ですがアンケートにご協力をいただきますようお願い申し上げます。

- 1. 性別** 1. 男性（24名） 2. 女性（9名）
- 2. 年齢** 1. 29歳以下（5名） 2. 30代（4名） 3. 40代（4名） 4. 50代（5名）
5. 60代（9名） 6. 70歳以上（5名） 無回答（1名）
- 3. 所属**
- | | | |
|--------------|----------------|--------------------|
| 1. 大学教員（10名） | 2. 大学職員（1名） | 3. 教育関係機関（0名） |
| 4. 地方自治体（3名） | 5. 企業（3名） | 6. NPO・市民団体（1名） |
| 7. 学生（5名） | 8. CAAC受講生（4名） | 9. オープンカレッジ聴講生（1名） |
| 10. 一般市民（4名） | 11. その他（1名） | |
- 4. この「地域創成メディエーター学生発表会」を何でお知りになりましたか**
- | | | |
|---------------|--------------------|--------------|
| 1. ホームページ（3名） | 2. チラシ（4名） | 3. 広報春日井（1名） |
| 4. タウン誌（1名） | 5. 所属関係者からの案内（25名） | 6. その他（1名） |
- 5. この「地域創成メディエーター学生発表会」全体のご感想をお聞かせください**
- | | | |
|-----------------|--------------|-----------|
| 1. とてもよかった（14名） | 2. よかった（15名） | 3. 普通（0名） |
| 4. やや不満（0名） | 5. 不満（0名） | 無回答（4名） |
- 6. この「学生発表会」の会場や運営はいかがでしたか**
- | | | | |
|-----------|-------------|-------------|-----------|
| 会場 | 1. 良い（26名） | 2. やや良い（3名） | 3. 普通（1名） |
| | 4. やや悪い（0名） | 5. 悪い（1名） | 無回答（2名） |
| 運営 | 1. 良い（23名） | 2. やや良い（5名） | 3. 普通（1名） |
| | 4. やや悪い（0名） | 5. 悪い（1名） | 無回答（3名） |
- 7. 学生の自己プレゼンテーションを踏まえ本学教育実践に対するご意見ご感想がございましたらお聞かせください**
- ・今後も継続して下さい。
 - ・様々な人の話を聞くことができ、視野が広がった。
 - ・発表者5名の学生は、目標を持ち、それぞれ頑張っている姿が素晴しかったです。
 - ・「あてになる人間」創りを精神とされていることにとっても共感しています。10年以上前から恵那での人工林調査と一緒に活動させてもらって、学生らのエネルギーと前向きの姿勢（理論だけでない実践的な）にいつも感心しています。引き続き、地域活性化のために大学がやれることを追求して行ってほしいと期待しています。
 - ・このような発表の場を設けることが学生の成長につながると思うので、発表の機会を増やしていきたい。
 - ・学生たちが様々な事に取り組んでいる熱意に感銘を受けました。自己プレゼンでは、取り組み内容

2 活動報告

- をもっと具体的に知りたかったです。(本人の自己PR部分が長かったので・・・) また、今後その取り組みをどのように継続、発展させていきたいのかを具体的に聞かせて欲しいと思いました。
- ・聴衆の質問が出にくいのはなぜ? 自分に執着されすぎ? (表現上)
 - ・講演楽しかったです。
 - ・学生にとっても、とても良い機会となりました。来年もメディエーター育成に学生とともに取り組みたいと思います。
 - ・限られた時間での発表は大変だと思います。もう少し時間を(5分でも)多くしてあげたら?
 - ・良い機会をありがとうございました。若さを頂きました。
 - ・更に活動を続けて頂き、地域貢献を実のあるものにして下さい。
 - ・皆さん堂々とした発表で大変良かったです。
 - ・今後は、大学・地域・企業が協力していくことは、とても重要だと考えてます。その意味でも、素晴らしい取組だと思います。学生の発表資料や発言、話し口調(例えば、一人称は私で統一)など、社会を意識した指導を更に実施して頂くと、よりよい活動となると思います。
 - ・学生さんらしい素直な発表内容で、ほっこりしました。
 - ・時間の管理は大切だと思います。
 - ・学生は、質問するとしっかり説明できてすばらしいです。口頭発表者への質問を投げてみたのですが、しっかり自分の意見をもっていました。
 - ・「地域創成メディエーター」の要素は「何でもあり」なのでしょうか。それぞれの方の発表は非常におもしろいですが、「焦点」はどこにあるのか分かりませんでした。
 - ・学生さんたちが地域との交流を通して成長することがすばらしいことと思いました。学生さんたちの成長だけでなく、地域も成長すると思います。今後もこのような活動は広げて頂きたいです。

8. その他ご意見ご要望などございましたらお聞かせください

- ・ロビーでのポスター発表は互いの意志が通じ合わず、もっと運営の工夫が欲しかった。例えば、各学部別とか学年別とか活動別とか発表内容がはっきりする様に工夫して欲しかった。学生も各参加者も貴重な時間を有効に生かしたいです。
- ・どの発表も地域との関りで行動して自分を変え、成長させた報告ですばらしいです。
- ・春日井の中で、中部大生が多くの地域貢献に取り組まれている姿勢が分かりました。さらなる飛躍を期待しています。
- ・141名はすごい。ますますご発展を・・・
- ・来年も開催ぜひお願いします。
- ・ポスター立ち位置の目安だけでもあると良い。目星をつけた発表がどこか分からなかった。
- ・音が気になったが、司会の対応が良かった。
- ・今後も続けて下さい。
- ・学生ってすばらしい。若いってすごい。
- ・環境調整をお願いします。よい発表会であったと思います。
- ・ロビー下段は非常に寒く、リクルートスーツの学生には気の毒。
- ・会場が混み合い、人の導線が悪い。人と人がぶつかる。
- ・A～Cのプレゼンターの交代の案内が悪い。
- ・今後、春日井市以外にも活動を広げる予定はありますか?(費用が市から出ている事は十分承知していますが)

※このアンケートは今後の事業の参考にさせていただく以外に他の目的には一切使用しません。

アンケートにご協力を頂きまして、誠にありがとうございました。

平成 28 年 12 月 7 日実施
中部大学地域連携教育研究推進部

(2) ワーキンググループ報告

- ① 正課教育WG
- ② 報酬型インターンシップWG
- ③ コミュニティ情報ネットワーク事業WG
- ④ 生活・住環境を考えるまちづくりWG
- ⑤ 高齢者・学生交流・LHS WG
- ⑥ シニア大学WG
- ⑦ 高蔵寺NTキャンパスタウン化WG

① 正課教育WG

1. 活動組織

- 委員長 伊藤守弘
 副委員長 上野薫
 委員 倉根隆一郎、羽後静子、戸田香、山羽基、今枝健一、竹内環、吉村和也、大日方五郎、伊藤佳世、尾鼻崇、堀部貴紀、水野智之、小川宣子、牧野典子、西垣景太、千田隆弘、田中恭一、(松尾直規)

2. 活動計画

現在まで進めてきた教育改革をさらに発展させ、地域社会に役立つ人間となるための行動計画を持てるよう、全学共通教育の科目として昨年度と同様に『地域共生実践』を設置するが、秋学期にはより多くの学生が受講できるように並列5講義に増やした運営を試みる。学部・学科にも地域志向関連科目を設置し基礎教育と専門教育を交互に発展的に教育し、地域社会再構築のために必要な実践的人材を育成するための教育改革を目的とする。さらに最終的に中部大学が認定する“あてになる人間＝『地域創成メディエーター』”の育成を目的とする。

- 通年 地域創成メディエーターへの導き（春・秋オリエンテーション・メディエーターサロン・関連講義内）、AL/TBLの勉強会の実施、必要なパンフレット等の改正/作成・HPでの案内等の掲載。
- 4～8月 地域共生実践を3講義・並列開講の運営。27年度作成テキストの活用と修正案の収集。評価基準の再検討、担当教員・協力者の勧誘と増員。
- 8～9月 春学期地域共生実践のふりかえり、評価基準の再確認、共有化。秋学期新規担当教員・協力者への実施説明。
- 9～3月 地域共生実践を5講義・並列開講にて増設して運営、ふりかえり、評価基準の再確認。担当教員・協力者の勧誘。
- 11～12月 地域創成メディエーター学生発表会（+エクспレッション）を開催し、地域創成メディエーターを認定する。

3. 活動成果

- 通年 地域創成メディエーターへの導き（春・秋オリエンテーション・関連講義および委員会内）、必要なパンフレット等の改正/作成・HPでの案内等の掲載を実施した。本年度は各関連講義内および関連委員会での勧誘に注力したため、メディエーターサロンは実施しなかった。AL/TBL関連の勉強会に3件参加し、講義運営に活かした。

2 活動報告

- 4～8月 地域共生実践を3講義・並列開講を運営した(履修者合計166名、教員数10名)。27年度作成テキストの活用と修正案の収集、コンテンツ1件を新規追加した。評価基準を再検討し、担当教員・協力者を増員した。新規講義担当教員向けにテキストの説明会を開催した。
- 8～9月 春学期地域共生実践のふりかえり、評価基準の再確認、共有化を行った。秋学期新規担当教員・協力者に対し実施について説明した。
- 9～3月 地域共生実践を5講義・並列開講に増設して運営した(履修者合計340名、教員数12名)、コンテンツ1件を新規追加した。ふりかえり、評価基準の再確認を行った。引き続き担当教員・協力者の勧誘を行った。
- 11～12月 地域創成メディエーター学生発表会(+エクспレッション)を開催し(2016年12月7日・20日)、地域創成メディエーター86名を12月末時点にて認定した(昨年度の約17倍の認定数)。秋学期終了後には追加で60名が認定予定である(合計146名予定で昨年度の29倍)。応募者数が多かったため、ポスター発表と口頭発表に分け、2日に分けて発表会を実施した。人数は倍増し、学生個人レベルではプレゼンテーション力等の向上が、全学的には本資格およびCOC事業の認知度アップに繋がった。一方で、学生指導の質の補償が今後の課題として認識された。

図1 「地域共生実践」の講義風景



図2 地域創成メディエーター学生発表会(+エクспレッション)の様子



② 報酬型インターンシップWG

1. 活動組織

委員長 櫻井誠
 副委員長 佐伯守彦
 委員 栗濱忠司、山口直樹、對馬明、武田明、宮本順一、大竹雄平、
 オブザーバー 松尾直規

2. 活動計画

春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に社会の現場で学生を教育するインターンシップ型の就労システムの構築を目的とする。

通年 学生の居住地に近い地域での企業開拓について検討する。

4月 医療系での連携について議論する。
 学生への説明会を開催する（7月、9月、11月）。
 新入生にパンフレットを配布する。

10月 特命教授の会を開催する。

10月 座談会を実施する。

3月 特命教授の会を実施する。

3. 活動成果

地（知）の拠点整備事業も4年目に入り、報酬型インターンシップ活動は学内においては周知が進み、また、学生を受け入れている春日井商工会議所会員企業においても周知が進んだ。報酬型インターンシップは春日井商工会議所との連携による取り組みと、医療機関で実施する医療系報酬型インターンシップの2種類があり、その両方を報酬型インターンシップWGで運用などについて議論を行いながら展開した。以下に活動内容を記述する。

1. 報酬型インターンシップ参加企業は70社に増加した。
2. 春学期、夏季休暇、秋学期、春季休暇、医療系報酬型インターンシップにおいて、合計80名が参加した。内訳は春学期14名、夏季休暇29名、秋学期9名、春季休暇10名、医療系報酬型インターンシップ18名であった。
3. 春日井商工会議所と2回(9月、2月)打ち合わせを行った。
4. ポイント制度（春学期・秋学期：1ポイント、夏季休暇・春季休暇：0.7ポイント、

2 活動報告

合計 2.0 ポイント以上認定) により報酬型インターンシップ修了証書を授与することを決定し、本年度は3名に授与する予定である。

5. 学内説明会を4回(4/6 参加学生 68名、6/24 参加学生 55名、9/21 参加学生 15名、12/21 参加学生 14名)開催した。
6. 参加者との意見交換会を2回(5/9 参加学生 12名、10/20 参加学生 8名)開催した。
7. 中部大学側からは学長、副学長、学部長を中心にしたメンバーで構成され、春日井商工会議所からは会頭、学外特命教授、学外特命講師で構成された学外特命教授の会を2回(3/10、10/13)行った。
8. 学生向けのパンフレットを作成し、全学に配付するとともに、報酬型インターンシップ参加を促すポスターを作成し、学内に掲示している。



図1 アクティブホールでの学生への説明会



図2 学外特命教授の会



図3 コモンズセンターでの学生への説明会

③ コミュニティ情報ネットワーク事業WG

1. 活動組織

委員長 保黒政大
副委員長 前田和昭
委員 倉根隆一郎、富永敬三、中路純子、河内信幸、宮下浩二

2. 活動計画

地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がIT化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究を推進する。

1) 医療情報システム

医療情報共有システムを改良すると共に、システム利用業種の増加を図る。

2) シニア大学講義映像配信

学生とIT企業の開発者とのミーティング・開発を通して、シニア大学で必要なアプリ開発の基礎を学ばせる。

3) NPO活動情報受発信システム

NPOの活動情報を発信するホームページを定期的に更新する。

活動情報の発信およびホームページ広報のために地域広報誌を作成、発行する。

・子育て支援相談会及び「プチ勉強会&交流会」

子育て支援相談会を開催して子育てに悩む市民を支援すると共に、学生を相談会の運営に参加させて将来の糧とする。

・高校生向け部活動支援

体育会系部活動に所属する高校生に向けて、部活動におけるケガの発生を未然に防ぐための講義・実技の講習会を実施する。

3. 活動成果

【イベント】

・子育て相談会プチ勉強会&交流会（5月）。参加学生数：3名

・部活動支援講習会（6月）。参加学生数：4名

高蔵寺高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。

参加生徒数：約180名

・部活動支援講習会（7月）。参加学生数：9名

春日井西高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。

参加生徒数：約150名

2 活動報告

- ・NPO法人 まちのエキスパネットの方々と様々に議論。(8月)
- ・子育て相談会プチ勉強会&交流会(8月)。参加学生数:4名
- ・子育て相談会を実施(9月)。参加学生数:5名、卒業生:1名
10件の相談を8名の専門スタッフで対応。
- ・シニア大学の講義映像配信システム開発に関する講習会(10月~1月に9回)。参加学生数:最大で8名
- ・「まちこみゅニュース」編集に向けた地元のデザイナーによるデザイン講習会(11月に2回実施、~3月に2回実施予定)。参加学生数:最大で12名
- ・子育て相談会プチ勉強会&交流会(11月)。参加学生数:4名
- ・部活動支援講習会(12月)。参加学生数:10名
高蔵寺高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。
参加生徒数:約140名
- ・「まちこみゅニュース Vol.5」を発行(1月)。参加学生数:2名
- ・子育て相談会プチ勉強会&交流会開催予定(2月)。参加学生数:5名

【概要】

- ・NPOの活動情報発信と情報共有のためのホームページを更新すると共に、本ホームページの周知と電子媒体が苦手な方々への対応として、紙媒体の「まちこみゅニュース」を発行した(参加学生数:2名)。また、デザインの知識を習得させるため講習会を開催した(参加学生数:12名)。
- ・発達障害児を持つ家族など、子育てをサポートする活動として「子育て相談会」を9月に実施した(参加学生数:5名、卒業生参加者数:3名)。その他、4回の「子育て支援相談会プチ勉強会&交流会」を実施(参加学生数:16名の予定)。
- ・シニア大学を充実するためのアプリ開発に関する勉強会を実施した(参加学生数:8名)。
- ・医療情報共有サービスシステムにおいて、他職種連携に向けた春日井市医師会主催の導入研修会にて講演を実施した。
- ・春日井市内の高校にて、部活動時のケガ防止やケガ発生時の対応に関する講習会やアンケートを実施した(参加学生数:10名)。



デザイン講習会



シニア大学の講義映像配信システム開発に関する講習会



子育て支援相談会



部活動支援講習会

④ 生活・住環境を考えるまちづくりWG

1. 活動組織

- 委員長 磯部友彦
副委員長 松山明
委員 豊田洋一、内藤和彦、山羽基、杉井俊夫、武田誠、伊藤睦、
余川弘至、岡本肇、行本正雄、甲田道子、南基泰、上野薫、
浦井久子、尾鼻崇、林良嗣、大河内修、宮田茂

2. 活動計画

春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域住民が安心快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する地域開発研究を進める。

1) 意見交換会などの実施

高蔵寺ニュータウンの課題についての住民などとの意見交換の場に参加。

2) まちづくり講演会の開催

まちづくり講演会を開催して、全学部の学生に「まちづくり」の意義とそれへの参加方法を学ぶ機会をつくる。

3) タウンウォッチングの実施

様々な地域の視察を通して、学生の学習に役立てる。

4) 正課並びに自主活動の強化

通年 演習・ゼミナールのテーマとして現実の地域課題を取り上げる。

通年 卒業研究のテーマとして地域課題に対する解決方法に取り組む。

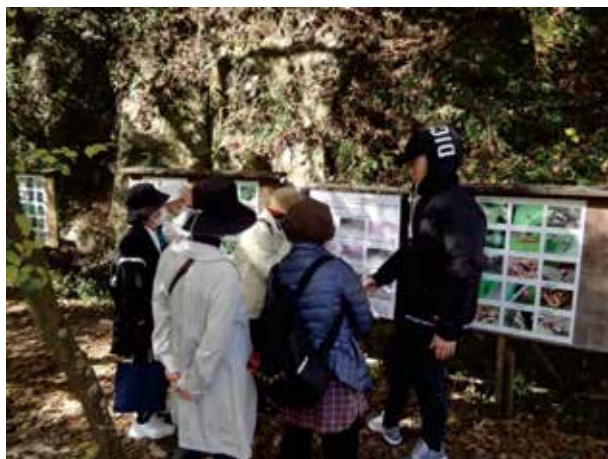
通年 地域の人々との十分なコミュニケーションを交えた学生の自主活動を促進する。

3. 活動成果

今年度は、以下に示す通り、WG全体での活動、各学科単位での活動、個々のメンバーによる活動がなされた。主なものを経時的に列挙する。

- 1) 2016年5月から2017年1月までの2週間毎。NPO愛岐トンネル再生保全委員会と中部大学学生による野生生物共同調査を実施。(南対応)【参加学生のべ85名】
- 2) 2016年5月7日 建築学科「ゼミナールA」において可児市、名古屋市緑区、天白区の良い住宅地の現地見学会を実施。(松山対応)【参加学生6名】
- 3) 2016年5月15日 水防講習会に院生・学生参加。(愛西市・日光川河川防災ステーション)(杉井・武田・余川対応)【参加学生24名】

4) 2016年5月29日 国土交通省中部地方整備局等主催、平成28年度木曾三川連合総合水防演習・広域連携防災訓練(愛知県稲沢市・サリオパーク祖父江)に院生・学生参加。(杉井・武田・余川対応)【参加学生22名】



近代化産業遺産
「愛岐トンネル群」保全活動

5) 2016年6月15日 豊川市中心市街地地区(豊川稲荷地区、諏訪地区)のまちあるき及び懇談会の開催。中部大博士後期課程の院生、豊川市役所職員、地元商店主との交流。(岡本対応)

6) 2016年6月15日、11月16日 春日井市カヤネズミ保全区(熊野桜佐地区)での保全活動。(上野対応)【参加学生33名】

7) 2016年6月19日、10月28日 春日井市カヤネズミ保全地域におけるカヤネズミ球巣数および営巣環境、個体の行動観察。(上野対応)【参加学生33名】



カヤネズミ保全区
(熊野桜佐地区)での保全活動

8) 2016年6月30日 「第26回環境工学総合シンポジウム2016」(金沢歌劇座)において、院生が春日井市との共同研究成果(廃食油の回収とそれを原料とするBDFの製造・利用の研究)を発表。(行本対応)

9) 2016年7月20日 春日井市内の廃食油回収ステーション(春日井市役所、西部ふれあいセンター、交通児童遊園)において回収方法等に関するアンケート調査の実施。(行本対応)【参加学生8名】

10) 2016年7月27日 春日井市内の廃食油回収ステーション(東部市民センター、高蔵寺ふれあいセンター、坂下公民館、南部ふれあいセンター、味美ふれあいセンター)において回収方法等に関するアンケート調査の実施。(行本対応)【参加学生9名】



廃食油回収状況

11) 2016年8月2日~7日 建築作品展(文化フォーラム春日井)。優秀な卒業設計作品ならびに修士設計作品を一般の方々にもご紹介した。(建築学科教員対応)

2 活動報告

1 2) 2016年8月9日 「第25回日本エネルギー学会大会」(工学院大学)において、「春日井市における廃食油回収の現状調査とGIS解析」を発表。(行本対応)

1 3) 2016年8月19日 サウンドスケープ調査の実施。(大学内)(尾鼻対応)【参加学生5名】

1 4) 2016年9月4日 「2016年健康救急フェスティバル」(春日井市総合体育館)にて春日井市民に啓発活動を行った。(宮田対応)【参加学生15名】

1 5) 2016年9月7日 新名古屋火力発電所見学。(山羽対応)【参加学生9名】

1 6) 2016年9月9日 サウンドスケープ調査の実施。(勝川駅周辺)(尾鼻対応)【参加学生4名】

1 7) 2016年9月27日 都市建設工学科「部門創成B」において名古屋都市センター視察。(磯部・岡本対応)【参加学生18名】

1 8) 2016年10月7日 サウンドスケープ調査の実施。(JR春日井駅周辺・市街)(尾鼻対応)【参加学生5名】

1 9) 2016年10月11日 都市建設工学科「部門創成B」において高蔵寺ニュータウン視察。(磯部・岡本対応)【参加学生19名】

2 0) 2016年10月14日 サウンドスケープ調査の実施。(高蔵寺駅周辺)(尾鼻対応)【参加学生4名】

2 1) 2016年10月15~16日 春日井まつり「わいわいカーペンターキッズ」に学生参加。(松山対応)【参加学生10名】

2 2) 2016年11月1日 都市建設工学科にて、地域経済分析システム(RENAS)活用講座(愛知県の出前講座)の開催。(磯部・武田・岡本対応)【参加学生24名】

2 3) 2016年11月12日 講演会『少年~高校野球選手を障害から守る』(不言実行館 アクティブホール)の開催。(浦井対応)【参加学生85名】

2 4) 2016年11月15日 都市建設工学科「部門創成B」において春日井市中心部とJR春日井駅視察。(磯部・岡本対応)【参加学生19名】

2 5) 2016年11月18日 サウンドスケープ調査の実施。(松本町周辺)(尾鼻対応)【参加学生3名】

2 6) 2016年11月23日 春日井市内の廃食油回収ステーション(味美ふれあいセンター、高蔵寺ふれあいセンター)において回収方法等に関するアンケート調査の実施。(行本対応)【参加学生5名】



2016年健康救急フェスティバル
(春日井市総合体育館)



サウンドスケープ調査

27) 2016年11月26日 愛岐トンネル「秋の一般公開」にて活動成果を報告。(南対応)
【参加学生3名】

28) 2016年12月2日 環境配慮型建築
見学(東海市・愛知製鋼新本社ビル)。
(山羽対応)【参加学生10名】

29) 2016年12月3日 日本生態学会
2016年度中部地区大会(三重大学,
津)にて、愛岐トンネル群の保全活動の
成果を報告(二報)。(南対応)



JR 春日井駅の視察

30) 2016年12月19日 愛知県農業総合
試験場と研究協定締結3大学の合同研究交
流会(名古屋大学, 名古屋)にて、愛岐トンネル群の保全活動の成果を報告(二報)。
(南対応)

31) 2016年12月23日 サウンドスケープ調査の実施。(国道19号沿道)(尾鼻対応)
【参加学生6名】

32) 2017年2月13日 応用生物学部環境生物科学科卒業研究発表会にて、「春日井市
カヤネズミ保全グループ」の報告。(上野対応)【担当学生2名】

33) 2017年2月18日 日本技術士会中部本部修習技術者研究業績発表会(中部大学名古
屋キャンパス)にて、「春日井市における廃食油回収の現状調査とGIS解析」を院生が報
告。(行本対応)

34) 2017年3月11日 「日本デジタルゲーム学会2016年度大会」にて「春日井地域の
音風景調査とサウンドデザインに関する教育研究」の活動の一部を報告。(尾鼻対応)

35) 通年。都市建設工学科での卒業研究において地域に関する多くの課題が選定され、
解決方法の検討がなされた。【参加学生28名】

36) 通年。建築学科での卒業研究、卒業設計において地域に関する多くの課題が選定さ
れ、解決方法の検討がなされた。【参加学生77名】

37) 通年。食品栄養科学科での卒業研究において地域高齢化を睨んだメニュー開発の検
討がなされた。【参加学生10名】

4. 次年度に向けての課題

- 1) 学外向け(例えば地元市民)のセミナー等を開催する。
- 2) 地域創成メディエーターの育成を計画的に実施する。
- 3) グループ内の交流(教員だけでなく学生・院生を含める)を活発化させる。

⑤ 高齢者・学生交流・LHS WG

1. 活動組織

- 委員長 戸田香
副委員長 堀文子
委員 長島万弓、野田明子、三摩真己、櫻井誠、尾方寿好、矢澤造成、
原田智之、城憲秀、内藤和彦、河村守雄、栗濱忠司、河内信幸、
福田峰子、谷利美希、杉本英晴、佐藤友美、宮本靖義、松村亜矢子、
大竹雄平

2. 活動計画

ラーニングホームステイ (LHS) からラーニングホームビジット (LHV) に重点をシフトさせ、参加学生の増加を図る。また、LHS・LHVのホストファミリー獲得に向けて定期的な世代間交流会を企画する。1) 定期的な世代間交流会開催 2) スマホ&タブレット教室・福祉用具セミナー・健康教室の開催 3) LHS・LHVの実践と報告会開催。

1) 高齢者－学生交流活動の定期的開催

昨年度の活動計画を踏襲しつつ、多くの学部からの学生参加を呼び掛ける。

2) スマホ教室 (2か月間 全4回で計画)・健康教室 (年24回で計画)

3) LHS・LHVの実施 (スケジュールは昨年度に概ね即して実施)

4月～7月 世代間交流会ならびにLHSへの参加学生・ホストファミリー募集

7月 LHS・LHV参加学生オリエンテーション

8月 お見合い交流会

9月 LHS・LHV実施

11月 体験報告会・ホストファミリー懇談会

3. 活動成果

1) 世代間交流会への参加人数 (内、学生参加数)

5月 第1回 教育セミナー 参加者 45名 (27名)

6月 第2回 災害に備えて 参加者 65名 (48名)



AEDの取り扱い講習



非常食試食体験

7月 第3回 栄養教室

参加者 38名 (21名)



うどん粉を
こね、しっかり
踏んで手打ち
うどんを仕上
げました！

11月 第4回 体力測定会

参加者 145名 (82名)



柔軟性測定



骨密度測定



結果説明

半数以上が昨年度も参加。今後もシニア世代の健康増進活動に貢献します。

2) スマホ&タブレット入門講座

7月・8月 全4回

受講者 7名×4回 28名

高蔵寺ニュータウン在住のシニア講師と学生アシスタント3名で指導。

3) 福祉用具セミナーの開催

8月 介護機器(リフト)体験

参加者 16名 (5名)



スライディングシート体験



介護用品の紹介と介護される立場を世代間で模擬体験



走行式リフト体験

4) お見合い交流会 8月

参加者 29名 (15名)

5) LHSの実施

9月 1世帯へ男子学生1名がLHSを実施(2泊3日)

6世帯へ学生14名が2~3名ずつでLHVを実施(各世帯とも2回ずつ訪問)

4学科14名の学生が、それぞれに交流のテーマを設定し、事前にホストファミリーと打ち合わせの上交流を実践。

6) LHS・LHV報告会の開催 11月

報告者 シニア7名、学生13名

参加者 35名 (20名)

「ホストの優しさと人生経験の豊かさがとても勉強になりました。」と全ての参加学生からホストへの感謝と良き体験が報告されました。

2 活動報告

- 7) KCGサークル 4月～翌年3月 2回/月で開催
レクリエーションを取り入れて活動中 鳴子踊り⇒
まだまだ新たな活動を取り入れる予定です。



8) まとめ

持続可能な世代間交流会の企画が概ね整った。今年度は中部大学に機能別学生消防団が誕生し、今後の地域防災に関わる活動の充実が期待される。栄養・運動・睡眠をテーマとした地域住民の健康増進と合わせて、世代間交流企画の柱になると思われる。

LHSについては、住民側に潜在的な受け入れの可能性が示唆されるものの、ホストファミリーの獲得は困難な現状にある。個別の交流による教育効果は高いが、世代間交流に参加する学生の母数の増加を優先すべきと思われる。高齢者－学生交流・LHS WGとしては今後LHV活動を積極的に推進する。

4. 今後の課題

1) 世代間交流会への地域住民の参加拡大。

学内からの参加数は延べ 216 名である。一方地域住民の参加数は延べ数で学生数の半数未満であり、顔ぶれが固定している現状にある。防災企画については地域の関心は高いと思われ、積極的な広報活動により参加数の増加に努める。

2) LHV参加学生数の増大

参加した学生からの体験談を後輩に伝えるための機会を設けるため、全学を対象とした説明会を行う。

3) LHV受け入れ世帯の獲得

世代間交流会において、毎回のアナウンスにより募集活動を継続する。

⑥ シニア大学WG

1. 活動組織

委員長	對馬明
副委員長	尾方寿好
委員	甲田道子、櫻井誠、羽後静子、藤丸郁代、山北晴雄、林上、末田智樹、町田千代子、根岸晴夫、堀田典生、宮本靖義、宮田茂、伊藤正晃、加藤透、種村育人、稲ヶ部正幸、大竹雄平、田中恭一、松田佳子

2. 活動計画

高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的としたシニア世代への実践教育。

- 4月 1・2期生の後期授業（春学期）を開始する。
- 5月 3期生の募集を開始する。
- 7月 3期生の可否を決定する。
- 8月 1期生の修了式を行う。
- 9月 3期生の入学式を行い、2・3期生の授業（秋学期）を開始する。
- 10月 オリエンテーション合宿を実施する。
- 通年 既存のカリキュラムの充実を図る。
- 通年 地域在住のシニアに対して体験入学の開催など、シニア大学を身近に感じさせる企画を実施する。
- 通年 募集パンフレットの配布先を検討する。

3. 活動成果

活動計画に即し、中部大学アクティブアゲインカレッジ（シニア大学）を運営した。以下に経時的に活動成果を報告する。

- 1) 4月に1・2期生の後期授業（春学期）を開始した。
- 2) 5月から新たな募集パンフレットを作成し、新1年生（3期生）の募集を行った。
- 3) 7月に3期生としての入学希望者の面接試験を行い、20名が新たにシニア大学受講生となった。
- 4) 7月に1期生の学習成果発表会を行い、全員（11名）所定のカリキュラムが修了した。
- 5) 8月に1期生の修了式を行った。

2 活動報告



1 期生学習成果発表会（平成 28 年 7 月）



1 期生修了式（平成 28 年 8 月）

6) 8月に介護職員初任者研修講座をキャリア支援課と共催し、シニア大学授業の一環としてCAAC受講生6名が、学部生8名とともに受講した。シニア大学受講生と学部生は世代の壁を越えて、協力し合いながら講座を修了することができた。

7) 9月に3期生の入学式を行い、2・3期生の前期授業（秋学期）を開始した。また、新1年生のオリエンテーション合宿を行った。



3 期生入学式（平成 28 年 9 月）



3 期生オリエンテーション合宿（平成 28 年 9 月）

8) 体験入学を随時開催する旨、さまざまな媒体を通して地域の方々に案内をした。その結果10名の見学者が来校され、シニア大学への入学につなげることができた。

今年度から新コース（国際・地域・文化コース）を設置し、既存コースと合わせて2コース体制となった。それに伴うカリキュラムの改正をおこない、学びの幅がさらに広まった。シニア大学の在籍者数は現在、2年生13名、1年生20名の合計33名である。

第1期生として修了した11名中9名が新コースに再入学し、コミュニティープラザ Kozoji を活動拠点として社会貢献活動を開始したり、再就職を果たしたりした。再入学しなかった2名もキャリアコンサルティングNPOの立ち上げやボランティア活動を行っている。また、在校生である2・3期生も同様に社会貢献活動を展開している。少しずつではあるが、シニア大学の活動計画である「高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的としたシニア世代への実践教育」を推進することができたと考える。

⑦ 高蔵寺NTキャンパスタウン化WG

1. 活動組織

委員長 櫻井誠
 副委員長 羽後静子
 委員 栗濱忠司、戸田香、内藤和彦、福井弘道、横手直美、大竹雄平、
 蓑島智子、原田智之、(松尾直規)

2. 活動計画

高齢化で衰退した高蔵寺ニュータウンを活性化する目的で中部大学のキャンパス機能を高蔵寺ニュータウン内に拡大し、地域と大学が融合した若者も生活する場とする。

1) 春日井市・URとの連携による地域連携住居の充実

通年 URおよび春日井市と打ち合わせを行う。

4月 新入生に対して、パンフレット配付する。

10月 地域連携住居およびシェアハウスの学生への説明会を開催する。

2) コミュニティプラザ Kozoji の充実

通年 高蔵寺NTのコミュニティプラザ Kozoji における地域連携を充実させる。

3. 活動成果

地（知）の拠点整備事業も4年目に入り、キャンパスタウン化活動においても本格的な活動を行っている。キャンパスタウン化は学外において地域住民、春日井市、UR都市機構およびNPO法人との連携による取り組みであり、学内においては中部大学学生、学生支援課および図書館との連携による取り組みである。その両方をキャンパスタウン化WGで運用などについて議論を行いながら展開した。以下に活動内容を記述する。

1. URおよび春日井市と協議を重ねた結果、平成27年4月から地域連携住居の運用を開始し、昨年度21名から本年度は52名の学生が入居し、飛躍的に利用者が増加した。内4名が戸建の住居をシェアしている。
2. 中部大学高蔵寺NT事務室（地域連携拠点として位置づけ、コミュニティプラザ Kozoji と命名）を高森台団地004号棟1階の旧医療施設跡に設置し、10月から一般向けに開放した。「まちつぼニュース」と「広報春日井」により地域の住民に広報を行った結果、228名の利用があった。
3. 地域連携住居の募集にあたり、新入生宛入学手続関係書類に案内チラシを同封した結果、新入生の入居者数が飛躍的に増加した。

2 活動報告

4. 学内説明会を全学向けに3回、学生寮寮生向けに1回の合計4回（7/20（参加学生数：8名）、11/30（参加学生数：4名）、1/25（参加学生数：1名）、11/24に学生寮退寮予定学生（参加学生数：49名））実施した。
5. 入居学生による活動組織を立ち上げ、中部大学KNT創生サポーターズCU⁺（通称CU⁺）と命名した。入居学生は半年間で5ポイント（1ポイントは概ね1～2時間の貢献活動に対しポイントを付与）の地域貢献活動を行い、学生支援課に実施報告書を提出している。また、CU⁺主催によるガラス細工作り体験などの地域交流イベントを3回開催した。
6. UR都市機構および春日井市と打ち合わせを2回行った。
7. キャンパスタウン化WGを6回行った。



図1 高蔵寺NTタウンウォークでの貢献活動



図2 自主イベントコーヒーサロン開催

(3) 地域志向教育研究経費の成果報告

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	① 地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	イトウカヨ 伊藤佳世	所属・職名	経営情報学部 経営総合学科・准教授		
活動課題	学生主体によるマネジメント分野の標準化教材を活用した地元企業・青少年支援				
活動組織(分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員)、協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
イトウカヨ 伊藤佳世	代表者	経営総合学科・准教授	環境管理 標準化教育	修士	中部大学ESDエコマネージャーチーム顧問、監督
中部大学ESDエコマネージャーチーム	協力者	経営情報学部			企画、運営、広報
中部大学ESDエコマネージャーチーム					
4年	水口就登 田中翔太 菅谷浩佑 山貴斗	牧野喜之 田中駿吾 田中萌子	池田敬介 古山愛樹	エンカンイ 細谷健登	大橋亮祐 保浦徹 元永拓己 吉田直樹 榎山貴斗
3年	荒木佑希也 野口奨吾	井上恭助 増田高英	各務玄太郎 森下裕斗	熊澤友太	笹井理央 相馬滉一 奈加拓也 仲尾裕太
2年	青木泰樹 大須賀隆起 石川彩音 若杉拓哉				
1年	阿知波幸佑 神谷鞠依	石田亮太 川本隆貴	伊吹俊輝 桑原和希	榎本雄太 小村佑哉	大野稔之助 三枝立明 志賀勇斗 柴田瑠莉 杉浦圭紀
活動経過と成果					
二つの目的①学生主体とした標準化教室を通じ産学官民連携活動の実践、②ESD 学園としての ESD 推進を実現するために以下の内容を実施した。					
① 学生主体とした標準化教育					
1-1 ファシリテーター育成					
標準を教えるというところにあたり、1年生から4年生までのチーム全員が教材について完ぺきに説明できるように育成する。子供からお年寄りまで、幅広い年代の方々にわかりやすく体験してもらえるように上級生が下級生に指導を行い、一人で実演の担当ができるようになった。					
1-2 産業界向けの標準化教育					
2月11日には、企業向けの労働安全衛生マネジメントシステムを学ぶ「働きやすい職場」を主催した。第一部は、日本規格協会の千葉氏に規格の専門家として、中央労働災害防止協会の森田氏に労働安全衛生の専門家として基調講演をしていただいた。第2部では企業向け標準化教室として、標準化教育について概説し、来場者に対して標準化教材を実演し、意見、感想をいただき、とても好評を得た。その後ビジネス交流会の場を設け、企業の方々と学生を交え、教材や労働安全衛生マネジメントシステムについて、有意義な交流を行うことができた。					
② ESD の推進					
本年度は青少年育成の活動に焦点をあて、以下を実施した。					
2-1 子供及び一般向け標準化教室					
日進市環境課と連携をとり、特に次世代を担う地元の小中学生でESD活動に関心のある団体向けの活動として、日進市主催の日進わいわいフェスティバルで周辺大学と連携するプロジェクトを企画運営した。ESDの周知を目的とした共同大学ブースづくりも行った。イベント当日は、子供に標準化教材を体験してもらい、体験してもらった感想や要望を書いてもらうことで、意見や情報交換を行うことができた。					

春日井市の依頼に基づき、10月の15、16日に春日井祭りエコワールドに出展した。環境マネジメントシステムの教材と労働安全衛生マネジメントシステムの教材を実演した。2日間の合計で2000人以上の来場者があり、たくさんの子供にも教材を体験してもらうことができた。

愛知県の依頼に基づき、環境マネジメント教材の改定を行った。既存の標準化教材をさらに簡易的に改定し、愛知県庁からのコメントを反映したうえで、11月19、20日の愛知県主催ESDイベント「レッツエコアクション」に出展した。教材の実演も行いながら、インフォメーション担当としてイベント運営を担当したことによりイベント企画運営に必要なスキルを身に付けることができた。

2-2 紙芝居開発と読み聞かせ

愛知県青少年育成アドバイザー連絡協議会との連携を行った。スマートフォンの適正利用を促す紙芝居を開発した。開発段階で青少年育成の専門家より教材に対するコメントをいただき、それを反映しながら春日井市主催のわいわいカーニバルや、青少年育成アドバイザー連絡協議会主催のイベントで、子供たちに向けて実演した。

イベント名	日付	主催	場所	教材	来場者
わいわいカーニバル	5月15日	春日井市	落合公園	紙芝居	500
愛知県青少年育成アドバイザーフェスティバル	10月1日	愛知県青少年育成アドバイザー連絡協議会	鶴舞公園	紙芝居	58
春日井まつり	10月15、16日	春日井市	中央公園	標準化教材	2393
レッツエコアクション	11月19、20日	愛知県	金山駅周辺	改定教材	1205
わいわいフェスティバル	12月3日	日進市	市民会館	標準化教材	50
企業連携イベント「働きやすい職場」	2月11日	中部大学ESDエコマネーチーム	中部大学	標準化教材	61

〈学生たちの声〉

地域連携プロジェクトにかかる企画・運営・広報を学生主体で行えたことは将来のための貴重な経験であった。今後はこの経験で得た知識を次年度の活動に反映するとともに継続的改善を行うことで力量の向上と地域連携強化に取り組みたいとの声を得た。

活動成果の公表

標準化教材及びチームの報告書は伊藤佳世研究 (http://www3.chubu.ac.jp/faculty/ito_kayo/) で、また、チームの活動は随時FB (<https://www.facebook.com/ChubuunivESDecomoneyteam/>) で公表している。本年度は地域創成メディアーターとして3名を輩出できた。また、学生たちは活動を通じて、社会人として必要な基礎力を身に付けることができた。なお、中部大学ESDエコマネーチームは12月4日に名古屋産業大学で開催された社会人基礎力育成グランプリ2016中部地区予選大会において奨励賞を受賞した。



平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	ミズノ トモユキ 水野 智之	所属・職名	人文学部歴史地理学科・准教授		
活動課題	春日井市・松本町史の編さん事業と連携する地域史研究				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ミズノトモユキ 水野智之	代表者	人文学部歴史地理学科・准教授	日本中世史	博士	全体の統括
シノミヤユウジ 篠宮雄二	分担者	人文学部歴史地理学科・教授	日本近世史	修士	近世史料・絵図の整理、調査
スエタトモキ 末田智樹	分担者	人文学部歴史地理学科・准教授	日本近世史	博士	近世史料の整理、調査
モリタトモコ 森田朋子	分担者	人文学部歴史地理学科・教授	日本近代史	博士	近代史料の整理、調査
活動経過と成果					
<p>①2016年9月24日午後 中部大学人文学部 25号館 254B で、松本誌編さん委員および水野による調査についての説明会。アルバイト学生、水野参加。</p> <p>②2016年10月2日午前・午後 松本公民館で実施された敬老会において、アルバイト学生による年配者からの聞き取り調査。末田准教授、水野参加。</p> <p>③2016年10月23日午前・午後、10月30日午前 松本町の年配者宅に訪問して、アルバイト学生による聞き取り調査。松本誌編さん委員も同行。森田教授、水野参加。</p> <p>④2016年11月19日・20日午前・午後 中部大学において、春日井市所蔵、松本町関係近世史料の調査。アルバイト学生、松本誌編さん委員、篠宮教授、森田教授、末田准教授、水野参加。</p> <p>⑤2016年12月26日午前・午後 松本公民館において、松本町所蔵の近代文書調査・整理。アルバイト学生、松本誌編さん委員、林上教授、佐々井真知講師が協力。水野参加。</p> <p>⑥2017年1月14日・15日午前・午後 松本公民館において、松本町所蔵の近代文書調査・整理。アルバイト学生、松本誌編さん委員、水野参加。</p> <p>⑦調査後の史料整理のため、適宜、中部大学においてアルバイト学生によるデータ入力をする活動。</p> <p>⑧2017年3月11日、不言実行館でシンポジウムを開催する予定であり、それに向けた準備活動。篠宮教授、森田教授、末田准教授、水野らによる協議。</p>					
活動成果の公表					
現時点においては公表をしていないが、2017年3月11日午後、中部大学不言実行館一階ホールで、シンポジウムを開催する予定である。タイトルは「地域の歴史・文化を探り、創生を考える-春日井市松本誌の編纂とCOC・地域志向教育の活動から-」(仮)とする。その際に、活動状況や集積したデータの公表、昔の松本地区のことをよく知っている年配の方へのインタビュー、学生の調査報告、地域の創生とCOC・地域志向教育に関する議論などを行う予定である。					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	① 地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	オガワ ノリコ 小川 宣子	所属・職名	応用生物学部 食品栄養科学科・教授		
活動課題	食文化から地域の活性化を考える―岐阜、高山市の事例を春日井市へ―				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
オガワ ノリコ 小川 宣子	代表者	食品栄養科学科・教授	食物学	学術	行事食・郷土食の調査・分析
ミナミ モトヤス 南 基泰	分担者	環境生物科学科・教授	薬用植物学	農学	食材の調査・分析
活動経過と成果					
<p>1. 地域との連携：地域創成メディエータを目指す学生も行動し、見学・調査を行った。</p> <p>1) 高山で料亭や食生活改善普及員から行事食や郷土食の献立、料理に使用した食材や調理過程について聞き取り調査を予定通り行うことができ、高山の伝統食の特徴や四季の料理献立の特徴を知ることができた。</p> <p>2) 高山市で農家(トマト、しいたけ農家)から聞き取り調査・実地調査を予定通り実施し、生産現場の現状を知ることができた。</p> <p>3) 高山市農務課から農業の現状を講演いただき、課題を知るきっかけとなった。</p> <p>4) 高山市の歴史や文化について本学中部高等学術研究所森瀬一幸客員教授からの講義を受講した。</p> <p>2. 地域での実践：高山市小学生(5.6年生)を対象に、1での調査結果を踏まえ、持続可能な社会構築に向けての授業を予定通り実施した。</p> <p>3. 高山における課題および課題解決の提案：1・2の体験から地域創成メディエータを目指す学生が課題をあげ、それに対し、自分達ができる課題解決の提案を行った。</p> <p>1-3の高山での活動実績を踏まえ、春日井市での活動にまで、つなげることができた。</p> <p>春日井市における活動：1-3の高山(4月~9月)での経験から春日井市のファーマーズマーケットの活性化に向けて、地域創成メディエータを目指す学生が活動を行った。</p> <p>愛知県農林水産部農林政策課、尾張農林水産事務所からは愛知県の農業について、JA尾張中央の農政振興部やファーマーズマーケットの現場の方からはマーケットの現状を伺った。この時の知識とともに、学生は実際にマーケットに行き、活性化に向けての課題を考えた。また、農産物については直接、生産現場に行き、生産者の話を聞き、生産者が求めているものを知ることができた。そして、活性化の解決に向け、学生ができる提案を愛知県、JAに対し行った。提案内容は栄養を視点としたもので、実際の活動は、</p> <p>①柿の活用、②お弁当販売、③夕飯のレシピ提案、④鍋料理の提案、⑤広報</p> <p>と5つのワーキンググループにより実践を行った(9月~2月)。学生は実際にマーケットで消費者に対し、自分達が行ってきた活動内容を紹介することで、社会とのコミュニケーション力を少しでも修得することができたと考え、これらの一環した活動が今後の自信につながっていくことが期待できる。</p>					

活動成果の公表

1. 地域との連携：高山で行った調査内容を、平成 29 年度の日本家政学会大会（平成 29 年 5 月 27 日、奈良女子大学）にて発表を予定している。

2. 地域での実践：実施した授業内容について受講した小学生に授業効果についてアンケート調査を行い、その結果を報告書として小学校に提出した。

3. 高山における課題および課題解決の提案：学生の提案を高山市農務課に提出した。

春日井市における活動：

①柿の活用：生食だけではなく、料理への活用について学生が考えた提案を料理の写真とともに冊子を作成した。この冊子を利用しながら、マーケットで消費者に説明を行った（12月）。

また、柿生産部会からの要望により、生産者に対し、柿の活用について作成した冊子を資料として学生が提案を行う場が設定された（1月）。

②お弁当販売：学生が季節、春日井市産、栄養の視点から考え、試作を何度も行い、提案したお弁当のレシピにそったお弁当の販売を実施（1月）することができた。販売時には学生がお弁当のコンセプトを紹介し、消費者とのコミュニケーションを図ることができた。

③夕飯のレシピ提案：学生が栄養の視点から考えた夕食のレシピが書かれている冊子を作成し、冊子配布とともに作成コンセプトをマーケットで消費者に紹介した（2月）。

④鍋料理の提案：冬に適した鍋料理の食材の選び方を栄養学の視点から記載したパンフレットを作成し、その冊子を活用しながら、消費者にマーケットで鍋の食材の選び方を紹介した。

⑤広報：①から④の活動は栄養学視点での提案が主である。そこで、広報担当は学生の視点からわかりやすいPOPの作成を行い、今回のさまざまな提案が栄養と繋がっていることを紹介した。これらのPOPは①から④の活動の時に、マーケットに掲示された。

以上のように春日井市での活動については、ファーマーズマーケットで学生が考えた活性化に向けての提案を実践することができ、学生が社会で活動をしている姿が多く目の届く機会となった。これらの活動は数社の新聞においても紹介された。

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	マキノ ツネコ 牧野 典子	所属・職名	生命健康科学部保健看護学科・教授		
活動課題	防災教育におけるシミュレーション学習の効果 ー避難所運営ゲーム（HUG）と地域リーダーの活用を通してー				
活動組織	（分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。）				
フリガナ氏名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学 位	役割分担
マキノ ツネコ 牧野 典子	代表者	保健看護学科・教授	成人看護学	修士	企画運営、報告書
エジリ ハルミ 江尻 晴美	分担者	保健看護学科・講師	成人看護学	修士	運営協力
活動経過と成果	<p>①地域リーダー（春日井市ポニター）の協力を得て、2016年6月20日、10月8日、12月22日の3回、HUGの授業を行い、ポニターがファシリテーターとして授業をサポートすることができた。</p> <p>②「地域の防災と安全」の授業ではコミュニケーションが苦手な学生が多く、初めて顔を合わせるため、グループでアイスブレイクの自己紹介を行った。HUGが開始してからは、初めて会話するグループメンバーとの情報交換と話し合いに戸惑っていたが、ポニターの促しと仲間とのコミュニケーションがきっかけとなり、徐々に気持ちがHUGに向くようになった。HUG後のふり返りにはファシリテーターの効果が述べられていた。</p> <p>③「災害看護論」の学生は、1年次から同じクラスの学生たちなのでコミュニケーションはよく取れ、グループメンバー間の交流が最初からスムーズであった。授業のふり返り用紙によれば、学習目標の「災害時要配慮者の理解と支援活動」についても、広く深く学習することができていた。</p> <p>④ポニターにはHUG後に振り返りの話し合いの時間を設けて、ファシリテーターとしての自己評価をお願いした。学生のファシリテーター評価との比較では、ポニターの方が自己評価が高い傾向にあった。</p>				
活動成果の公表	<p>①日本看護学教育学会第27回学術集会において、「ゲームと協同学習を活用した授業の試み」を発表する。</p> <p>②日本災害看護学会第19回年次大会において、「避難所運営ゲーム（HUG）を通して見えてきた地域防災リーダーと大学生の協働関係」を発表する。</p> <p>③日本看護研究学会第43回学術集会において「避難所運営ゲーム（HUG）のファシリテーター評価尺度の開発」について発表する。</p> <p>④生命健康科学研究所紀要に「災害時避難所の理解と防災意識との関連性」について投稿予定である。</p>				

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	ニシガキ ケイタ 西垣 景太	所属・職名	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科・講師		
活動課題	春日井市における地域スポーツ再活性化への取り組み				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ニシガキ ケイタ 西垣 景太	代表者	スポーツ保健医療 学科・講師	スポーツ心理学	博士 (心理学)	事前指導・データ収 集・分析・総括
キタツジ コウジ 北辻 耕司	分担者	スポーツ保健医療 学科・助手	救急救命	修士 (救急救命 学)	救命講習の実施・デ ータ分析
活動経過と成果					
<p>本活動は大学と地域が協力し、地域のスポーツ活動を再活性化させていくことを目的としている。文部科学省は、平成27年に「今後の地域スポーツの推進方策に関する提言」の中で、「大学が地域スポーツの拠点となり、地域における多様な関係機関と連携を図りながら、地域スポーツを活性化させる取組が重要である。」と述べている。そこで、春日井市のスポーツ振興に関わる事業に学生が参加し、地域スポーツを活性化させるために、地域スポーツでの問題を解決する一助とする活動を行った。</p> <p>1. 春日井市でのスポーツ振興再活性化への取り組み実践① 地域の高齢化がすすみ、若年層の家族が地域のスポーツ行事に積極的に参加しない事から、地域のスポーツ活動参加者の高齢化は大きな問題となっている。春日井市内のある地区においても、地域の運動会参加者が年々減少し高齢化していることが問題視されている。そこで、地域の次世代を担う学生達が実際にその地域のスポーツ活動を視察し、再活性化のための課題を抽出した。</p> <p>→抽出内容は、地区の体育振興会会長の元へ提出し、地区での再活性化の検討内容として取り上げて頂いた。</p> <p>2. 春日井市でのスポーツ振興再活性化への取り組み実践② 毎年1月に開催されている春日井マラソンには、約9,000人の方が参加している。以前まで救護班の設置なく開催されていたが、2014年より主催者である春日井市スポーツ・ふれあい財団と連携し、AEDと救急バッグを持ったコース上での救護を行っている。学生達は事前に学内での救命講習を受講し、準備を行った。2017年1月に開催された第35回大会では、救護班8班編成で大会の救護を行い、大会運営についての課題抽出等をおこなった。</p> <p>→救護班の学生達から挙げられた課題は、大会主催者へ提出し、今後の安全な地域スポーツ活動開催に役立てて頂くこととした。</p>					

活動成果の公表

本活動を通しての成果は、大学における正課内での学びを地域に密着した形で正課外として活動し、正課外での体験から健康運動や応急処置などの正課内で学んでいることの重要性を再認識することであった。また、その活動の中で、地域の方との関わりを適切に持つ人間力の育成を目指した。なお、本活動課題を通して、中部大学の認定資格である『地域創成メディエーター』の資格取得を目指した学生が主となり、「動く」プロジェクトの1つとして、「イベントを通して地域貢献」「技術を身につけながらの地域貢献」を行っていくこととしていた。

本活動からは、3年生3名の学生が『地域創成メディエーター』の資格を取得した。3名のうち2名は、現在地域での運動指導を就職先として検討しており、残り1名は公務員という立場で地域のスポーツ活動に携わることを検討している。この活動における経験と資格は、今後の就職活動を行っていく上でも、自身の実体験として語ることで重要な活動になったと考えられる。

また、春日井マラソン救護班の活動では、AEDを背負って大会会場にすることで、地域の方達から声をかけられることもあり、中部大学の学生が地域スポーツに関わっていることを示す機会にもなっている。救護班の様子は、大学 Facebook も活用し広く公表を行った。

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	①地域連携教育改革・教育システムの構築				
フリガナ氏名	センダ 千田 タカヒロ 隆弘	所属・職名	現代教育学部幼児教育学科・講師		
活動課題	進学地域を第二の故郷とし子育てを課題とする学生の育成				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
センダ 千田 タカヒロ 隆弘	代表者	幼児教育学科・講師	幼児教育・保育環境	修士	
活動経過と成果					
<p>目的・内容</p> <p>地域社会の未来を担うのは、子どもである。この地域への関わりは、子どもに影響を与える。そして、その子どもによっていずれ地域は構成されていく。子育ては循環する。</p> <p>子どもたちの処遇は、大人たちに委ねられるが、その処遇についての質を問うとき、そこには子どもとは何か、子育てとは何かといった概念形成を無くしては語れない。本教育研究活動の目的は、そこにある。数年以内に地域を構成する学生に子どもや子育てについての概念形成をすることである。これは、座学では済ませられない。子どもはどのような表情で歓声を上げるのか、子育ての喜びとは何か、肌で学ばなくてはならない。昔あった地域の異年齢者同士が関わるといった光景を、意図的に構成しなくてはならない時代である。</p> <p>また、本学に通学の理由のみで来る学生は、大学を含む「地域」を意識しているのだろうか。本活動代表者の私は、学生時代、地元以外の福祉施設でボランティア活動を行っていた。地元では授業が無い日に乳幼児に関わる同様のボランティア活動の機会ができなかったからである。最初は、福祉活動そのものが目的であったが、自然と活動施設周辺にも出向く機会が多くなり、今ではその場が第二の故郷と感じている。そして、その地域への貢献活動は現在も続いている。この経験も活かし、指導にあたる。</p> <p>当初予定していた内容は、次の通りである。</p> <p>①実施する教育研究活動</p> <p>地域の幼稚園や保育所、子育て支援施設で子どもの姿を観察したり、遊びの場面に参与したり、プログラム活動を展開するなどして、子ども、幼稚園や保育所の先生、保護者の方々と関わる。可能であれば、地域の公民館やふれあいセンター、文化施設、スポーツ施設、公園といった、公の施設でも活動する。</p> <p>②学ばせようとする事</p> <p>第一に、学生が、地域の幼稚園や保育所、子育て支援施設といった、子どもの生活や遊びの場へ赴き、現代の子育ての状況を肌で学ぶことである。第二に、子どもや子育てについての概念を再構築することである。どのような大人に育ってほしいかという地域のニーズはどこにあるのかを学ぶことである。第三に、地域でプログラム活動を行う上で、事前にプロの活動を観て、その計画性や表現技術等を学ぶことである。</p> <p>活動経過(活動計画・方法含む)</p> <p>当初は、1グループで4回程度の活動を予定していた。しかし、希望者が2年生14名(内、後に1名辞退)と予想を上回る人数であり、彼らは順次、施設実習へ行く時期でもあったため、3グループ(5、5、4)に分け、2回ずつ延べ6回の活動とすることになった。ただし、2名の学生については、希望があったため、3回の活動を行った。</p> <p>活動の基本的な流れは、次の通りである。</p> <p>PLAN(計画)…学内で、関連書籍を活用して教材研究を行い、計画を立案し、教材製作を行う。</p> <p>DO(実践)…地域の保育所で、プログラム活動を実践する。</p> <p>CHECK(反省)…実践した保育所の保育士より意見を頂く。</p> <p>ACTION(改善)…今後の活動に向けて、学生同士で課題を整理し、教材改善を行う。</p> <p>このPDCAサイクルを行うために、最低2回の活動を行った。</p>					

成果

上記の「目的・内容」で述べた活動を繰り返し行うことにより、春日井市を進学の間としてだけでなく、第二の故郷と感じるような愛着の形成が期待できる。そして、将来的に春日井市に貢献し続けたいという気持ちが学生の中に芽生え、「あてになる人間」が育成されることが予想される。ただし、2・3回の実践だったため、この成果を発表で伝えた学生は、13名中5名に留まった。

学生自身が、学生発表会やその後に行った意識調査（本活動で良かったことや今後役に立てたいこと等）で成果として挙げていた内容を次の3カテゴリーにまとめた。

①子どもの理解

- ・地域の保育園を訪れて子どもと触れ合うことができ、子どもの反応を直に感じられ、子どもの理解が進んだこと。
- ・子どもの反応も一通りではないし臨機応変に対応する力を養うためにも子どもと多く関わる機会をもって、学んだことを次に活かしていきたいと思えたこと。
- ・子どもの年齢に合わせて保育をするには、子ども理解ができていないといけないこと。
- ・こちらの理想で関わってはならないこと。

②保育者の理解

- ・子ども自らが「やってみたい！」と思えるような展開や交流が大切であること。
- ・「保育には演じる力が必要」であること。保育者が実際に遊んでいる姿を見せたり、役になりきる必要があること。
- ・企画をグループで考えて実践するという経験を積むことができたこと。
- ・今後もグループでの活動が多くあると思うので、その際に役に立てられること。
- ・安全面や、自分からやろうとする意欲について企画を考える際に配慮すべきこと。
- ・話し方ひとつで子どもたちの反応は全く異なること。
- ・見本を見せることやジェスチャーをすることでより集中して話を聞くこと。
- ・コミュニケーション能力と計画力が大切だと学んだこと。相談が重要であること。
- ・実践には日々の積み重ねが大切であること。友達と共に復習したい。
- ・体調管理が重要であること。
- ・自分の意見を言えるようになったこと。
- ・専門の視点で物事を考えるようになったこと。
- ・今は経験が不足していること。

③保育環境・地域環境の理解

- ・教材研究で、素材に特性や相性があること。
- ・製作する物の用途や耐久性等を考慮しながら材料を選んでいくことが重要であること。
- ・地域の保育所があったから活動できたこと。感謝することを忘れてはならないこと。
- ・保育士は地域と関わりが大切だと理解していたものの、どのようにしているのかはわからなかったが、今回具体的に学べたこと。

今後の課題

今回は、13名中2名の学生は地域での活動回数3回、残り11名の学生は2回との結果であった。回数を重ねることで、より、地域を身近に感じる事が推察されること、また、活動内容も改善されることが予測できるので、本活動を継続していくことが、今後の課題である。

活動場所が一つの保育所だったため、今後は活動場所を拡大すること。また、活動内容も劇発表や製作活動中心となっていたため、内容の拡充も図りたい。

活動成果の公表

2016年12月7日 中部大学

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」選定取組（大学COC事業）

第3回地域創成メディアーター学生発表会【プラス・エクスペッション】（以下13名）

- ・磯野 翔子 地域の保育園での活動から学んだこと
- ・入山 彩香 保育の難しさを体験
- ・久保田 晴香 地域創成メディアーター 「地域の保育園での実践を通して学んだこと」
- ・佐藤 愛美 地域創成メディアーター ～子ども達からの気づき～
- ・杉山 愛実 保育におけるコミュニケーション力と計画力の重要性へ気づき
- ・田中 早紀 地域の保育所に行って PDCA を実践する
- ・津本 泰史 地域創成メディアーター ～子どもの活動幅を広げるために～
- ・長尾 健士朗 子どもに育てられる
- ・名城 星梨加 地域創成メディアーターへの道 ―学びを生かす保育者に！―
- ・新美 陽平 学ぶと動くから得たもの
- ・西脇 友香 「まだやりたい！」と思ってもらえる保育
- ・森川 綾奈 地域創成メディアーター資格取得のために
- ・増子 沙也加 保育と地域創成

2017年春 「活動報告書」発行予定

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	②報酬型インターンシップ（就業体験）				
フリガナ氏名	タケダ アキラ 武田 明	所属・職名	生命健康科学部臨床工学科・准教授		
活動課題	医療系学生の報酬型インターンシップ制度の構築				
活動組織 (分担者は本学の専任教員（助手を含む常勤の専任教員），協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
タケダ 明 武田 明	代表者	臨床工学科・准教授	医用工学	博士	企画・運営責任者
ヨダマ ヤスシ 児玉 泰	分担者	臨床工学科・准教授	体外循環技術、 生体計測	修士	学生との連絡窓口・運営
フクダ シンゴ 福田 信吾	分担者	臨床工学科・講師	血液浄化	準学士	学生との連絡窓口・運営
ツシマ アキラ 對馬 明	分担者	理学療法学科・教授	理学療法学	博士	企画・運営
ヤザワ ヒロナリ 矢澤 浩成	分担者	理学療法学科・講師	運動学、理学療法 評価学	修士	学生との連絡窓口・運営
フクダ ミネ子 福田 峰子	分担者	保健看護学科・准教授	老年看護学	修士	学生との連絡窓口・運営
ハセガワ リュウイチ 長谷川 龍一	分担者	作業療法学科・教授	作業療法学、健康 支援学	博士	学生との連絡窓口・運営
コジマ カズエ 小嶋 和恵	分担者	臨床工学科・助手	血液浄化	学士	学生との連絡窓口・運営
活動経過と成果					
<p>春日井商工会議所の協力のもとで、春日井地域の病院やクリニックおよび医療機器メーカーや薬局などと連携を取り、長期的な報酬型インターンシップ（就業体験）を希望する学生に対して、紹介を行ない学生や病院の窓口となった。また、学生の希望する地域（居住区域）にも、報酬型インターンシップ先を増やし、より学生生活に密着した報酬型インターンシップを目指した。結果、報酬型インターンシップへは、臨床工学科4名、理学療法学科14名、作業療法学科1名の参加学生があった。また、2名の地域創成メディエーター資格を取得した。引き続き、地域志向の教育研究活動の実践として、生命健康科学部の学生に、病院やクリニックおよび医療機器メーカーや薬局などで就労する機会を提供し、職種の業務や、病院で働くことの魅力および病院のシステムなどを学び、「気づき」を体験させ、自分を知る機会にする。また、病院で働く人たちの「志」に触れさせ、働くことに対するモチベーションの向上をめざす。また、社会へと飛び立っていけるような精神的な礎を築き、就業前の就職先の選択肢を広げることなどをめざす。また、春日井地域の病院やクリニックは、報酬型インターンシップを実施することにより、スタッフ募集の広告費を使わずに、医療の勉強をしている質の高い学生の労働力を活用できるメリットがある。このように、学生と医療現場の双方にメリットがある体制を構築し、春日井市の活性化に貢献していきたい。</p>					
活動成果の公表					
地域創成メディエーター学生発表会にて公表した。					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	ユクモト マサオ 行本 正雄	所属・職名	工学部機械工学科・教授		
活動課題	春日井市の廃食油の回収とそれを原料とする BDF の製造・利用				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ユクモト マサオ 行本 正雄	代表者	機械工学科・教授	熱工学	博士(工学)	取りまとめ
サトウ モトヤス 佐藤 元泰	分担者	創造理工学実験教育科・教授	エネルギー工学	博士(工学)	BDF 製造プラントの改善
タニ ハルキ 谷 春樹	協力者	工学部非常勤講師	化学工学	博士(工学)	BDF 分析
活動経過と成果					
<p>1. 現状調査(春日井市環境部の協力)</p> <p>1) 廃食油回収に関するアンケート調査(春日井市民対象)</p> <p>全 18ヶ所の廃食油回収場所の内、8ヶ所でアンケート調査を実施した。昨年度同様に、廃食油持参者の特徴として、①60代以上であること、②女性であること、③車で持参することの三点が挙げられる。また、8ヶ所の内2ヶ所では、別日(祝日)にもアンケート調査を行った。今年度初めて祝日にアンケート調査を実施したところ、平日に比べ廃食油持参者が少ない結果となった。回収場所である市の施設を訪れる人自体も少なかつた印象があった。また、訪れた多くの人が祝日でも廃食油の回収を行っていることを知らなかつた。</p> <p>2) 施設(回収場所)の利用に関する調査</p> <p>春日井市役所環境部の協力の下、施設の利用人数・行われている催事の数の調査を行った。その結果、施設を利用する人数が多い施設は回収量も多い傾向にあることが判明した。これは、施設利用が廃食油回収を知るきっかけやついでに廃食油を持参するきっかけになっているからだと推測する。</p> <p>3) 調査結果の可視化(地理情報システム(GIS)の使用)</p> <p>回収率の算出や廃食油持参者の分布の地図化を行った。その結果、味美ふれあいセンター地域での回収率が最も高く、廃食油持参者も多く存在していることが判明した。したがって、今後は味美ふれあいセンター地域をモデル地域と仮定し、この地域での特徴を探し出す。また、その特徴を基に他の地域での廃食油回収に関するPR活動の提案をしていく。</p> <p>2. BDF 燃料の製造</p> <p>1) 大型装置(25L)での性能評価</p> <p>昨年度製作した大型装置の性能評価を行った。既存の5L装置と同一条件で実験を行ったところ、同等の時間でメタノール回収を行うことが出来た。また、大型化したことにより、BDF1L 辺りの消費電力量を削減することが可能となり、製造コスト・二酸化炭素排出量の削減に繋がった。</p> <p>2) 超小型ディーゼル発電機への利用</p> <p>超小型ディーゼル発電機の燃料として、本研究により精製された BDF を使用し、燃焼実験を行い、排気ガスを測定した。正常運転を確認し、燃費と排気ガスの NOx と CO 濃度を軽油と比較し遜色ない結果を得た。</p>					

活動成果の公表

- ・2016年6月30日(木)の第26回環境工学総合シンポジウム2016にて、BDF製造における気泡式脱メタノール装置の開発と題し、気泡式脱メタノール装置の性能評価及び大型化した装置の評価について発表を行った。
- ・2016年8月9日(火)の第25回日本エネルギー学会大会にて、春日井市における廃食油回収の現状調査とGIS解析と題し、廃食油回収に関するアンケート調査及びそれを基にしたGIS解析の結果を発表した。
- ・2016年10月12日(水)の2016年度工学部交流会にて、春日井市における廃食油回収の現状調査とGIS解析と題し、発表を行った。
- ・2016年11月16日(水)に春日井市役所環境部に対して、7月に実施した春日井市民に対するアンケートの結果報告を行った。
- ・2017年1月23日(月)に春日井市役所環境部に対して、11月に実施した春日井市民に対するアンケートの結果報告を行った。
- ・2017年2月18日(土)の中部本部修習技術者研究業績発表会にて、春日井市における廃食油の現状調査とGIS解析と題し、今年度の成果について発表を予定している。

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	タケダ マコト 武田 誠	所属・職名	工学部都市建設工学科・教授		
活動課題	春日井市の内水氾濫の可視化と住民理解の深化に関する研究				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
タケダ マコト 武田 誠	代表者	工学部・都市建設工学科	水工学	博士(工学)	解析ツールの開発と研究のとりまとめ
活動経過と成果					
<p>春日井市の地蔵川流域では、平成23年9月台風15号の豪雨の影響により浸水被害が生じた。このような浸水対策を検討するためには、下水道能力を考慮した浸水解析ツールが有効である。さらに、下水道整備などのハード対策や避難などのソフト対策の実施には、住民の理解が不可欠である。本研究では、浸水対策の検討に有用な内水氾濫解析モデルおよび雨水の移動の可視化技術の開発を行った。さらに、浸水に関する住民理解の促進のために、都市氾濫模型を活用し広報活動を行った。本研究により、春日井市の地蔵川流域における精度の高い内水氾濫解析モデルが構築でき、雨水の移動の可視化が実施できた。さらに、河川水位低下、河川からの下水道への逆流防止、歩道や中央分離帯による浸水制御など様々な対策の浸水に対する効果が検討できた。本研究に参加した学生は、春日井市の水害の特徴や対策を学んだ。さらに、オープンキャンパス、大学祭などにおける都市氾濫模型を活用した広報活動により、地域住民の浸水に関する理解と参加学生の地域志向の学びが深まったと考える。</p>					
活動成果の公表					
<p>本研究の成果は、平成29年2月に開催される中部大学工学部都市建設工学科の卒業研究発表会、平成29年3月に開催される土木学会中部支部研究発表会、土木学会水工学講演会で研究論文として発表予定である。さらに、平成29年8月に開催されるIAHR(国際水圏環境工学会)や、平成29年9月に開催される土木学会全国大会研究発表会でも発表したいと考えており、多くの機会に関連する研究内容を報告したい。</p> <p>また、研究代表者は春日井市の「春日井安全アカデミー」の講師を務めており、春日井市民に対して水害の現状や課題、対策に関するセミナーを実施している。本研究で得られた豪雨に伴う内水氾濫の特徴や浸水の様子、下水道の効果、雨水の移動などを可視化して、セミナーに用いることで、地域住民の水害に対する理解が深まるものとする。</p>					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	ヤマハ モトイ 山羽 基	所属・職名	工学部建築学科・教授		
活動課題	春日井市における環境・エネルギーと温暖化対策				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学 位	役割分担
ヤマハ モトイ 山羽 基	代表者	建築学科・教授	建築設備工学	博士(工学)	活動の統括、エネルギー分析
ヨコエ アヤ 横江 彩	分担者	建築学科・助教	建築環境工学	博士(工学)	人間行動に関する分析
活動経過と成果					
<p>6月より、ゼミナールA、建築設備Bの授業等にてエネルギーに関する知識と理解を学習した。</p> <p>9月7日 新名古屋火力発電所見学(参加学生9名): エネルギー変換に関する知見を得る</p> <p>9月からゼミナールB等にて広域でのエネルギーシステム、データ分析方法について学習を行う。</p> <p>11月15日 中部大学省エネウォークスルー(参加学生15名): 大学でのエネルギー利用について学習</p> <p>11月25日 中部大学スマートエネルギー講演会(参加学生11名): 中部大学から春日市市域に向けたエネルギー利用の展開について学習</p> <p>11月30日 中部大学エコツアー(参加学生2名): 春日井市民へエネルギー利用について説明</p> <p>12月2日 環境配慮型建築見学(参加学生10名): 愛知製鋼新本社ビルにて最新のエネルギー利用技術を学習</p> <p>活動による地域創成メディアーター認定3名</p>					
活動成果の公表					
<p>中部大学でのエネルギー利用について、空気調和・衛生工学会論文集に投稿中</p> <p>活動については、空気調和・衛生工学会、日本建築学会等にて口頭発表を行う予定である。</p>					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ 氏名	トヨダ ヨウイチ 豊田 洋一	所属・職名	工学部建築学科・教授		
活動課題	地域や人から学ぶ建築をつくるための実践的学習				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ 氏名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学 位	役割分担
トヨダ ヨウイチ 豊田 洋一	代表者	建築学科・教授	建築計画	工学修士	全体
活動経過と成果					
<p>活動は下記の3つの内容から構成される。</p> <p>① 高蔵寺ニュータウンの新たなまちづくりの手法提案 高蔵寺ニュータウンのセンター地区、公園、学校、高齢者優良賃貸住宅について卒業研究の課題として取り上げ、その再生提案を検討する。提案は最終的に手直しをして展示・発表を行い、関係者等の意見を聴取し、再検討する。</p> <p>② 春日井市民と共に「道の駅」を考える 春日井市民有志より要望が出されてスタートしたが、諸般の事情により有志が断念し活動は終了した。</p> <p>③ まちづくり活動への参加・支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高蔵寺ニュータウン押沢台北町内会が行う「ブラブラまつり」(10月8日)への参加・協力 ・高蔵寺ニュータウンを紹介するガイドブック「まちなび 改定版」発行・配布への協力 ・高蔵寺ニュータウン押沢台を紹介するガイドブック「押なび」編集・発行への協力 					
活動成果の公表					
各活動は下記のように公表された					
<p>① については下記4編の卒業研究としてまとめられた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「高蔵寺ニュータウンにおけるセンター地区の再生」 ・「高齢者の住みやすい街にー高齢者向け優良賃貸住宅居住者についてー」 ・「学校と地域の連携についてー高蔵寺ニュータウンの実態とはー」 ・「高蔵寺ニュータウンの公園と人のつながり」 <p>② については下記メディアに取り上げられた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中日新聞 「自宅庭や軒先で模擬店開き交流」(平成28年10月9日) ・中日新聞 暮らしのニュース 「「まちなび」改訂版発行」(平成28年7月28日) ・春日井ケーブルテレビ「押沢台北ブラブラまつり」(平成28年10月) ・春日井市広報 町内会活動特集に掲載予定(平成29年3月1日) 					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	オバナ タカシ 尾鼻 崇	所属・職名	人文学部 コミュニケーション学科・講師		
活動課題	春日井地域の音風景調査とサウンドデザインに関する教育研究				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
オバナ タカシ 尾鼻 崇	代表者	コミュニケーション学科・講師	ゲームスタディーズ、デジタル・ヒューマニティーズ	博士(学術)	研究代表者
活動経過と成果					
<p>春日井地域は、地区ごとに年代の異なる住宅地が群集し、豊かな自然と交通量の豊富な幹線道路を併せ持つ。また、今後の都市開発によって環境が大きく変化していく可能性も指摘できる地域でもあり、環境の調査・保全が強く求められている。そこで本研究課題では学生を中心としたプロジェクトを組織し、春日井地域における音環境(サウンドスケープ)の状況を調査・記録した。これは市域の音環境の保全・補完であると同時に、サウンドスケープデザイン理論に基づく最適な音環境を同地域に提案することで「まちづくり」を通じた人材育成を試みる実践的研究でもある。本課題の活動経過については以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016年7月8日 学内 活動ミーティングおよび勉強会 5名参加 ・2016年8月19日 大学内各所 サウンドスケープ調査 5名参加 ・2016年9月9日 勝川駅周辺 サウンドスケープ調査 4名参加 ・2016年10月7日 春日井駅周辺・市街 サウンドスケープ調査 5名参加 ・2016年10月14日 高蔵寺駅周辺 サウンドスケープ調査 4名参加 ・2016年11月18日 松本町周辺 サウンドスケープ調査 3名参加 ・2016年12月23日 19号線各所 サウンドスケープ調査 6名参加 <p>年度内に上記データの整理を進め、サウンドマップを作成し、ウェブ上にて公表を行う。</p>					
活動成果の公表					
<p>本研究課題の活動成果の公表については、2017年3月に行われる日本デジタルゲーム学会2016年度大会において、その一部を報告する。さらに2017年8月に開催予定の同学会夏季研究大会において、より詳細な成果報告を行い、同学会の学会誌に投稿予定である。また、本研究プロジェクトに関わった学部生2名は、地域創成メディアーターの資格を授与されるという形で、本研究課題の成果の公表に貢献した。</p> <p>また本研究内容は、中部大学人文学部コミュニケーション学科の開講科目「音響情報デザイン AB」とも連動している。今後は、教育研究との連携を含め、地域創成メディアーターの育成にも尽力することで、総合的な活動成果の発信に尽力していきたいと考えている。</p>					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	ミナミ モトヤス 南 基泰	所属・職名	応用生物学部環境生物科学科・教授		
活動課題	野生生物との共生を目指した近代化産業遺産「愛岐トンネル群」保全活動				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ミナミ モトヤス 南 基泰	代表者	応用生物学部環境生物科学科・教授	生態学	農学	総括, 計画立案, 動物調査
活動経過と成果					
<p>1) NPO 愛岐トンネル保全再生委員会と中部大生による野生生物共同調査(参加学生のべ 85 名)(活動期間: 2016 年 5 月から 2017 年 1 月)</p> <p>2 週間毎に共同で野生生物用自動撮影カメラを用いて野生生物調査を実施した。その結果、在来種 7 種(イノシシ、ニホンカモシカ、ニホンジカ、タヌキ、キツネ、リス、ニホンノウサギ)、外来種 5 種(アライグマ、ハクビシン、アナグマ、ネコ、イタチ属)の合計 11 種 1 属であった。また罠捕獲によって生息確認できた小型哺乳類は在来種(アカネズミ、ヒメネズミ、ヒミズ)の合計 3 種であった。以上、合計 14 種 1 属の哺乳類の生息が確認できた。また、愛岐トンネル群は在来種の生息地として適性が高いことが明らかとなった。</p> <p>2) NPO 愛岐トンネル保全再生委員会と中部大生による生物多様性に配慮した緑地整備(参加学生のべ 85 名)(活動期間: 2016 年 5 月から 2017 年 1 月)</p> <p>保全対象となる在来種 7 種の餌資源となる樹種や植物群落の選定を行い、餌資源として有効なクヌギ類の落葉樹、草食動物の餌場である草地を整備した。</p> <p>3) NPO 愛岐トンネル保全再生委員会と中部大生によるイノシシによる樹害対策(参加学生のべ 85 名)(活動期間: 2016 年 5 月から 2017 年 1 月)</p> <p>愛岐トンネル再生保存活動の妨げとなる獣害は、イノシシによる工作物破壊、軌道敷の掘り起こしであった。そのためイノシシの侵入路を特定し、侵入防止柵を設置した。</p>					
活動成果の公表					
<p>1) 中部大フェアでのパネル展示(2016 年 9 月 15 日)(参加学生 2 名)</p> <p>中部大フェアにおいて、野生生物生息調査成果をブース展示で報告した。</p> <p>2) 秋の愛岐トンネル特別公開での活動紹介(2016 年 11 月 26 日)(参加学生 3 名)</p> <p>一般市民向けに活動紹介および野生生物生息調査成果を報告した。</p> <p>3) 日本生態学会 2016 年度中部地区大会(三重大学)(2016 年 12 月 3 日)(ポスター発表 2 報)</p> <p>カメラトラップ法による野生生物相とネズミ類の遺伝的多様性について報告した。</p> <p>4) 愛知県農業総合試験場と研究協定締結 3 大学(名古屋大、名城大、中部大)の合同研究交流会(名古屋大学)(2016 年 12 月 19 日)(ポスター発表 2 報)</p> <p>カメラトラップ法による野生生物相とネズミ類の遺伝的多様性について報告した。</p>					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	ウエノカオル 上野 薫	所属・職名	応用生物学部環境生物科学科・講師		
活動課題	春日井市における産官学民協働によるカヤネズミ生息環境保全の試み				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ウエノカオル 上野 薫	代表者	環境生物科学科・講師	環境保全学	博士(学術)	カヤネズミ生態調査, 春日井市・春日井市民・中部大学生との協働体制の維持
活動経過と成果					
<p>1) 春日井市カヤネズミ保全区(熊野桜佐地区)での保全活動</p> <p>①「定例保全活動」の開催: 6月15~17日、11月16日の9:30~16:00</p> <p>春日井市都市整備課・環境保全課、春日井市民、サンコーコンサルタント(株)、中部大学学生の協働にて、草刈を実施した。参加者はのべ50名(うち学生33名)であった。11月の保全活動の前には、市役所にて事業者・サンコーコンサルタント(株)・都市整備課・環境保全課・中部大学にてこれまでの架数の変動と草刈り方法との関係について報告、情報共有化を行い、今後の管理の課題や方針について議論した。この際、学生2名も同席し、調査結果について発表した。</p> <p>【本年度の除草方法】</p> <p>6月: クズ・セイタカアワダチソウについて、できるかぎり抜根。</p> <p>11月: 永久コドラート西側とコドラート周辺に緩衝帯(昨年秋よりも5m拡張して10m幅)を全刈り(草刈り機)、永久コドラート内・永久コドラートに侵入しているクズを中心に除根、セイタカアワダチソウ・つる性植物の抜根。</p> <p>②「クズ抑制実験」: クズ除伐後の回復抑制のための試行的実験</p> <p>本年度は、結果の優先度を鑑み、市販の除草剤の効果について実験することとした。</p> <p>6月の保全活動の際に、クズ6個体について市販の除草剤をクズの根茎に注入し、11月保全活動時にその効果を確認した(のべ学生3名)。その結果、処理した個体は全て枯れていた。しかし、他の個体の勢いが強く面的な効果を上げるためには相当の時間をかけて数千個体の処理する必要があることが分かった。他の生物に対する影響までは把握できなかった。議論の結果、環境保全の観点から現時点での除草剤の使用はやめることとなった。</p>					



2) カヤネズミ生態の基礎研究

①上記保全地域におけるカヤネズミ球巣数および営巣環境、個体の行動観察

2016年6月19日、2016年10月28日に球巣数の調査と巣内の個体の有無を確認した（のべ学生33名）。

本年度巣内に個体を確認することができなかつたため、個体の行動観察はできなかった。

②保全地区の環境モニタリング

6月15～20日にて永久コドラート内植生調査を実施した（のべ学生12名）。また、6月27日～7月23日にて架巢条件や昨年度の草刈りの効果を明確化するために、架巢されていたオギ（および架巢されていなかったオギ）の形態調査を行うとともに、現場の土壌断面調査および土壌採取を行った（のべ学生54名）。その後、土壌養分の分析を行い、オギの形態との関係について考察した（学生2名：卒業研究）。

3)「春日井市カヤネズミ保全グループ発表会」の開催

2月13日に本年度卒業研究発表会にて、保全地での活動の進捗状況や次年度以降の課題や研究成果の発表会を開催する。これにより、年間の活動総括と今後の計画指針を共有し、PDCAサイクルを意識した持続的な活動を促す。

4) 総括

オギの移植から4年、カヤネズミの移入から3年が経ち、環境アセスメントの事後調査の期間終了もあと2年ほどに迫ってきた。本年度の調査研究により、保全に必要な植生条件の理解はかなり進んだと認識している。今後は、事業者による開発に始まったこのカヤネズミ保全地の新規創生事業は、コンサルタント会社が撤退する残り2年間で、春日井市が旗を振り、地域で自立的に管理できる体制および手法にシフトできるかどうかにかかっている。大学としてどのような協力をすべきなのか、学生にとっての教育的な意義を忘れずに、慎重に方向性を考える必要がある。なお、本プロジェクトでは、地域創成メディエーター12名を輩出予定である。環境生物科学科以外にも文系理系問わず、参加してもらうことができた。彼らへの教育経過においても活動内容の啓発を行うことができたと思っている。彼らの活動の中心は単なる草刈りや土壌採取であった。しかし、このような単純で地道な作業が、保全すべき種の生態把握や保全指針を立てるために必要であること、小さなことでも専門外の人間であっても、地域に貢献できる活動があることを理解してもらえたようであった。



活動成果の公表

学会等での発表はできていないが、春日井市役所およびサンコーコンサルタント(株)との間での情報共有は随時行われてきた。1月24日の春日井市自然環境保全委員会の中でも内容を報告している。研究を担当した学生自身による報告も1度ではあるが会議の中で実施した。

さらに2月予定の発表会でも公表し、広く関係者に現状を理解してもらえるように努めている。本年度、調査研究を始めて3年が経過し、定量的な結果も得ることができたので、来年度の生態学会等において発表を予定している。

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	④生活・住環境を考えるまちづくり				
フリガナ氏名	ウライ ヒサコ 浦井 久子	所属・職名	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科 助手		
活動課題	春日井市内少年野球チームにおける運動中突然死の原因である“心臓震盪”を予防するための講習会・野球教室の実施				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ウライ ヒサコ 浦井 久子	代表者	スポーツ保健医療学科・助手	運動生理学	博士満期退学	データ収集・分析・総括
イトウ モリヒロ 伊藤 守弘	分担者	生命医科学科・准教授	微生物学・放射線技術学	博士	調査補助・データ分析
ニシガキ ケイタ 西垣 景太	分担者	スポーツ保健医療学科・講師	運動心理学	博士	指導に関する介入・データ分析
キタツジ ヨウジ 北辻 耕司	分担者	スポーツ保健医療学科・助手	救急救命	修士	講習会の実施・データ分析
ゼンキョウ ヒロシ 善久 裕司	協力者	硬式野球部・総監督			指導法の開発助言
活動経過と成果					
<p>●2016年11月12日(土) 講演会の開催</p> <p>中部大学不言実行館アクティブホールにて、中部大学地域連携教育講演会「少年～高校野球選手を障害から守る」を開催した。参加者数は学生85人、中部大学第一高校生徒6人、一般参加20人、教職員7人であった。</p> <p><教育講演> 「指導者に必要なジュニア期のリスクの知識－心臓震盪－」 (生命医科学科・伊藤守弘准教授) 「指導者に必要な肩・肘の障害予防の知識」 (理学療法学科・宮下浩二教授)</p> <p><特別講演> 「私と高校野球－怪我をケアするためにできる事を考える－」 (長野県佐久長聖高校教諭、硬式野球部監督・藤原弘介氏)</p> <p>●2016年11月 アンケート調査実施</p> <p>上記講演会に参加した野球指導者22名と競技者91名に対し、野球選手の障害に関する質問紙調査を依頼した(中部大学倫理調査委員会承認番号260034-3)。有効回答は野球指導者16名、競技者91名であった。心臓震盪予防に関する主な結果を以下の通り記す。</p> <p><捕球指導に関して(指導者/競技者)> 「ボールを体で止める指導をしている/指導を受けた事がある」…… 86.7% / 94.0% 「ボールを体で止める指導をしていない/指導を受けた事がない」… 13.3% / 6.0%</p> <p><逆シングルでの捕球指導について(指導者/競技者)> 「逆シングルでの指導をしたことがある/指導を受けた事がある」… 93.3% / 84.6% 「逆シングルでの指導をしていない/指導を受けた事がない」… 6.7% / 13.2% 「無効回答」… 0% / 2.2%</p>					

<野球用胸部保護パットについて（指導者／競技者）>

「野球用胸部保護パットについて知っている」… 60.0% / 59.3%

「胸部保護パットについて知らない」… 40.0% / 39.6%

「無効回答」… 0% / 1.1%

（保護パッドについて知っていると答えた方のみ）

<チームでの野球用胸部保護パットの推奨について（指導者／競技者）>

「推奨している／使用した事がある」… 0% / 22.2%

「推奨していない／使用した事がない」… 100% / 77.8%

本調査により、指導者・競技者共に心臓震盪の予防は十分に行われていない現状が明らかとなった。心臓震盪の防止に繋がる逆シングルでの捕球指導は、8～9割の指導者・競技者に行われていた。それにもかかわらず、心臓震盪を発生させやすいボールを体で止める捕球指導も同程度行われており、矛盾した結果であった。また、野球用胸部保護パットの認知は指導者・競技者共に約6割であり、実際にチームで推奨している指導者は見られず、競技者の使用経験も2割程度であった。今後の対策として、早急に捕球指導から心臓震盪を予防するために特化した定期的な講習会を開き、特に指導者には競技者時代に受けてきた指導と現在の指導の違いを理解し、現在の心臓震盪の予防を目的とした適切な指導法を定着させていく必要がある。

活動成果の公表

上記アンケート調査について以下3名の学生が2016年度スポーツ保健医療学科卒業研究として発表した。

岩谷 駿（スポーツ保健医療学科4年・2015年度地域創成メディアーター）

『心臓震盪の予防に関する検討—野球指導に関する意識調査—』

中村亮介（スポーツ保健医療学科4年・2016年度地域創成メディアーター）

『心臓震盪の予防を目的とした野球指導者への心肺蘇生講習会の必要性検討』

禰覇祥希（スポーツ保健医療学科4年）

『野球指導者へのアンケート調査による小児の投球による肘痛・肩痛の現状調査』

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay (LHS)				
フリガナ氏名	ナガシマ マユミ 長島 万弓	所属・職名	応用生物学部食品栄養科学科・教授		
活動課題	世代間交流会における栄養教育実践と継続支援の効果について				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ナガシマ マユミ 長島 万弓	代表者	応用生物学部食品栄養科学科・教授	栄養教育学	博士(生活科学)	世代間交流会企画・運営・学生指導・研究活動総括
トダ カオル 戸田 香	分担者	生命健康科学部理学療法学科・准教授	内部障害理学療法	博士(医学)	地域高齢者の窓口・世代間交流会の運営
活動経過と成果					
<p><活動経過></p> <p>高齢者と学生の交流会および LHS&LHV 活動への参加者から希望者を募り、研究への説明に対して同意の得られた 62 歳～81 歳の男性 2 名と女性 5 名の計 7 名を対象者として研究を行った。対象者には機能性食材としてのゴマを継続的に 1 か月間摂取することと、ゴマ摂取中の 3 日分とゴマ摂取終了後の 3 日分の計 6 日間の食事調査を依頼した。血圧測定、体重測定、抗酸化力テスト、酸化ストレス度テストおよび食事調査の聞き取りを含む面談を、ゴマ摂取前、摂取終了時、摂取終了 1 か月後の 3 回実施し、これらの栄養教育実践と継続支援が対象者にどのような効果をもたらすかを調査するとともに、調査にたずさわる学生の教育効果について検討した。おもな栄養教育実践を①～⑥に示す。</p> <p>①4 月～7 月 交流会の準備(栄養教育指導案、教育媒体作成、交流会調理実習の試作等)</p> <p>②7 月 9 日 世代間交流会当日 開けゴマ!～あなたの食事は大丈夫?～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調理実習 ゴマうどん ・味噌汁を用いた官能検査 ・塩分と高血圧に関する栄養教育 ・FFQ g 食物摂取頻度調査の実施 ・食事調査のお願い (研究に関する説明と同意書回収) <p>③8 月 19 日 LHS/LHV の事前訪問</p> <p>④9 月 12～14 日 LHS および LHV</p> <p>⑤11 月 21 日 研究対象者に対する 1 回目面談</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体重測定、血圧測定、抗酸化力・酸化ストレス度測定、アンケート調査等 ・食事調査方法の説明と記録用紙の配付 ・摂取用ゴマ(1 日 10 g、1 か月分)と記録用紙の配付 ・7 月 9 日実施の FFQ g の結果報告 <p>⑥12 月 19～22 日 2 回目面談</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体重測定、血圧測定、抗酸化力・酸化ストレス度測定、アンケート調査等 ・食事記録 3 日分の回収と確認 ・次の食事調査のお願いと用紙等配付 					

2 活動報告

⑦1月16～19日 3回目面談

- ・体重測定、血圧測定、抗酸化力・酸化ストレス度測定、アンケート調査等
- ・食事記録3日分の回収と確認
- ・1, 2回目の抗酸化力・酸化ストレス度測定結果の報告

⑧2月上旬 最終結果の通知およびアンケート調査の実施(郵送)

<成果>

7名の対象者は抗酸化能を有するゴマを1か月間継続的に摂取したことで、抗酸化力が向上し、酸化ストレス度は低下する傾向を示した。また食事調査の結果から、ゴマの継続摂取後の野菜摂取量が増加するなどの食生活改善の傾向が見られる対象者もいた。また、栄養教育実践に取り組んだ学生は、栄養教育の企画、実施、評価を行い、卒業研究としてまとめることができた。対象者との面談は、管理栄養士としてのコミュニケーション技術の必要性を実感させ、特に高齢者とのコミュニケーションの注意点を気付かせるのに効果があった。

活動成果の公表

平成29年2月18日(土) 第17回家政学関連院生・学生研究発表会(於: 椋山女学園大学)にて、学生(4年生)が「地域在住高齢者との世代間交流会における栄養教育の効果について(3)～機能性食材継続摂取の効果～」として発表するほか、関係する学会等で報告できるようまとめる予定である。

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay (LHS)				
フリガナ氏名	フクタ ミネコ 福田 峰子	所属・職名	生命健康科学部 保健看護学科・准教授		
活動課題	看護学生による高齢者に対するサロンカフェ活動 －「中部大学コミュニティプラザ Kozoji」での傾聴交流による取り組みから－				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
フクタ ミネコ 福田 峰子	代表者	保健看護学科・准教授	老年看護学	修士(看護学)	研究活動総括・全般
タチ ノリヒデ 城 憲秀	分担者	保健看護学科・教授	公衆衛生学	医学博士	学生交流活動の指導・研究まとめ
オジオ ヤスヨ 小塩 泰代	分担者	保健看護学科・准教授	在宅看護学	修士(看護学)	学生交流活動の指導・研究まとめ
ホッタ キョウシ 堀田 清司	分担者	看護実習センター・実習講師			学生活動指導
活動経過と成果					
<p>【活動目的】 中部大学 コミュニティプラザ Kozoji にて、高森台団地周辺に住む高齢者に参加を呼びかけ、学生との交流から、高齢者の楽しみや生きがいの効果から、団地に住む高齢者支援について検討する。また、参加学生に対して、高齢者との交流体験からの学びを明らかにし、世代間交流の効果を明らかにする。</p> <p>【活動方法】 サロンカフェ活動</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 実施者：看護学生約 20～30 名。学生は昨年度参加した者に本年度に新たな参加希望者を募った。 2) 対象者：春日井市内、とくに高森台団地周辺に住む高齢者に参加を呼びかけた。 3) 実施：平成 28 年 8 月～平成 29 年 2 月にかけて、月に 2 回土曜日に実施した。 <p>【活動内容】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①絵手紙講座：8 月 20 日(土) 13:30～15:30 ②頭とからだを使って認知症予防 9 月 17 日(土) 13:30～15:30 ③簡単スイートポテトを食べましょう！10 月 8 日(土)13:30～14:30 高森台第 1 集会所 ④風邪予防のために「プロがみせる正しい手洗い方法」10 月 22 日(土)13:30～14:30 ⑤健康体操&地名あてゲーム 11 月 12 日(土) 13:30～14:30 ⑥ミニツリー作り 12 月 3 日(土) 13:30～14:30 ⑦クリスマス会 12 月 17 日(土) 13:30～14:30 ⑧初笑いで福を呼びこもう！2 月 4 日(土) 13:30～14:30 					

【活動まとめ】

- ・サロンカフェ活動として、平成 28 年度 8 回の活動を実施した。
- ・参加人数は、初回から 3 回目の頃は、高齢者の参加人数が 7 から 8 名であったが、次第に 13 名前後まで増加し、延べ 78 名程度の参加があった。
- ・参加学生は、毎回 10 名～ 16 名前後で、延べ 120 名であった。次第に参加高齢者の方とも顔なじみになり和やかな雰囲気の中、活動を展開できるようになった。

【活動評価】 アンケート調査より一部抜粋

①参加高齢者の感想

- ・学生さんの企画がとても面白く、このような機会を設けてくれたことに感謝している。
- ・若い人と会って話ができることが楽しくて、毎回楽しみにしていた。
- ・若い人との交流は新鮮でした。もっと地域の人参加があれば良い。知らない人が多いのでは。
- ・若い人と楽しいゲームなどをして、気持ちが若くなり、大変喜んでます。
- ・もう少し時間を延ばしてほしい。

②参加学生の感想

- ・最初は何をしたら喜んでもらえるか手探りであったが、段々と難易度や内容を個別性に合わせた企画を考える難しさを感じたが、観察する力がついたと思う。
- ・コミュニケーション力がつき、勉強になった。
- ・積極的に話しかけたり、活動に参加したりすることで、参加者の方から様々な昔の経験や思い出を聞くことができた。自分の行動次第で高齢者の方からの反応や話がたくさんかえてくることを感じ、自分自身の成長にもつながってくるとわかった。

【活動評価】

地域の高齢者との交流を目的に行い、参加者の高齢者との交流や絆の深まりができた。
課題としては、参加者の広がりが難しく、活動の PR 活動が課題としてあがった。

活動成果の公表

活動成果の公表はそれ以降に学会等での発表、あるいは学会誌等への寄稿を予定している。

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay (LHS)				
フリガナ氏名	カワムラ モリオ 河村 守雄	所属・職名	生命健康科学部理学療法学科・教授		
活動課題	地域市民に向けた三位一体型腰痛再発予防運動の展開とその効果検証				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
カワムラモリオ 河村守雄	代表者	理学療法学科・教授	整形外科	医学博士	研究のすべて
活動経過と成果					
<p>春日井市内の地域病院にて整形外科腰痛診療を実施、同市内の高齢者介護支援 NPO 法人内で「腰痛相談室」を開催、これらからリクルートした慢性腰痛保有者に対し「腰痛再発予防プール歩行教室」参加を呼びかけ、賛同された方々とともにプール歩行運動を実施し、三位一体型の腰痛再発予防運動を展開している。これまでに 14 名の慢性腰痛保有者がプール歩行教室に参加している。この運動の中で、プール歩行運動の腰痛再発予防効果を検証するために、プール歩行運動が習慣化された対象者の 6 ヶ月間の運動の前後での背筋力、腰背筋機能、疼痛、日常活動量、ADL、QOL について比較検討することを予定している。現在、11 名の対象者の運動前のデータを収集がほぼ終了している。今後、対象者が 6 ヶ月の運動を終了した時点で、運動後の同項目についてデータを収集する予定である。</p> <p>この間に、生命健康科学部理学療法学科 3 年生の学生 4 名が、講義聴講と地域でのボランティア活動を通して、市民の中での腰痛再発予防運動の重要性を知ることにより地域創成メディエーターの資格を取得した。このうち 2 名が上記研究のデータ収集に参加し、得られた結果を卒業研究とする予定である。</p>					
活動成果の公表					
平成 29 年 7 月から 8 月にかけて 11 名の対象者の 6 ヶ月間にわたるプール歩行運動が終了する。その時点で運動終了後のデータを収集し、運動前のデータと比較し、運動の効果について検討する。成果は、上記 2 名の学生が 4 年生秋学期の卒業研究発表会ならびに卒業論文として公表する。可能であれば、関係する学会で発表する予定である。					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑤高齢者と学生の交流、高齢者宅への Learning Home Stay(LHS)				
フリガナ氏名	ノダ アキコ 野田 明子	所属・職名	臨床検査技術教育・実習センター・教授		
活動課題	震災時の巡回健診における深部静脈血栓症と睡眠障害の発症予防の教育				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ノダ アキコ 野田 明子	代表者	臨床検査技術教育実習センター・教授	循環病態学・睡眠医学	医学博士	研究総括・健康教室 睡眠相談・学生教育
トダ カオル 戸田 香	分担者	生命健康科学部 理学療法学科・准教授	地域リハビリテーション学	医学博士	広報活動・学生教育
活動経過と成果					
<p>震災時の避難生活において、深部静脈血栓症および睡眠障害の問題が報告されている。深部静脈血栓症の主なリスク要因は、高齢・脱水・下肢骨折などである。高齢化率の高い地域では震災前から、これらの十分かつ質の高い対策は必要である。また、避難所での活動量の低下に対し、適切な運動・睡眠指導は役立つが、その体制は未だ十分ではない。</p> <p>本教育研究は、①深部静脈血栓症や睡眠障害の正しい知識を習得し、運動・睡眠生理学の知識の普及とともにそれらの発症予防を目指すこと、②本活動を通して、学生が運動・睡眠生理学の知識・技術を深め、地域高齢者と交流を深め、今後の国民の健康増進に必要な医療従事者の役割や責任を学ばせることを目的とした。</p> <p>対象学生は20名であった。5月25日および10月13日にセミナーを開催した。10月29日の体力測定会において血管機能評価および睡眠相談を企画した。12月7日地域創成メディエーターの発表会で成果を報告し、5名の学生が地域創成メディエーターを取得することができた。</p> <p>参加学生は、学会やセミナーに参加し、基本的な知識を深め、超音波検査技術・循環生理検査技術・睡眠検査技術を習得した。在宅訪問や週1回3時間程度で健康教室・相談を行った。75名の高齢者が参加した。本研究は倫理委員会承認後、対象者に同意を得て実施した。未治療の高血圧の高齢者が55%、超音波検査により45%の高齢者にプラークが検出され、医療機関への紹介・生活指導等を行った。また、33%の高齢者に睡眠障害が疑われ、睡眠指導を行った。学生はこれらの活動を通し、地域高齢者と交流を深めるとともに、コミュニケーション能力を向上し、地域連携・医療関連従事者の役割・責任を理解することができ、学習意欲を高めた。超高齢化社会を背景とし、災害時の心血管病・睡眠障害の発症予防を目的に今後多くの課題があることが明らかとなった。</p>					
活動成果の公表					
<p>成果は地域創成メディエーターの発表会で報告した。また、2016年度生命健康科学部生命医科学科卒業研究発表会で報告する。健康文化振興財団紀要第51号で健康セミナーおよび健康教室の取り組みを紹介した。今後、関連学会および学会誌で本教育研究成果を報告する予定である。</p>					

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑥シニア大学 (Chubu University Active Again College: CAAC)				
フリガナ氏名	ミヤタ 宮田	シゲル 茂	所属・職名	応用生物学部 食品栄養科学科・准教授	
活動課題	発酵食品を利用したユニバーサルデザインフードの開発				
活動組織	(分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)				
フリガナ氏名	代表者及び 分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ミヤタ 宮田	代表者	食品栄養科学科・ 准教授	微生物学	博士(医学) 博士(農学)	研究総括、学生教育 活動の企画・運営
ワダ 和田	分担者	食品栄養科学科・ 教授	食品分析学	学士(農芸 化学)	学生教育活動の企 画・運営
ヤマダ 山田	分担者	食品栄養科学科・ 講師	栄養学	博士(食品 栄養科学)	学生教育活動の企 画・運営
ナカネ 中根	分担者	食品栄養科学科・ 助手	調理学	学士(食物 栄養学)	学生教育活動の運 営
ヤノ 矢野	分担者	食品栄養科学科・ 助手	生化学	学士(食物 栄養学)	学生教育活動の運 営
活動経過と成果【目的】					
【目的】 内閣府の調査によると我が国の高齢化率は26%を超え、高蔵寺ニュータウンでは30%とさらに深刻な状況である。生産年齢人口はすでにピークを迎え減少に転じた一方で高齢者人口は増加の一途をたどっていることから、今後も高齢化率の改善は期待できない。高齢者の支出のなかで医療費と食費が上位を占めることから、健康な老後の生活が求められている。そこで、豊かな食生活がこれからの高齢化社会に高い生活の質を提供すると考えられるため、嚥下能力にあわせたユニバーサルデザインフードの開発ができる人材の育成を目指し、通常の教育課程では実施できない以下の活動を行った。					
【活動内容】 すべての活動は学部学生が主体となり、それを大学院生や教員がサポートした。(学部学生10名、大学院生5名) (1)ユニバーサルデザインフードの開発 発酵食品や食品の栄養機能について調査研究した。その中でも、高タンパク質液状食品である牛乳と豆乳を用いた発酵食品について詳細に調査した結果、発芽玄米と豆乳で作る豆乳ヨーグルトに興味を示したので、発芽玄米から豆乳凝固活性のある菌を分離し同定した。また、それらの菌を用いて、牛乳と豆乳を発酵させ、食味試験を行った。加えてそれらの発酵食品を用いて、特にユニバーサルデザインフードを考慮したメニュー開発を行った。 (2)健康救急フェスティバル 健康救急フェスティバルでは、下記に示した2つの活動を行った。					

① 身近な細菌をみてみよう！

発酵食品に関する調査研究のうち、乳酸菌飲料とヨーグルトを中心題材として選り地域住民に啓発活動を行った。純粋培養した大腸菌とブドウ球菌の1種及び3種類の乳酸菌飲料やヨーグルト内の細菌を観察し、所謂「善玉菌」と「悪玉菌」の違いについて解説した。また、健康づくりに役立ててもらうために、食中毒予防の注意点等や乳酸菌の性質、一般的なプロバイオティクスとプレバイオティクスについて解説した。(地域住民の参加者数 215人)

② 脳機能と食品- その関係は？

食品の栄養機能に関する調査研究のうち、脳機能と食品の関係について啓発活動を行った。親子で参加できるように食品サンプルを展示し、実際にどのような機能性成分が含まれているか解説した。さらに、食育に関する意識の向上をはかるため、それらの食品に含まれる栄養成分についてパソコンを使ったクイズを行った。クイズには何度でも挑戦できるようにし、適時解説を加えることにより地域住民の興味を惹起した。(地域住民の参加者数 229人)

【成果】

- (1) 発芽玄米から豆乳凝固活性のある5種類の菌を分離し同定し、作製した豆乳ヨーグルトを利用した新規メニューを開発した。
- (2) 学部学生が主体となり調査研究を行うことで、学習意欲の向上に寄与した。また、大学院生が学部生の研究指導を行うことで、大学院生の資質向上にも寄与した。調査内容を春日井市民にわかりやすく説明したことにより、知識の向上の必要性を痛感させ、コミュニケーション能力の養成につながった。これらの活動の結果、地域創成メディエーター資格を7人が取得した。

活動成果の公表

活動成果の公表はすべて大学院生を含む参加学生が行った。

- 2016年9月4日 春日井市2016健康救急フェスティバルにてブースを設置し春日井市民に対して学習内容を発表した。
- 2016年11月15日、25日 2回に分けて学内にて中間報告会を行った。
- 2016年12月7日 第3回 地域創成メディエーター学生発表会にてポスター発表を行った。
- 2017年3月(予定) 総括として最終報告会を行う予定である。

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑥シニア大学 Chubu University Active Again College(CAAC)				
フリガナ氏名	ホッタ ノリオ 堀田 典生	所属・職名	生命健康科学部 スポーツ保健医療学科・准教授		
活動課題	フィットネスクラブを模擬した健康増進実習の運営、ポートフォリオを活用した自習、地域の健康運動リーダーを意識させる運動指導は、学生自身とCAAC実習受講生にどのような影響を及ぼすか				
活動組織	(分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員)、協力者はそれ以外。)				
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ホッタ ノリオ 堀田 典生	代表者	スポーツ保健医療科・准教授	運動生理学	博士(医学)	研究全般
ツシマ アキラ 對馬 明	分担者	理学療法学科・教授	理学療法学	博士(生体情報)	CAAC受講生対応
活動経過と成果					
<p>目的</p> <p>私たちはこれまでに、本事業における科学的根拠に基づく身体活動の実践は、学生と受講者(高齢者)双方の共育と共学につながり、学生のキャリア形成の助力となることを明らかにした。それは、プロの講師から共に学ぶという形式により成立した。次に、受講者に対して、運動の効果測定の結果を学生がプレゼンテーションしたり、学生が講師となり運動指導を実施したりすることは共育と共学を強化することが分かったが、学生のさらなるキャリア形成の助力には結びつかないことも分かった。</p> <p>今回は、1) 健康増進実習という授業の運営に関しフィットネスクラブを模擬して行うことがキャリア形成に結びつくか、2) 2-3年生の学生に対しては、ポートフォリオによる自主学習がキャリア形成に結びつくか、また、3) 受講者に対しては、地域で指導できるように具体的に指導練習をさせることにより地域のリーダーとしての自覚をもつことにつながるのか検討することを目的とした。</p> <p>計画・方法</p> <p>1) 生命健康科学部の学生を対象にした。その理由は、生命健康科学部が、医学の基礎と生命科学技術(科学的根拠)を基盤に人々の健康に貢献することを第一に掲げている学部だからであった。2) CAACの1年次共通科目“健康増進実習”を利用し、半年間、高齢者と共に実習を受け、さらに指導や身体測定結果の管理およびそのフィードバック(プレゼンテーションを含む)に関わった。3) フィットネスクラブを想定して、店長や社員などの役割を各自に与えた。4) ポートフォリオの説明を学生にして、課題を各自に与えた。5) 受講者に対しては、運動指導ができるようになるような授業構成とした。6) 授業の最後に、学生と受講高齢者双方にアンケートを実施し、この取り組みが両者にどのような効果があるのか調査した。</p> <p>堀田(代表者)が研究全般を担当し、對馬(分担者)がCAAC受講者の対応を行った。</p>					

成果

スポーツ保健医療学科 6 名 (3 年 3 名、2 年 3 名) が本プロジェクトに参加した。対象となった CAAC 授業の受講生は、17 人であった。授業は 16 回実施され、初回と最終回が体力測定であった。

地域のリーダーとしての自覚をもつことができたかという CAAC 授業の受講生を対象にした質問では、53% が自覚をもてた回答し、自覚を持てなかった人数をわずかに上回った。実際に運動指導を行ったかという質問に対しては、29% が家族や身内などに実施し、12% が家族や身内以外に実施したと回答したが、残りは運動指導には至らなかったという結果になった。

参加学生に対しては、1. 全く思わない、2. 思わない、3. どちらでもない、4. 思う、5. とても思う、の 5 件法にて質問した。フィットネスクラブを模擬して行うことが、キャリア形成に役立ったかという質問の平均値は、4 (思う) であり、各自に役割を与えることで、キャリア形成に結び付くことが分かった。一方で、ポートフォリオに関しては、学生 6 名のうち実施したのは 3 名であり、1 名がキャリア形成に役立つと答え、2 名はどちらでもないと回答した。

今後 CAAC 受講生に対しては、地域のリーダーとして運動指導を実施するためのスキルなどを具体的に教え、自信をつけさせる必要がある。また、学生に対しては、キャリア形成を強化するための策を新たに検討していく必要がある。

活動成果の公表

中部大学 第 3 回地域創成メディエーター学生発表会 (プラス・エクスペッション) 2016 年 12 月 7 日

- ・藤本匠「私の目指す道」
- ・伊藤玄貴「将来の私と地域スポーツ」
- ・加藤エミリ「私の未来像」

第 21 回日本体力医学会東海地方会学術集会 2017 年 3 月 19 日 (予定)

- ・對馬明、堀田典生、他 「中部大学におけるリカレント教育前後の受講者の体力レベル」

平成28年度 地域志向教育研究経費 成果報告書

活動項目	⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化				
フリガナ氏名	ヨコテ ナオミ 横手 直美	所属・職名	生命健康科学部保健看護学科・准教授		
活動課題	中部大学で開催する乳児と母親に対する子育てセミナーによる看護学生の共学・共育プロジェクト				
活動組織 (分担者は本学の専任教員(助手を含む常勤の専任教員), 協力者はそれ以外。)					
フリガナ氏名	代表者及び分担者	所属・職名	現在の専門	学位	役割分担
ヨコテ ナオミ 横手 直美	代表者	保健看護学科・准教授	母性看護学	修士(保健学)	研究総括、子育てセミナー講師
ヤマシタ メグミ 山下 恵	分担者	保健看護学科・講師	母性看護学	修士(看護学)	子育てセミナー講師、学生統括
オカクラ ミサキ 岡倉 実咲	分担者	保健看護学科・助手	母性看護学	学士(看護学)	子育てセミナー運営、データ収集・分析
ハシモト タエコ 橋本 妙子	分担者	保健看護学科・助手	母性看護学	修士(看護学)	子育てセミナー運営、データ収集
活動経過と成果					
<p>1. 平成28年度の活動概要</p> <p>ベビービクスと子育てミニレッスンによる体験型子育てセミナーを計画どおり、春日井市近隣に在住する乳児とその母親12組を対象に4回実施した。開催日時と各回のテーマを以下に示す。なお、4回目の応急手当では、スポーツ保健医療学科の北辻耕司助手が講師を務めた。</p> <p>第1回 6月24日(金): ベビービクス+ママ&ベビーのためのアロマ 第2回 7月22日(金): ベビービクス+赤ちゃんの発育発達とおもちゃ 第3回 8月25日(木): ベビービクス+おっぱいと離乳食 第4回 9月7日(水): ベビービクス+赤ちゃんのもしものときの備え</p> <p>2. 子育てセミナー運営要領</p> <p>運営は、研究代表者・分担者と母性看護学領域のゼミ生を中心とした学生11名で行った。開催に先立ち、学生にスタッフマニュアルと会場の配置図を配布し、運営方法について説明した。次いで、ベビービクスのDVDを視聴しながら、赤ちゃん人形で実際にベビービクスを練習した。当日は、各回3~4名の学生が交替で学生スタッフとして活動した。事前準備として、会場設営、参加者の受付、乳児の体調確認(体温・体重測定)を行い、セミナー開始後は学生一人が4~5組の母子を受け持ち、母親に声をかけたり、母親が子育てミニレッスンに集中できるようにベビーシッター役を担った。各回の終了後はショート・ミーティングを行い、学生の感想や意見を聞いて改善に活かした。</p> <p>3. 国際交流</p> <p>第2回はYale University(USA)の助産学専攻学生2名と教員1名の参加見学があり、セミナー終了後に、感想や意見を交換した。両国の学生は、乳児の母親が置かれている昨今のストレスフルな状況や地域におけるサポートの必要性という共通点に気づくことができていた。</p>					

4. 活動報告会の開催

大学祭期間中の11月3日(木)コモンズセンターにおいて、本学の学生や一般来校者に対して、「子育てセミナー活動報告会」を行った。学生は子育てセミナーでの学生の役割と当日の様子、学生たちの気づきや学びをパワーポイントで発表し、達成感や充実感を得た。

また、本年度のセミナーに参加された母子も来場いただき、学生らはさらに成長した乳児の様子に驚いていた。

活動成果の公表

- 大学ホームページでの公表

http://www3.chubu.ac.jp/faculty/yokote_naomi/kosodate_seminar/2016_kosodate_seminer/

- 専門雑誌の誌上発表

中部大学で開催する子育てセミナーによる看護学生の共育・共学プロジェクトの実践。
助産雑誌. Vol. 71(1): 58-63.

- 学会発表 (予定)

大学主催の子育てセミナー運営への参加が看護学生におよぼす教育効果。
山下恵、横手直美、岡倉実咲. 第31回日本助産学会学術集会、徳島、2017年3月.

3. 評 価

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（平成25年度採択）

平成28年度

春日井市における世代間交流による
地域活性化・学生共育事業

内部評価結果

平成29年2月

中部大学 地（知）の拠点整備事業 内部評価委員会

平成28年度「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」に関する内部評価結果の報告

内部評価委員会
委員長 山下興亜

平成28年度「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」に関する内部評価委員会を開催し、事業の進捗状況とその成果についての報告をもとに内部評価を行いました。その結果の概要を記して報告といたします。

記

1. 内部評価委員会の構成

<内部評価委員>

(職指定)

議長	学 長	山 下 興 亜
委員	副 学 長	太 田 明 徳
同	同	岸 田 民 樹
同	同	石 原 修
同	学 監	足 達 義 則
同	工 学 部 長	竹 内 芳 美
同	経営情報学部長	辻 村 宏 和
同	国際関係学部長	河 内 信 幸
同	人文学部長	速 水 敏 彦
同	応用生物学部長	宗 宮 弘 明
同	生命健康科学部長	近 藤 孝 晴
同	現代教育学部長	花 井 忠 征
同	全学共通教育部長	松 井 恒 雄
同	国際人間学研究所長	林 上
同	学生教育推進機構長	(足達義則)
同	教育支援機構長	杉 本 和 弘
同	研究推進機構長	(太田明德)
同	事務局 長	川 尻 則 夫

(学長指名)

同	法人本部長	大 西 信 之
同	入学センター長	(石原修)
同	国際センター長	(石原修)
同	学生部長	栗 濱 忠 司

同	教務部長	(足達義則)
同	キャリア部長	宮本 順一
アドバイザー	常勤理事	中島 泉

<地域・国際連携教育研究センター地域連携教育研究推進部>

地域・国際連携教育研究センター長(学監)	松尾 直規
地域・国際連携教育研究センター副センター長	倉根 隆一郎
地域連携教育研究推進部 部長	庄山 正志
同 課長	丹羽 ゆかり

<オブザーバー>

春日井市企画政策部企画政策課 課長補佐 田口 純 氏

2. 内部評価委員会の開催

日 時 : 平成29年1月25日(水) 13:30~14:45
 場 所 : 中部大学2号館2階 中会議室
 出席者 : 山下(委員長)、太田、岸田、石原、竹内、辻村、河内、速水、宗宮、
 近藤、花井、松井、林、杉本、栗濱、宮本、中島

3. COC事業の活動の計画と成果についての評価

(参照:別紙1「平成28年度地(知)の拠点整備事業(COC事業)内部評価委員会資料」)

1) 教育事業の計画と成果

(1) 地域連携教育改革・教育システムの構築

評価:「地域創成メディエーター」の育成が本事業の中心課題であり、学士課程修了者の特異技能として修得させるべく本教育課程の改善にも取り組み、所期の目的を達成しつつある。引き続いての本事業目的を全学に向けて周知徹底させる必要がある。

(2) 報酬型インターンシップ活動

評価:職業・仕事の現実を現場で実体験することにより学士課程教育を補完し、学から職への円滑な移行を支援するため、全国で最初の大学教育活動の展開を目指した事業であり、すでに4年間の活動実績を有し、所期の目標の実現も見えてきている。しかし、まだ試行の段階であり、継続することが必要である。

2) 研究事業の計画と成果

(1) コミュニティ情報ネットワークの構築

評価:情報・知識基盤社会の進展に向けて、地域住民に対するコミュニティ情報ネットワークを構築し、IT化により地域の知的・文化的な豊かさづくりを目的として、高校生・学生・地域住民等多様な人々を巻き込んだ活動を展開している。まだ、具体的な成果をまとめる段階には到っていないが、COC事業が地域の各分野、領域に浸透しつつあることは評価できる。

(2) 生活・住環境を考えるまちづくり活動

評価：地域住民の安心快適な生活を保障する社会基盤の整備充実、つまり安全安心の地域づくりを人材育成の面から追求する課題であり、正課教育および課外活動の仕組みを活用して挑戦している。この事業へ参加した学生の意識向上は確かだが、この事業の発展のためには系統的な事業計画と実施方法の策定が必要である。

3) 社会貢献事業の計画と成果

(1) 高齢者－学生交流 Learning Home Stay (LHS) 活動

評価：学生の成長発達は経験に裏打ちされた多様な知との交流によって促される。とりわけ高齢者との実生活を通しての接触・交渉は、暗黙知、生活知、総合知の学習を加速する。このために、本事業は企画されたものであり、学外の知的資源を活用することで人間的な幅と深みを有する人間力の涵養を目指している。まだ試行段階であるが、この目標は時宜を得たものであり、さらに辛抱強く実践される必要がある。

(2) CAAC(シニア大学)の活動

評価：平成28年8月に1期生の修了式を行い、9月から新しく2コース体制を実施し、1年生20人、2年生13人、計33人が在籍している。シニア大学受講生と学部学生が世代の壁を越えて介護職員初任者研修講座を受講し、シニア大学受講生6人、学部学生8人が講座を修了した。今後はより多くのシニア大学受講生と学部学生が相互に伸びるような企画が必要である。

(3) 高蔵寺ニュータウンのキャンパス化活動

評価：平成27年4月から地域連携住居の運用を開始し、今年度52人の学生が入居し、内4人が戸建の住居をシェアしている。本学の学生寮生向け及び一般学生向け入居説明会を開催している。高蔵寺ニュータウン内の自治会行事にも入居学生が参加しながら、地域住民との交流を通して、高齢化したニュータウンの活性化にも貢献しつつある。居住条件の整備を含め学生の学習環境の改善方策として、さらに本活動を推進していく必要がある。

4. 総合的な評価

1) 文部科学省による「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」の面接評価への対応と結果

(参照：別紙2「平成28年度評価 面接評価事前質問に対する回答」)

[追加] (参照：別紙3「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+) 平成28年度評価 評価結果について」)

平成28年9月28日(水)17:10からCOC事業推進委員会事務局(学術振興会)のもとで「評価・面接評価」が開催され、本事業から5名が出席し、本事業の全体の成果、今後の見通し等を中心に説明した。これに対し、面接委員3名から種々の質問があった。その要点は、多様な事業を展開している、また、全国的にも先端的な企画を実施している、この点は評価に値する。しかし、事業全体としての求心力が

見えにくくなっており今後まとめる努力が必要、とされた。

[追加] 平成29年2月13日に地(知)の拠点大学による地方創生推進事業委員会(委員長:細谷廣美)から評価結果について文書で提示された。総合評価はB判定で、「一部は計画以上の取り組みもあるが、助言等を考慮し、一層の努力が必要」との指摘がなされた。

2) 内部評価委員会の総合評価

内部評価委員会は、年1回開催の委員会において、単年ごとの事業計画とその実践結果について評価してきた。具体的には、各事業ごとについての活動経過と実績の報告を受け、各委員のこの事業に対する理解と認識を深めることを重視し、その上でそれぞれの委員の職責をもとにして評価を進め、その結果は委員会記録として残してきた。今年度は中間評価として、委員会での検討・議論をもとに委員会として各事業ごとに具体的に評価し、報告書にまとめて、最終年度の活動の発展に資することにした。特に指摘したい点は、本COC事業の5年間の成果を今後本学でどのように継承発展させるべきかについて、まずCOC事業関係者の中で十分検討し、関与していた地域の機関や関係者に納得の得られる結論を得ることである。その上で、大学に対して方針等を提案することである。

以上

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」平成28年度 事業計画と成果

平成28年度 計画(補助金調書より)	平成28年度 成果
<p>I. 全体事業活動の計画</p> <p>以下の1)～3)の項目は25年度～27年度に引き続き28年度も通年で実施する。</p> <p>1) COC推進委員会を隔月定期的に開催する。 2) COC委員会の各WG活動を推進する。</p> <p>以下の項目は27年度の成果を踏まえ、28年度4月以降も実施を計画する。</p> <p>3) 「地(知)の拠点整備事業」の学内と春日井市住民への広報周知活動を行う。 4月 COCパンフレット(主に学外者向けの紹介)を検討する。 6月 COC活動報告会を開催する。 9月 COC外部演者による市民フォーラムを開催する。</p> <p>4) 春日井市との定期的協議の場を設定する。 4月～春日井市と6ヶ月毎に相互の活動を報告し、また必要な問題については協議する。</p> <p>5) NPO団体との定期的協議の場を継続維持する。 4月～ NPO連携協議会を隔月に開催する。</p> <p>6) 地域志向教育研究経費による教育研究を推進する。 4月 研究費申請公募開始 5月 研究費申請の受付締め切り、審査、採択 6月 研究開始 3月 研究報告書提出</p> <p>7) 地域創成メディエーターを育成する。 8) 内部評価委員会を開催する。 1月 内部評価委員会を開催する。 9) 外部評価委員会を開催する。 2月 外部評価委員会を開催する。</p>	<p>I. 全体の活動の成果</p> <p>1) COC推進委員会は隔月定期的に7回開催し、学内外でのCOC事業を推進した。 2) 各WGにおいて委員長・副委員長を任命し、各WG活動をより一層活性化させた。 3) 「地(知)の拠点整備事業」の学内と春日井市住民への広報周知活動 (1)27年度活動報告会(6月29日 一般市民、学生、教職員58名) (2)COCホームページの拡充 (3)中部大学フェアにブース出展(9月15日15名来場;シニアカレッジ1期生も説明に参加) (4)地域連携市民フォーラムの開催(10月22日 一般市民131名、教職員・学生41名) (5)市民アンケートの実施(10月22日 一般市民141名回答)</p> <p>4) 春日井市との協議 春日井市職員がCOC事業のイベント等に参加すると共に文部科学省中間評価に向けての会合等により連携を強固に深化させた。</p> <p>5) NPO連携協議 NPO側の委員交代。NPO委員と大学側委員(7名)から成る協議会を6回開催。</p> <p>6) 地域志向教育研究の実施 公募を行い、22件の研究課題を採択し、地域志向教育研究活動を支援した。</p> <p>7) 地域創成メディエーターの育成 昨年度までの立ち上げ期間から、平成28年度はCOC事業における地域創成メディエーターの本格実施年度として具体的アクションプランの下育成を図った。 資格取得に必須の正課科目10単位取得済み学生をリストアップし、フォローアップするとともに取得を促した。センター長、副センター長、推進委員、地域志向研究担当教員、事務局が一丸となって着実に実施することができた。</p> <p>8) 内部評価委員会 学部長会メンバー及び春日井市からなる内部評価委員会(1月25日)を実施。</p> <p>9) 外部評価委員会 大学・研究機関、行政(愛知県、春日井市)、企業・商工会議所の有識者からなる外部評価委員会(3月2日)を開催。</p>
<p>II. 主として教育事業の計画</p> <p>①地域連携教育改革・教育システムの構築</p> <p>現在まで進めてきた教育改革をさらに発展させ、地域社会に役立つ人間となるための行動計画を持てるよう、全学共通教育の科目として新たに『地域共生実践』を設置し、学部・学科にも地域志向関連科目を設置し基礎教育と専門教育を交互に発展的に教育し、地域社会再構築のために必要な実践的人材を育成するための教育改革を目的とする。さらに最終的に中部大学が認定する“あてになる人間=『地域創成メディエーター』”の育成を目的とする。</p> <p>通年：地域創成メディエーターへの導き(春・秋オリエンテーション・メディエーターサロン・関連講義内)、AL/TBLの勉強会の実施、必要なパンフレット等の改正/作成・HPでの案内等の掲載。</p> <p>4～8月：地域共生実践を3講義・並列開講の運営。27年度作成テキストの活用と修正案の収集。評価基準の再検討、担当教員・協力者の勧誘と増員。</p> <p>8～9月：春学期地域共生実践のふりかえり、評価基準の再確認、共有化。秋学期新規担当教員・協力者への実施説明。</p> <p>9～3月：地域共生実践を春学期同様の規模にて開講・運営、ふりかえり、評価基準の再確認。担当教員・協力者の勧誘。</p> <p>11～12月：地域創成メディエーター学生発表会(+エクспレッション)を開催し、地域創成メディエーターを認定する。</p>	<p>II. 主として教育事業の成果</p> <p>①地域連携教育改革・教育システムの構築</p> <p>通年：地域創成メディエーターへの導き(春・秋オリエンテーション・関連講義・委員会内)パンフレット等の微修正・HPでの案内等の掲載を実施した。メディエーターサロンの代わりに、教務支援課の協力を得て、3年生の履修状況を把握したうえでの各関連講義内および関連委員会、学科での「地域創成メディエーター」勧誘に注力した。AL/TBL関連の勉強会に3件参加。「地域共生実践」におけるコンテンツの見直しと整理、追加を行った。担当者の希望があれば講義を録画し、DVDにて配布し講義運営に活用した。新規講義担当者には、過去のDVDなどを活用し、運営説明を随時行った。引き続き春日井市役所との連携講義を実践した。担当教員は随時募集した。</p> <p>4～8月：「地域共生実践」を3講義・並列開講にて運営した(履修者合計166名、教員数10名)。テキストの活用と修正案の収集を行った。評価基準および使用コンテンツを再検討し、コンテンツ(大切なもの)を1つ新規導入した。新規講義担当教員向けにテキストの説明会を開催した。</p> <p>8～9月：春学期地域共生実践のふりかえり、評価基準の再確認、共有化を行った。</p> <p>9～3月：「地域共生実践」を5講義・並列開講に増設して運営した(履修者合計340名、教員数12名)。コンテンツ(プレゼントカード)を1つ新規導入した。ふりかえり、評価基準の再確認を行った。</p> <p>11～12月：地域創成メディエーター学生発表会(+エクспレッション)を開催し(2016年12月7日・20日)、地域創成メディエーター86人を12月末時点にて認定。秋学期終了後には60名が追加認定予定(合計146名予定)。応募者が多かったため、ポスター発表もしくは口頭発表とし発表会も2回に分けた。学生個人レベルではプレゼンテーション力等の向上が認められ、全学的には本資格およびCOC事業の認知度アップに繋がった。一方で、認定学生の質の補償が今後の課題として認識された。</p>

平成28年度 計画 (補助金調書より)	平成28年度 成果
<p>②報酬型インターンシップ</p> <p>春日井商工会議所と連携協定を締結し、単なる就労ではなく、人材育成プログラムとして意識的に社会の現場で学生を教育するインターンシップ型の就労システムの構築を目的とする。</p> <p>通年 学生の居住地に近い地域での企業開拓について検討する。 4月 医療系での連携について議論する。 学生への説明会を開催する(7月、9月、11月)。 新生にパンフレットを配布する。 10月 特命教授の会を開催する。 10月 座談会を実施する。 3月 特命教授の会を実施する。</p>	<p>②報酬型インターンシップ</p> <p>1) 学外特命教授の会を2回行った。 2) 春日井商工会議所と2回(8月、3月(予定))打ち合わせを行った。 3) 春学期 夏季休暇 秋学期 医療型報酬型インターンシップ(春季休暇を除く)合計70名参加した。内訳は春学期 14名、夏季休暇 29名、秋学期 9名、医療系 18名である。 4) ポイント制度により報酬型インターンシップ修了証書を授与することを決定し、本年度は2名に授与する予定である。 5) 学内説明会を4回(4/6(参加学生数:68名)、6/24(参加学生数:55名)、9/21(参加学生数:15名)、12/21(参加学生数:14名))開催した。 6) 参加者との意見交換会を2回(5/9(参加学生数:12名)、10/20(参加学生数:8名))開催した。 7) ポスターを作成し、学内に掲示している。 8) 学生向けのパフレットを作成し、全学生に配布した。 9) 参加企業が70社(1月12日現在)に増加した。</p>
<p>Ⅲ. 主として研究事業の計画</p> <p>③コミュニティ情報ネットワーク</p> <p>地域住民に役立つコミュニティ情報ネットワークを構築し、地域がIT化により豊かで便利な地域として発展するための情報システムの開発研究の推進。</p> <p>1) 医療情報システム 通年 プログラム仕様の検討と改良・検証</p> <p>2) シニア大学講義映像配信 通年 10回/年の頻度で、学生とIT企業とのミーティング・開発</p> <p>3) NPO活動情報発信システム 通年 NPO 向けホームページの機能強化 10, 2月 地域広報誌の作成、発刊(年2回を予定)</p> <p>・子育て支援相談会及び「プチ勉強会&交流会」 4月 情報共有に向けての調整会議(まちのエキスパネット事務局と) 5月 子育て支援相談会 第3回「プチ勉強会&交流会」 6月 情報共有に向けての調整会議(まちのエキスパネット事務局と) 8月 子育て支援相談会 第4回「プチ勉強会&交流会」 9月 第3回子育て支援相談会 11月 子育て支援相談会 第1回「プチ勉強会&交流会」 2月 子育て支援相談会 第2回「プチ勉強会&交流会」</p> <p>・高校生向け部活動支援 6月(3月)高蔵寺高校にて、全運動部員を対象としたスポーツ障害予防の講義・実技講習会 5月~3月 過去に講習会を実施した高校の各運動部顧問・部員を対象にスポーツ障害予防の講義・実技講習会(予定3回)</p>	<p>Ⅲ. 主として研究事業の成果</p> <p>③コミュニティ情報ネットワーク</p> <p>【イベント】 通年 ・シニア大学の講義映像配信システム開発に関する講習会(参加学生数:最大で8名)企業で活躍する本学のOBエンジニアを講師として年間で8回実施。 NPO法人 まちのエキスパネットの方々と様々に議論を実施。年間で1回。 5月 ・子育て相談会プチ勉強会&交流会(参加学生数:3名) 6月 ・部活動支援講習会(参加学生数:4名) 高蔵寺高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。(生徒数:約180名) 7月 ・部活動支援講習会(参加学生数:9名) 春日井西高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。(生徒数:約150名) 8月 ・子育て相談会プチ勉強会&交流会(参加学生数:4名) 9月 ・子育て相談会を実施。(参加学生数:5名) 10件の相談を8名の専門スタッフで対応。 11月 ・まちこみゅニュース編集に向け、地元のデザイナーによるデザイン講習会を2回実施。(参加学生数:最大で12名) ・子育て相談会プチ勉強会&交流会(参加学生数:4名) 12月 ・部活動支援講習会(参加学生数:10名) 高蔵寺高校の運動部を対象にスポーツ障害予防方法の講義と実技講習会を実施。(生徒数:約140名) 1月 ・「まちこみゅニュース Vol.5」を発行(参加学生数:2名) 2月 ・子育て相談会プチ勉強会&交流会開催予定(参加学生数:5名) 3月 ・「まちこみゅニュース Vol.6」を発行予定(参加学生数:2名)</p> <p>【概要】 ・NPOの活動情報発信と情報共有のためのホームページを更新すると共に、本ホームページの周知と電子媒体が苦手な方々への対応として紙媒体の「まちこみゅニュース」を発行した。(参加学生数:2名) また、デザインの知識を習得させるため講習会を開催した。(参加学生数:12名) ・発達障害児を持つ家族など、子育てをサポートする活動として「子育て相談会」を9月に実施した。(参加学生数:5名、卒業生参加者数:3名) その他、4回の「子育て支援相談会プチ勉強会&交流会」を実施。(参加学生数:16名の予定) ・シニア大学を充実するためのアプリ開発に関する勉強会を実施した。(参加学生数:8名) ・医療情報共有サービスシステムにおいて、他職種連携に向けた説明会にて講演を実施した。 ・春日井市内の高校にて、部活動時のケガ防止やケガ発生時の対応に関する講習会やアンケートを実施した。(参加学生数:10名)</p>

平成28年度 計画 (補助金調書より)
<p>④生活・住環境を考えるまちづくり</p> <p>春日井市のまちづくりの課題解決に協働し、地域住民が安心快適な生活を送れるようになることを目的に社会基盤の整備、地域環境の改善に関する地域開発研究</p> <p>1) 意見交換会などの実施 5月 高蔵寺ニュータウンの課題についての住民との意見交換 10月 高蔵寺ニュータウンの問題解決法についての住民との意見交換</p> <p>2) まちづくり講演会(仮称)の開催 まちづくり講演会を開催して、全学部の学生に「まちづくり」の意義とそれへの参加方法を学ぶ機会をつくる。 5月 まちづくり講演会を公開で実施 11月 まちづくり講演会を公開で実施</p> <p>3) タウンウォッチングの実施 6月 まちづくり勉強会(学内)の実施 10月 タウンウォッチング(学外)の実施</p> <p>4) 正課並びに自主活動の強化 通年 演習・ゼミナールのテーマとして現実の地域課題を取り上げる。 通年 卒業研究のテーマとして地域課題に対する解決方法に取り組む。 通年 地域の人々との十分なコミュニケーションを交えた学生の自主活動を促進する。</p>
<p>IV. 主として社会貢献事業の計画</p> <p>⑤高齢者－学生交流LearningHomestay(LHS)</p> <p>高齢世帯や独居高齢者の見守りや生活支援を目的に若者による高齢者との交流や同居の実践</p> <p>通年 世代間交流会・LHSへのシニアの参加呼びかけ(広報活動) LHSの充実(オリエンテーション・教育指導の充実) KCGサークル(地域発の健康教室)運営サポート</p> <p>5月 地域連携教育セミナー 6月 世代間交流会開催(災害に備えて) 7月 世代間交流会開催(栄養教室) 7月～10月 スマホ&タブレット入門講座開催 8月 LHS お見合い交流会 福祉用具体験セミナー 9月 LHS・LHV実施 10月 世代間交流会開催(体力測定会) 11月 LHS 体験報告会・ホストファミリー懇談会</p>

平成28年度 成果
<p>④生活・住環境を考えるまちづくり</p> <p>1) 正課としての活動 ・建築学科「ゼミナールA」において現地見学会実施。2016年5月7日 計画的につくられた良好な住宅地として、岐阜県可児市桜ヶ丘ハイツ(桜ヶ丘、阜ヶ丘、桂ヶ丘)、名古屋市緑区伝治山グローブガーデン野並南、緑区篠の風2丁コープビレッジ篠の風、天白区八事下池住宅地を現地見学。【参加学生6名】 ・都市建設工学科「部門創成B(3年生科目)」において現地視察等を実施。 9月27日 名古屋都市センター視察 【参加学生18名】 10月11日 高蔵寺ニュータウン視察 【参加学生19名】 11月1日 地域経済分析システム(RESAS)活用講座(愛知県の出前講座)【参加学生24名】 11月15日 春日井市中心部とJR春日井駅視察【参加学生19名】</p> <p>2) 課外活動の実施 ・5月29日 国土交通省中部地方整備局等主催、平成28年度木曾三川連合総合水防演習・広域連携防災訓練(愛知県稲沢市・サリオパーク祖父江)に院生・学生参加。 ・6月15日 豊川市中心市街地地区(豊川稲荷地区、諏訪地区)のまちあるき及び懇談会の開催。中部大博士後期課程の院生、豊川市役所職員、地元商店主との交流。 ・10月15-16日 春日井まつり わいわいカーペンターキッズ 【参加学生4名】</p> <p>3) 講演会の開催 ・11月12日 『少年～高校野球選手を障害から守る』(不言実行館 アクティブホール)【参加学生85名】</p> <p>4) 発表 ・6月30日 「第26回環境工学総合シンポジウム2016」において、院生が春日井市との共同研究成果(廃食油の回収とそれを原料とするBDFの製造・利用の研究)を発表。</p>
<p>IV. 主として社会貢献事業の成果</p> <p>⑤高齢者－学生交流LearningHomestay(LHS)</p> <p>1) 世代間交流会への参加実績 5月 第1回 教育セミナー 参加者 45名(内 学生 27名) 6月 第2回 災害に備えて 参加者 65名(内 学生 48名) 7月 第3回 栄養教室 参加者 38名(内 学生 21名) 11月 第4回 体力測定会 参加者 145名(内 学生 82名)</p> <p>2) スマホ&タブレット入門講座 7月・8月 全4回 受講者 7名×4回 (28名)</p> <p>3) 福祉用具セミナーの開催 8月 介護機器(リフト)体験 参加者 16名(内 学生 5名)</p> <p>4) お見合い交流会 8月 参加者 29名(内 学生 15名)</p> <p>5) LHSの実施 9月 1世帯へ男子学生1名がLHSを実施(2泊3日) 6世帯へ学生14名が2～3名ずつでLHVを実施(各世帯とも2回ずつ訪問)</p> <p>6) LHS・LHV報告会の開催 11月 報告者 シニア7名、学生13名 参加者 35名(内 学生20名)</p> <p>7) KCGサークル 4月～翌年3月 2回/月で開催</p>

平成28年度 計画（補助金調書より）	
<p>⑥CAAC（シニア大学）</p> <p>高齢者の健康づくりや再雇用のための技術資格取得を目的としたシニア世代への実践教育。</p> <p>4月 1・2期生の後期授業（春学期）を開始する。</p> <p>5月 3期生の募集を開始する。</p> <p>7月 3期生の合否決定する。</p> <p>8月 1期生の修了式を行う。</p> <p>9月 3期生の入学式を行い、2・3期生の授業（秋学期）を開始する。</p> <p>10月 オリエンテーション合宿を実施する。</p> <p>通年 既存のカリキュラムの充実を図る。</p> <p>通年 地域在住のシニアに対して体験入学の開催など、シニア大学を身近に感じさせる企画を実施する。</p> <p>通年 募集パンフレットの配布先を検討する。</p>	
<p>⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化</p> <p>高齢化で衰退した高蔵寺ニュータウンを活性化する目的で中部大学のキャンパス機能を高蔵寺ニュータウン内に拡大し、地域と大学が融合した若者も生活する場とする。</p> <p>1) 春日井市・URとの連携による地域連携住居の充実</p> <p>通年 URおよび春日井市と打ち合わせを行う。</p> <p>4月 新入生に対して、パンフレット配付する。</p> <p>10月 地域連携住居およびシェアハウスの学生への説明会を開催する。</p> <p>2) コミュニティプラザKozojiの充実</p> <p>通年 高蔵寺NTのコミュニティプラザKozojiにおける地域連携を充実させる。</p>	

平成28年度 成果	
<p>⑥CAAC（シニア大学）</p> <p>1) 4月に1・2期生の後期授業（春学期）を開始した。7月には3期生の合否決定を行い、8月には1期生の修了式を行った。また、9月に3期生の入学式を行い前期授業（秋学期）を開始した。</p> <p>2) 新1年生から新コース（国際・地域・文化コース）を設置し、2コース体制となった。それに伴うカリキュラムの改正をおこなった。</p> <p>3) 新たな募集パンフレットを作成し、新1年生（3期生）の募集を行った。その結果、20名が新たにシニア大学受講生となった。2年生13名、1年生20名での計33名が今年度在籍者数である。</p> <p>4) 新1年生のオリエンテーション合宿を行った。</p> <p>5) 体験入学を随時開催する旨、さまざまな媒体を通して地域の方に案内を開始した。</p> <p>6) 介護職員初任者研修講座をキャリア支援課と共催し、シニア大学授業の一環としてCAAC受講生6名が、学部生8名とともに受講した。シニア大学受講生と学部生は世代の壁を越えて、協力し合いながら講座を修了した。</p>	
<p>⑦高蔵寺ニュータウンのキャンパスタウン化</p> <p>1) 平成27年4月から地域連携住居の運用を開始し、本年度は52名の学生が入居し、内4名が戸建の住居でシェアしている。（2017年1月10日現在）</p> <p>2) コミュニティプラザKozojiを高森台団地004号棟1階の旧医療施設跡に設置し、平成27年10月から一般向けに開放している。一般利用者の利用日は土日に限定し、本年度は228名の利用があった。</p> <p>3) 地域連携住居の実施にあたり、新入生宛入学手続関係書類に案内を同封した。</p> <p>4) 学内説明会を全学向けに3回、学生寮寮生向けに1回の合計4回（7/20（参加学生数：8名）、11/30（参加学生数：4名）、1/25、11/24に学生寮退寮予定学生（参加学生数：49名））実施した。</p> <p>5) 中部大学KNT創生サポーターズCU+（通称CU+）は3回自主イベントを開催した。</p>	

平成28年度評価 面接評価事前質問に対する回答

中部大学：「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」

1. 達成目標の進捗状況（評価要項2.I.及びVII.①）

- ・達成目標（別添資料の別-4、表1）の一部を申請時（選定時の留意事項①における回答）から修正されている理由について説明いただきたい。

平成27年度以降は、平成26年度までの実績をみながら、実態に即して事業毎に目標数を再度見直すことにしたため、一部の事業で達成目標の若干の修正が行われた。例えば、シニア大学では、当初学生にシニア大学の「地域創成メディエーター学」も受講させることを想定したが、実際には学生にとって正課教育にあたる授業と重なって受講できる者が少なかったため、SAとしての参加だけに限定した目標数とした。

3. 教育カリキュラム改革を含む事業目標達成のための各種取組（評価事項2.III.及びVII.③）

- ・学部・学科の正課の地域関連科目（学部ごとに2講義科目、1実習科目、1ゼミナール）の導入の進捗状況及び全学総合教育の発展的改組の進捗状況について説明いただきたい。

各学部・学科は、以前から、地域関連の内容を含んだ授業科目を多く開講してきている。この地域関連科目は、限られた授業科目に固定化するのではなく、毎年学生が修得した科目について内容を精査し、地域関連科目として認定することとしている。従って、どの学部・学科も2講義科目、1実習科目、1ゼミナール以上の地域関連科目を有している。

既存の「全学総合教育科」を発展的改組して、組織及び役割を拡充し、COC教育の中核的推進組織とした。ここにCOC担当の専任助教を含む10名以上の教員を置いて、「地域共生実践」及び他の地域志向科目の実施及び全体のとりまとめを行ってきた。なお、本教育科は、全学共通教育全体に関わる役割も担っているため、名称はもとのままとした。

- ・学生の学修行動の変化等を分析できる経年的な調査の実施は行っているのか説明いただきたい。

「地域共生実践」では、学期の授業開始前後で同一アンケートを行い、学生の学習行動の変化を見ている。また、地域志向科目全体の大きな動きとしては、年度毎の地域志向科目の受講学生数、正課外教育事業への参加学生数、地域創成メディエーターの資格取得学生数（平成28年度以降）等を調査し、学生のCOC活動への関心度や参加度の経年変化を見ている。

4. 自治体等との連携・評価（評価要項2.IV.及びVII.④）

- ・計画書に記載の春日井市からの高蔵寺NT内の施設の一部の無償提供は計画どおり行われているか説明いただきたい。

当初、シニア大学は高蔵寺NT内の施設を無償借用して開校する計画を考えていたが、シニア大学に入学してくる高齢者の方々は若い学生との交流を強く希望していたこと、施設借用は不確定要素もあって最終合意まで時間がかかったこと等もあって、シニア大学は平成26年9月に中部大学内に設置した。従って、高蔵寺NT内の施設の無償提供は受けていない。

3 評価

- ・アンケート結果等を踏まえ、インターンシップの拡充や「地域共生実践」科目の内容充実等を具体的にどのように行ったのか説明いただきたい。

報酬型インターンシップでは、学生への認知度アンケート調査を行い、その結果を考慮して拡充に努めた結果、平成27年度の参加学生は103名に達し、その後さらに増加している。

学生への授業アンケートでは、課題が明確、理解し易い内容・説明、学生の反応を見ながらの授業運営等を望む意見が多くだされている。「地域共生実践」では、それらを考慮しつつ、アクティブラーニング方式を取り入れた授業内容の作成と充実を図り、教科書も作成してきた。

- ・評価委員会の評価及び評価に対する対応について説明いただきたい。

外部評価委員会からは、中部大学のCOC事業に対して、全体として順調に進み、概ね当初の計画通りの成果が得られているとの評価を得ている。また、指摘事項には適切に対応し、次年度の活動に反映させている。例えば、COC教育の中核となる「地域共生実践」に関する助言に対しては、受講学生数の増加及び授業内容の改善・充実を、報酬型インターンシップに関しては、受け入れ企業の拡充や環境改善等を図ってきた。

- ・自治体・企業等からの物的・金銭的支援（同窓会からの奨学金以外）はどの程度あるのか説明いただきたい。

報酬型インターンシップでは、自治体・企業から学生への報酬の支給、キャンパスタウン化における高蔵寺NTへの学生の入居では、住居費の軽減やエアコン等の設置という形で、自治体・企業等から物的・金銭的支援を受けている。人的支援に関しては、春日井市から地域共生実践の講師派遣や他のCOC活動への参加協力等、全面的な支援を受けている。

- ・地域住民を対象としたLHSの調査について、どのくらいの住民に調査票を送り、回収率はどのくらいであったのか説明いただきたい。

高蔵寺NTを主体とする地域住民への平成24年度末の調査はかなり大規模に行い、調査票を13,299世帯に配付し、その回収率は21.1%であった。

その他

- ・世代間交流やニュータウンのキャンパスタウン化は現下の社会情勢に適した取組である。その点において、関係者の意見をどのように改善に結びつけているか説明いただきたい。

世代間交流活動としては、学生・高齢者・LHS事業で多くの交流会や講演会を開き、シニア大学では高齢者とSA学生の直接的な交流を行って、関係者の意見をくみ上げ、適切な課題選定や活動内容の充実等に結びつける努力を行ってきている。

キャンパスタウン化では、UR、高蔵寺NTの居住者、学生との話し合いを通じて意見をくみ上げ、高蔵寺NTへの学生入居者の増加及び学生の地域活動への参加の促進を図っている。また、高蔵寺NT内に設置した交流活動拠点の「コミュニティプラザ Kozoji」では、部屋の使用者に日報を記してもらい、その意見や要望を活動改善に活かしている。

以上

平成29年2月13日

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」
平成28年度評価対象事業
ご担当者 殿

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業委員会
委員長 納谷 廣美

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」
平成28年度評価 評価結果について

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業委員会では、平成25年度及び平成26年度に選定された事業について、各事業の進捗状況や成果及び事業の継続・発展性の見直しなどを評価し、適切な指導・助言を行うとともにその成果を社会に公表し、全国的な波及につなげることを目的として、平成28年度評価を実施いたしました。

貴事業に係る評価結果については、別紙のとおりです。

なお、留意事項及び参考意見は、当該事業限りに開示するものとなっております。

また、本評価結果は文部科学省へ報告するとともに、進捗状況報告書の「事業概要」と併せて日本学術振興会ホームページ(<https://www.jsps.go.jp/j-coc/index.html>)で公表する予定です。

【連絡先】

独立行政法人日本学術振興会人材育成事業部大学連携課
地(知)の拠点大学による地方創生推進事業委員会事務局
〒102-0083
東京都千代田区麹町5-3-1 麹町ビジネスセンター6F
電話 : 03-3263-1757 FAX : 03-3237-8015
E-mail : coc-plus-jsps@jsps.go.jp

平成28年度評価 評価結果の総括

平成29年2月13日

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業委員会

地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）は、平成25年度から「地域のための大学」として、各大学の強みを生かしつつ、大学の機能別分化を推進し、地域再生・活性化の拠点となる大学の形成に取り組んできた「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」を発展させ、平成27年度からCOC+として地方公共団体や企業等と協働して学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取組を支援することを目的として実施されている。

COC+に選定された各事業は大学COC事業の取組内容を包含していることから、平成25年度に51件、平成26年度に25件、それぞれ大学COC事業として選定された事業についても併せて評価することにより、COC+を効果的に実施していく上で参考とするために平成28年度評価を実施した。

平成28年度評価の評価結果は、「S：計画を超えた取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を十分に達成することが期待できる。」が7件、「A：計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。」が40件、「B：一部で計画と同等又はそれ以上の取組もみられるものの、計画を下回る取組であり、本事業の目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要である。」が23件、「C：取組に遅れが見られる等、総じて計画を下回る取組であり、本事業の目的を達成するためには、当初計画に基づく目標の早急な達成や事業規模の縮小等に向け、事業計画の抜本的な見直しが必要である。」が6件である。

計画どおり順調に進捗している例として、以下のとおり本事業による成果が見受けられる。

- ・教育・研究・社会貢献にわたる目標の達成に向けた取組に加え、多くの事業において地域志向科目の全学必修化に向けた取組も見られる。
- ・教育カリキュラム改革を含む事業目標達成のための各種取組においては、学生及び教職員に対するアンケートが実施され、取組の成果と関係者の意識の変化を把握するとともに、本事業の意義の周知を図る試みが見られる。
- ・自治体等との連携・評価においては、自治体等の職員が授業に参加するなど連携関係の強化が進んでいる。
- ・実施体制や事業の継続・発展及び平成27年度の取組と今後の見通しにおいては、当初計画を超えた地元企業や他大学との連携など、COC+への接続を見据えた取組が見られる。

一方で、以下のとおり計画の見直しが求められる点も見受けられる。

- ・目標達成が危ぶまれる点
- ・学長によるリーダーシップ等の学内の実施体制や外部評価の仕組みが明確でない点
- ・地域志向の教育研究での成果を人材育成へ結びつける過程が不十分である点

今後、社会が急激に変化する中で持続的な成長と発展を築くため、大学等には主体的に考える力を持ち、社会の様々な課題を解決に導く多様な人材を養成することが求められている。そのため、事業を実施する大学等においては、今回の平成28年度評価で示された課題の解決に向けて対応するとともに、COC+大学であるか参加校であるかを問わず、COC+への展開を見据えて着実に事業を進展させた上で、事業の成果を広く他大学や自治体、企業等へ波及・還元させることを期待する。

平成28年度評価 評価結果

選定年度	平成25年度	整理番号	41
大学等名称	中部大学		
事業名称	春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業		

（「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業委員会」による評価）

<p>（総合評価）</p> <p>B：一部で計画と同等又はそれ以上の取組もみられるものの、計画を下回る取組があり、本事業の目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要である。</p>
<p>【コメント】</p> <p>【優れている点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム改革について真摯に取り組んでいる。また、地域との連携による教育プログラムや課外プログラムも多彩かつ特色があり評価できる。 ・春日井市との連携が進んでいる。また、学外者の評価によるインターンシップの質保証も行われており評価できる。 <p>【改善を要する点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各プロジェクトは意義があり優れているが、「地域創成メディエーター」の輩出に偏っており、事業本来の目的であるカリキュラムの体系化の取組がやや弱いため、改善が必要である。 ・「地域創成メディエーター」とは何をどの程度できる人材像を想定するのか、明確にすべきである。 ・大学戦略や人材育成像等に照らし、自大学の強みを明確にする方向でカリキュラム設計を進め、それらを丁寧に構造化・システム化していくことが望まれる。

4. 新聞記事

**地域活性化7事業
昨年度の成果報告**

中部大

中部大(春日井市)が地域活性化に向けて二〇一五年度に取り組んだ活動の報告会が六月二十九日、同大であった。

中部大は文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に選ばれている。シニア大「アクティブアゲインカレッジ」、学生と高蔵寺ニュータウン(NT)の高齢者との交流など七事業の成果が披露された。

教育と学生生活の場を高蔵寺NT内に設ける「キャンパスタウン化」では、桜井誠工学部教授が、学生が地域の催しに参加する試みや、新たに設けた交流

キャンパスタウン化の取り組みを報告する桜井教授
春日井市松本町の中部大で



施設を紹介した。
学生の地域参加につ

いて「非常に熱心で住民の評価も高い」と総括。本年度は一五年度の二倍となる四十人余りの学生が関わるため「意識の変化など、問題が生じないよう議論が重要」と課題を挙げた。

2016年7月1日(金) 中日新聞 朝刊・近郊版・20面

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

学生と絵手紙文通を

絵手紙を見せ、学生との文通
を呼び掛ける福田准教授⇨春
日井市松本町の中部大で



中部大が高齢者募集

中部大（春日井市）
生命健康科学部の福田
峰子准教授（左）が、介
護や看護の仕事を目指
している学生と絵手紙
の文通を月二回程度し
てくれるお年寄りを募
っている。

度から始まった「つな
ごう絆の輪！」と題し
た学生プロジェクトの
一環。
一人暮らしの高齢者
らに絵手紙を送り、孤
立予防につながるの
が狙い。一年目は県内
外から五十八人の申
し込みがあった。福田

准教授は「学生からの
絵手紙に元気づけら
れたという人は多い。
また、相手のことを考
えて絵手紙を書く経

験は学生にとっても
有益だと思つ」と話し
ている。☎福田准教授
|| 0568 (51) 94
89

（佐久間博康）

2016年7月9日（土） 中日新聞 朝刊・近郊版・20面

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

学ぶ喜び 地域に還元

五十歳以上の学び直しや第二の人生への挑戦を支援する中部大（春日井市）のシニア大コアクティブアゲインカレッジの一期生十一人が来月、二年制の「健康・福祉コース」を修了する。学生たちは地域社会の役に立つ人材になろうと意欲を燃やしている。

「視野が広がり、地域 くなった」。自動車部品のために働く気持が強い。一年前に退職



中部大のシニア大1期生 来月修了

して入学した崎田純さん（左）は、笑顔で話す。シニア大の講義をきっかけに障害者福祉に関心を持ち、四月から市内の福祉施設で週二回、自動車での送迎の仕事をしていく。



ほかにも、障害見向けの放課後等デイサービスの運営に参加する人、自宅の庭に地域住民が交流するサロンを開く準備を進めている人もいる。

健康・福祉コース長で生命健康科学部の対馬明教授（左）は「それぞれが地域社会にどうしたら役立てるか自覚を持って考え、方向性を描きつつある」と手応えを語る。

九月には、シニア大に「国際・地域・文化コース」が新設され、一期生十一人のうち九人が再入学する。対馬教授は「大」という環境で学び続けられる喜びを感じている人が多い。彼らの思いに応え、活躍できる場所づくりを支援したい」と話している。

記者の目

一期生たちは今後、中部大が春日井市高森台十に設けた交流施設「コミュニティプラザKozō」の運営や施設を拠点にした地域貢献活動を担う予定。英会話教室を開く計画などがある。既に障害者福祉の仕事をはじめている崎田さんの

交流施設の運営や地域貢献活動について話し合う一期生たち。春日井市松本町の中部大で

2016年7月24日（日） 中日新聞 朝刊・近郊版・22面

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

仲間と学んだ成果発表

中部大のシニア大1期生



学習成果を発表する1期生＝
春日井市松本町の中部大で

中部大（春日井市松本町）のシニア大学アクトイブアゲインカレッジの1期生十一人による学習成果発表会が二十七日、同大であった。

1期生は二〇一四年九月に入学し、二年制の健康・福祉コース「健康・福祉コース」を受講。健康増進や高齢者ニュータウンのまちづくり、介護などについて勉強してきた。今回は少人数の演習で取り組んだ内容を二グループに分かれて発表した。高野信枝さん（左）と高森台三さんのグループは「音楽と健康」

をテーマに、演奏体験を通して健康にとつての音楽の役割を考察。「音楽活動は老化防止や健康に結び付く。人生を豊かにしてくれる」などと結論づけた。八月三十一日に修了式がある。
（志沢あれん）

2016年7月29日（金） 中日新聞 朝刊・近郊版・17面

*この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。

「最新情報 学べて感謝」

中部大 シニア大1期生修了式



修了証を受け取る1期生たち
＝春日井市松本町の中部大で

中部大（春日井市松本町）で三十一日、五十代以上の学び直しや第二の人生のスタートを支援するシニア大「アクティブアゲインカレッジ」一期生の修了式があった。

二年間、「健康・福祉コース」を受講した五十八〜七十五歳の十人が出席。松尾直規カレッジ長（地域・国際連携教育研究センタ

ー長）から修了証を受け取った。

代表して長浜弘美さん（同市東野町）が「最新の情報を学ぶことができたことに感謝し、学生とともに社会貢献活動に精進していきま

す」と述べた。修了生たちは、NPO法人を立ち上げたり、障害者施設に再就職したり、

新たな一歩を踏み出している。

シニア大は、大学の地域活性化への取り組みを支援する文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」の一環。今月から始まる本年度は「国際・地域・文化コース」が加わり、東アジアの環境問題や県内の歴史文化を学ぶ。

（浅野有紀）

第二の人生は学問の道

入学式に臨む3期生たち
春日井市松本町の中部大で



中部大 シニア大3期生入学式

第二の人生を支援す「カレッジ」三期生が入る中部大（春日井市松本町）のシニア大学「カレッジ」の三期生入学式が十四日、同大であり、二十人が学生生活のスタートを切った。

新入生は五十六〜八十三歳の十一人。先月卒業したばかりの一期生九人は、今期から新設された「国際・地域研究センター」に再入学した。松尾直規カレッジ長が「学生と地域が互いに刺激し合う相乗効果を期待しています」とあいさつ。学生を代表して春日井市高森台一の飯島富喜子さん（八七）が「学生の本分を全うします」と誓った。

（浅野有紀）

ビタミン豊富野菜弁当

きょう、あす販売 中部大生が考案

管理栄養士を目指す

中部大（春日井市松本町）の学生が、ビタミンCたっぷりの「栄養弁当」を考案した。十四、十五日の午前九時から同市松本町一のJA尾張中央ファーマーズマーケット「ぐらびいひろば」で、限定二十食を販売する。

県の「産地直売所を交流拠点としたにぎわい創出事業」の一環。お年寄りの利用が多い同ひろばに若者を呼び込もうと、管理栄養科学専攻の学生二十七人が取り組んだ。校内で学生百人にアンケートを取ったところ、野菜をあまり食べない理由に「調理法が分からない」を挙げた人が目立った。調理法を簡単に伝えられる方法として、おかずの品数が豊富な弁当を開発することにした。食材はいずれも、ひろばで販売されている野菜。風邪予防に良いとされるビタミンCが豊富な、わさび菜のおひたしやカブの漬物、カボチャと小豆のいとし煮など五種類の副菜のレシピを作った。主人は、大葉と梅を巻いた鶏肉と、知多産のホウボウのムニエルの二種類から選べる。弁当



弁当のレシピを考案した宮田さん（後列右）ら学生たち＝春日井市松本町の中部大で

は、ひろば内の食堂く、の午前十時～正午に「た一年の宮田早記さん」の木ランチ」のスタは、栄養バランスに配慮した四種類の鍋レシピを配布し、学生が買物物のアドバイスもする。

さらに十四、十五日

弁当の開発に携わっ

（浅野有紀）

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（平成 25 年度採択）
『春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業』
平成 28 年度 成果報告書

発行日 2017（平成 29）年 3 月

編集発行 中部大学 地域連携教育研究推進部
〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200 番地
電話：0568-51-1763 FAX：0568-51-4659
<http://www3.chubu.ac.jp/coc/>

印刷 木野瀬印刷株式会社
〒486-0958 愛知県春日井市西本町三丁目 235 番地